

天は虚に宿る 連載 1

クラスの仲間は、貴子に頼りきっていた。数学の吉村は意地が悪いことで知られている。今度の宿題もそうだ。誰もが解けないような問題を宿題として課したてきた。吉村は、東都大学の教養部で数学を教えている。吉村が担当している大学数学が必修なのだが、いつも履修者の半分以上が落第させられる。学生が苦しむのを楽しんでいるとしか思えない。

聞くところによると、性格の悪さを毛嫌いされて、理学部の数学科から追い出されたい。それ以来、教養部で教えていることを根に持っているようなのだ。いつも、誰かに毒付いている。しかも、教え方が最悪である。数学を教えているのに論理性がない。そのくせ、学生が解けそうもない問題を、たくさん抱えていて、それを宿題や試験に出すのだ。

しかし、今年のクラスには異変が起きていた。清洲貴子の存在である。貴子は、吉村の意地悪い問題でも、簡単に解いてしまう。

さらに、貴子の説明は明快である。吉村に聞くよりもはるかに分かりやすい。中間試験の時も、貴子が吉村の出題しそうな問題を予測して、解答まで用意してくれた。そのおかげで、クラスの大半が合格点をもらった。

吉村は、生徒がカンニングしたに違いないと徹底的に調べたが、そんな証拠は出てこなかった。おそらく、貴子のおかげで期末試験も乗り切ることができらるだろう。クラスのみんなどは貴子のことを数学の天才と呼んでいる。

平と貴子

賀白平は、やっとのことで、東都大学に合格した。実は、賀白の両親は、ふたりとも国際的に有名な学者である。

父は、いまアメリカの大学で物理を教えている。重力研究の第一人者であり、将来のノーベル賞候補と期待されている。

母は、アメリカの大学で遺伝子工学の研究をしていたが、日本のある大学がバイオ関係の新学科を創設する際に、招聘されて帰国した。平は、その時、高校一年生であったが、悩んだ末に母と一緒に帰国した。平は、アメリカで生まれ育ったが、母は、平は日本人なのだから、日本語を習ったほうが良いと、小さい頃から日本語をみっちり教えてくれた。しかし、ハンディはぬぐえず、日本の高校では苦労した。

それでも、平は、数学や物理は得意であったので、見事、日本の最高学府で

ある東都大学に合格できたのである。平は、自分の数学のレベルはかなりのものと思っていたが、吉村の講義で挫折してしまった。日本語がよく分からないこともあるが、吉村の教える数学がまったく理解不能であったのだ。

平が入った理系のクラスは五〇人ほどであったが、女の子が一〇人もいた。最近では、東都大学の理系に入学する女子の数がかなり増えているらしい。平は、その中で、とびきり可愛い女性に目が奪われた。それが、清洲貴子であった。貴子の飛び抜けた美貌は大学の中でもかなり目立ったようで、早くもミス東都大学の噂が流れている。

平が驚いたのは、貴子の美貌だけではなかった。そのずばぬけた才能である。吉村が一度、講義時間に誰もが解けないような問題を出したことがある。吉村はいじわるそうに

「こんな問題がとけないようじゃ、全員落第だな」

と言って、にやにや笑っている。くやしいが、平には手に負えそうもなかった。すると貴子が手を挙げた。当時は、クラスのみんなどは貴子の実力を知らなかったのので、何を無謀なと思った。というのも、吉村は生徒を徹底的にいじめるのが好きなのだ。前にも、自信ありげに出てきた生徒が黒板の前で、解法の途中でひっかかったら、クラス全員の前でけなされた。

「お前のような奴は、ただ目立ちたいだけのいかさま野郎だ」

そのうえ、最後には、そんな奴は人生の落伍者だとまで言って、散々いたぶった。その学生はショックでしばらく大学を休んだほどである。それからは、かなり自信があるものでも吉村の挑発に乗るものはいなくなった。

しかし、貴子は、その吉村に敢然と勝負を挑んでいる。平と同じようにクラスのみんなども心配顔である。ひとり、吉村だけが、いい獲物が自分から飛び込んできたと喜んでいる。

ところが、驚いたことに貴子は、あっという間に問題を解いてしまった。吉村も困惑顔である。というのも答えはあっているからだ。ただし、自分が持っている模範解答とは解き方がかなり違っている。吉村は、答えがあっているのは偶然だろうと思い、どういたぶってやろうかと思案した。

そして、おもむろに模範解答を黒板に書きだした。そして、どうだ恐れ入ったかという顔でクラスを見渡した。この時、平は、吉村のそれよりも、貴子の解答の方がはるかにエレガントであることが分かった。クラスの何人かもそれに気づいたようだ。

「おい清洲。いいか、数学というのは答えがあっているだけではだめなんだ。途中の導出過程が重要になる。お前の解答は、答えはあっているが、考え方が

全然なつとらん」

すると貴子は

「わたしの解答のどこがためなのでしょうか」

と逆に聞き返した。

吉村が返答に困っていると、貴子は驚くことを言った。

「私は先生の解答の方がだめだと思います」

クラスのみんなはあっけにとられた。吉村も口をあぐり開けている。

「なっ、なんだとう！」

「先生の解答は、たぶんマグレガーの教科書の 98 年版をそのまま書き写したものだと思われませんが、その方法は汎用性がなく、この問題にしか使えません。彼も、そのことに気づいたようで、2002 年版では、私が解いた方法に改めています」

吉村は、どう返答してよいのか戸惑った。

すでに、多くの学生が、貴子の指摘が正しいことに気がついていた。それにもかかわらず、吉村は事態が飲み込めていない。はからずも、自分のレベルの低さを露呈したことになる。

吉村は、つぎの講義までに調べてくると言って講義室を出て行った。しかし、つぎの講義の時間には、とぼけたようにその弁明をしなかった。貴子の指摘どおりだったからだろう。それから、吉村は、貴子を目の敵のようにして、わざと、講義の途中で難しい問題を課したりしたが、貴子はこともなげに解答した。

吉村としては、自分に恥をかかせた貴子を何とかぎゃふんと言わせたかったのだろうが、問題を出すためには、自分が、その解法を理解していなければならぬ。吉村程度が分かる問題は、貴子にとっては、とるに足らないものばかりであったのである。

きっかけ

清洲貴子のことは、クラスの男子学生がみんな気にかけていた。クラスというよりは、大学全体といったほうがよいかもしれない。その美貌もさることながら、貴子はスタイルも抜群であった。身長は 170 センチ近くあり、脚が長く、八頭身である。そのうえ、成績も抜群である。貴子は、数学だけではなく、あらゆる科目で天才的なひらめきを発揮した。教授のあいだでも、その実力は、かなりの評判になっているようである。

男子学生は、貴子のことが気になってしょうがないようであるが、まさに高

嶺の花で、近寄り難い存在である。誰が、最初に貴子と交際するかが、注目の的となっていた。

賀臼は、小さい頃から自分の容姿にはコンプレックスを持っていた。両親は、美男美女の組み合わせで、ふたりとも背も高い。ところが、賀臼はいまだに160センチ程度しかない。その一方で、頭まわりは63センチもあり、まさに頭でっかちを絵に描いたような存在である。だから、アメリカにいてもガールフレンドとつきあったことがない。アメリカでは中学生ぐらいになると、結構、ガールフレンドと遊ぶことが多いが、賀臼には、そんな経験はなかった。

母の帰国と一緒に日本に帰ってきたのは、漠然と、自分の容姿に対するコンプレックスがあったからである。そんな賀臼にとって、貴子は、雲の上の存在で、付き合える対象などとは思ってもいなかったのである。野球部で活躍している四年生が、貴子に声をかけたが、振られたらしいという噂を賀臼は聞いていた。

賀臼は、毎日のように図書館に来ていた。実は、賀臼はスポーツも苦手だった。小さい頃から、容姿にコンプレックスがあるので、なかなかスポーツにもなじめないのだ。

父は、かつて野球選手で、かなりのところまで行ったらしい。一時は、プロに進むか、学問に進むかで迷ったほどらしいのだ。母も、かつてはテニスの有名選手で、国体で優勝したこともあるらしい。親戚は、賀臼のことを劣性遺伝と呼んでいる。しかし、そんな賀臼を両親はずっと、可愛がってくれた。

そんな賀臼がまわりのみんなと競争して勝てるのが唯一勉強だった。日本語ができないというハンディがあるにもかかわらず、東都大学に合格できたのも、その才能のおかげである。

しかし、賀臼は上には上があるということを東都大学に入って思い知らされた。清洲貴子の存在である。貴子には、数学だけでなくあらゆる科目で適わなかった。得意の英語ならば勝てるだろうと思ったが、貴子は英語もべらべらだけでなく文法も完璧だった。聞くところによると、フランス語、スペイン語、ドイツ語に中国語もこなすらしい。

賀臼は「努力に勝る天才なし」という言葉が好きだった。容姿は生まれながらのことなので、努力してもどうしようもない。しかし、学問だけは別である。努力さえすれば一番になれる。そう信じて、いままで頑張ってきた。それが、清洲貴子の存在で、もろくも崩れようとしている。賀臼は必死になって勉強していた。

しかし、吉川が出す数学の問題を、いとも簡単に解いてしまう貴子の頭脳は

すごい。今日も、賀臼は図書館にこもって、貴子の解法を復習していた。いま、読み返してみても、本当によくできている。それを、あの短時間でやってのけてしまうのだから、貴子の頭の中はどうなっているのだろうか。賀臼が、頭を悩ませていると、上から声がかかった。

「あなたは、確か、同じクラスの賀臼君よね」

問題から顔を上げると、そこには清洲貴子の顔があった。あまりにも真近なので、ガウスは困惑した。こういうきれいな人は、意識せずに、男が意識するようなことを平気でする。こんな近くまで顔を寄せられたら、無理をすればキスだってできる。

貴子は、そんな賀臼の動揺には気づかないように、隣の席に座った。

「前から思っていたんだけど、あなたの名前っておかしくない？」

賀臼が、あの清洲貴子が自分のようなさえない男のことを気にしていたと聞いて驚いた。

「何がおかしいんでしょうか」

「まず、賀臼という苗字がめったにある名前ではないわよね。それに、賀臼は、あの有名な数学者のガウスのことではないの？」

このひとは、何を言い出すんだろう。どうして、自分が、あの偉大なガウスと同じ名前でなければならないのか。それに、ガウスはドイツ人で、日本人ではない。

「まったく関係ありません」

賀臼は、少しそっけないかなと思ったが、ぶっきらぼうに答えた。

「そうか残念。きっと何かあると思っていたんだけど」

何が残念なのだろうか。賀臼は疑問に思った。

「だけど賀臼君ってまじめね。いつも勉強しているでしょう。感心してしまう」

「ええ、これしか取り柄がないものですから」

と、これまたぶっきらぼうに答えてしまった。

「ねえ、賀臼君にお願いしていいかしら。時々、ここに遊びにきてもいい。何か賀臼君を見ていると、他人とは思えないの」

そう言って、貴子は賀臼の手を握った。頭の中から手の先までしびれるとは、こんな感覚をいうのだろうか。賀臼は、いままで感じたことのないような感覚を味わった。

「もちろん、いいですけど」

賀臼はこういうのがせいいっぱいだった。

「うれしい」

そういと、貴子は去っていった。

賀臼は、いったい何が起きたのか自分でも分からなかった。全大学のあこがれの的の貴子が自分から、話しかけてきてくれただけではなく、賀臼と、時々会いたいと言っているのだ。

驚くことに、次の日も、その次の日も、貴子は図書館にやってきて、賀臼と話していった。次第に、ふたりの図書館デートは、クラスの話題となっていた。

男は

「まさか、あのださい賀臼が」

と最初は信じなかったが、実際に、ふたりが図書館でデートしている場面を見せられては、信じざるを得なかった。しかし、物好きな貴子が、からかっているだけだろうというのが大方の見方であった。だれも、貴子が本気で賀臼を好きになるとは思っていないのだ。

交際

賀臼が貴子と会う場所は、最初のうちは、図書館だけであったが、次第に、外でも会うようになっていった。普通のカップルのように、映画をみたりディズニーランドにも出かけた。貴子は、男の子とデートするのは生まれてはじめてだと喜んでいて、信じられないことに、誰もいままで誘ってくれなかったというのだ。本当だろうか。何か理由があるのか。賀臼は、あまりにも貴子が近寄り難い存在だったからだろうと思った。

貴子と出会って、賀臼に異変が起きた。何と、大学生というのに背が伸び始めたのである。最初は、自分でも気づかなかったのだが、ある日、母の理恵が「平、最近、背が伸びたんじゃないの」と言ってきた。

「母さん、そんなことはないよ。だって、僕はもう大学生だよ」

「でも、私よりも高くなったんじゃない」

賀臼が、笑いながら、母の横に並ぶと、驚いたことに母よりも確かに高くなっている。理恵の身長は一六四センチだから、すくなくとも四センチ以上伸びたことになる。

「何か、最近なかった」

と母は心配そうに、賀臼の顔を覗き込んだ。賀臼が、最近、思いあたることと言えば、貴子とつきあい出したことだが、それは、母には内緒にしている。

「多分、いままでは、図書館にずっと座って本ばかり読んでいたのが、最近は、外で運動するようになったからかな」

賀白は、貴子の勧めで、一緒にテニスやボーリングなどのスポーツも始めた。最初は、まったく下手で貴子に適わなかったが、少し練習すると、みるみる上達した。今では、貴子がテニスでは賀白に手も足もでない。

驚くことに、賀白の身長は一年で 10 センチ以上も伸び、二年生に進級する頃には、174 センチとなって、貴子よりも大きくなっていった。

再会

二年生になったある日、貴子が賀白にこんなことを言ってきた。

「ねえ、今度、賀白君の家に一度遊びに行ってもいい？」

賀白は、少し考えてから、こう答えた。

「ああ、もちろんだよ。うちは、父がアメリカにいたので、母と二人暮らしだけど、母に伝えておくよ」

「そう、ありがとう」

貴子は、とても嬉しそうだ。賀白は、貴子とつき合っていることは、母には内緒にしてきた。いままで、女の子とつき合ったことなどないし、母に紹介するような仲とは考えていなかったからだ。

しかし、最近、貴子とつきあうようになって、賀白にはわずかながら自信が芽生えてきた。貴子と一緒に勉強しているせいか、数学や物理の成績もかなりよくなっている。自分の容姿に対するコンプレックスもかなり失せてきていた。

母に、今度ガールフレンドを紹介したいというと、本当に驚いたような顔をした。まさか、自分の息子がそんなことになっているとは思ってもよらなかったようだ。ガールフレンドを家に連れてきたいと言うと、もっと驚いたようだった。それでも「大歓迎よ」と喜んでくれた。理恵も、それなりに賀白の容姿のことは心配していたようなのだ。それが、最近は、背も急に伸び、顔立ちも、わが息子ながら、かなり精悍になってきている。少し、ほっとしていたようなのだ。

当日、賀白は、貴子を家の最寄駅まで迎えに行った。

「賀白君のお母さんは、私を見たらどう思うかしら」

賀白は返答に困っていた。一応、つきあいはしているものの、貴子が自分の恋人と言える存在なのかが、よく分からない。自分に自信がついてきたとしても、やはり貴子は、大学ではアイドル的存在で、高嶺の花である。まわりの男子学

生も、賀臼と貴子がつき合っていることは知っているが、正式なカップルとは認めていない。

「きっと、びっくりすると思うよ。まさか、自分の息子が、こんな素敵なガールフレンドとつき合っているとは思ってもいないだろうからね」

貴子はちょっぴり嬉しそうな顔をした。

母は、貴子をお大歓迎してくれた。最初に、貴子を見た母は、かなり驚いたようだ。まさか、平が、こんな美人とつき合っているなどとは思ってもいなかったらしい。貴子は、平よりも母と話す方が楽しそうに見えた。よく見ると、貴子は母にどことなく似ている。知らないひとが見たら、貴子と理恵が母子と思うだろう。

貴子は、八時すぎまで賀臼の家で話しこんだ。というよりも理恵と話している時間が全体の九割だったかもしれない。理恵も、貴子を自分の娘のように可愛がった。男の子しか育てたことのない理恵には、貴子との会話が、とても新鮮で楽しいようだった。

帰り際に、理恵は

「貴子ちゃん、ぜひ近いうちに、また遊びにいらして」

などと言っている。賀臼は、何か自分のガールフレンドを、自分の母親にとられたような複雑な気持ちだった。

駅まで、貴子を送っていくと、その道すがら、貴子はこんなことを言った。

「賀臼君のお母さんて、私が想像していたような素敵なひとだったわ。お知り合いになれてとても嬉しい」

賀臼はふと思った。貴子は自分ではなく、母親の理恵に近づくために、自分を利用したのではないだろうか。

夢

賀臼は、自分が夢の中にいることに気づいていた。それでも、夢なのか現実なのかが分からない。自分は暗いところに居る。父と母を捜したが、どこにも居ない。賀臼はとても心細くなった。自分は、両親に置き去りにされたのだろうか。すると、かすかに遠くに明かりが見えてきた。父と母だ。ふたりが、助けに来てくれたに違いない。賀臼は明かりに向かって走って行こうとした。

ところが、途中でふたりが子供を抱えていることに気づいた。とても、いとおむような顔をして女の子を抱えている。驚いたことに、その子は、貴子だった。幼い顔をしているが、貴子に違いない。賀臼は両親が貴子に奪われたよ

うな気がして、泣き出してしまった。

すると、母が、心配することはないと賀臼を手招きして呼んでいる。賀臼は走った。愛する両親のともに、そして、母の手にすがろうとしたとき、母の手が変化しはじめた。それは、急に精気を失い、醜い老婆の手になった。そして、その顔は、まさに鬼の形相である。賀臼は、思わず手を離した。

ふと気づくと目が覚めていた。体には、汗をびっしょり掻いている。今の夢はいったいなんだったのだろうか。賀臼は、最近、同じような夢を何度も見ていた。母が貴子に取られてしまう。そんな深層心理が、こんな夢に現れてくるのだろうか。

最近、賀臼は憂鬱だった。貴子は、相変わらず、魅力的で、賀臼にとっては、もったいないくらいのガールフレンドなのだが、問題は母との関係であった。理恵は、すっかり貴子が気に入ったようで、週末ともなると、貴子を家に呼んだ。最初は、賀臼も、貴子が家に来るのを歓迎していたが、次第に、それが苦痛になっていった。何しろ、貴子が家に来て話す相手は理恵である。賀臼のことは眼中にないといった様子だ。賀臼は、母親とガールフレンドが一緒に奪われたような、そんなさみしさを感じていた。そして、最近、同じ夢を何度も見るようになったのだ。

不思議なことに、貴子と出会ってから、賀臼の身長は伸び続けていた。今では180センチを超えている。そして、さらに驚くことに、頭の大きさがどんどん小さくなっていった。かつては60センチ以上あったものが、今では58センチしかない。確かに、バランスはよくなっているのであるが、それが、賀臼には気味が悪かった。

貴子に感想を聞くと

「賀臼君が格好よくなっているんだからいいんじゃない」

とあまり気にしていない様子である。

そして、その日がやってきた。父が久しぶりに日本に帰ってきたのである。日本で、開催される国際会議に招待されたのだ。賀臼に会った父の流人は、とても、驚いたようだ。背が伸びたうえに、顔も小さくなっている。しかし、顔は、息子の平そのものである。

久しぶりの一家団欒になると平は喜んだ。家族水入らずで食事会と期待したが、今回は少し様子が違っていた。母の理恵が、貴子も呼ぼうと言い出したのだ。賀臼は、今日ぐらいは、貴子抜きで、食事をしたかったが、せっかくの母の好意を無駄にははいけないと思い、貴子を誘った。貴子は

「賀臼君のお父さんに会えるなんて感激だわ。とても素敵なお父さんでしよう

ね」

と言って、喜んでいる。その時、ふと賀臼は思った。そう言えば、貴子の家族には一度も会ったことがない。今度は、ぜひ紹介してもらおう。

食事会は、和気藹々と進んだ。正確には、平以外の三人にとってという形容詞が必要になる。父の流人は、貴子のことをひと目で気に入ったようだった。

「平にこんな素敵なガールフレンドができるとは本当に嬉しい」

と喜んでいる。貴子は

「お父様の名前は、流れる人と書いて『るうと』と読むんですね」

と言って、しきりと感心している。

「ええ、私の父が数学者で、息子にも数学に関係した名前をつけたかったようなのです。でもルートなんていう名前はどうかと思います。私も、小さい頃は、この名前のせいで、ずいぶんいじめられましたから」

「もしかして、苗字の賀臼というのは、あの数学者のガウスにちなんだものではないのですか？」

貴子は、目をきらきら輝かせながら聞いている。

「まさか、そんなことはないでしょう。われわれは日本人ですから」

父は、平と同じようなことを答えている。

「それから、賀臼君の名前の平なんですか。このタイラは、もしかしてテラーあるいはオイラーを意識されたのではないですか」

貴子は、数学の巨人の名前をふたり挙げた。平は、そんなことは思ってこともなかった。すると、父はあっさりこう言った。

「いや、参りましたな。まさに、その通りです。自分がルートという名前を付けられて苦労したにも関わらず、息子には、同じようなことをしてしまいました。実は、オイラーという数学者にちなんでいるのです」

「でも、平だったら、誰も気づきませんよ」

と貴子は言った。

賀臼が入り込む隙がないほど、貴子は、父や母と話をしている。まるで、三人が本当の親子のようだ。賀臼は、最近、よく見る夢のことを思い出して、不吉な予感がした。

天は虚に宿る 連載 2

貴子の秘密

父と母は、貴子をわが子のように可愛がっている。賀臼は面白くなかった。そして、貴子は意外なことを話し出した。

「実は、賀臼君にも内緒にしていたことなのですが、私には本当の両親がいないのです」

賀臼は驚いた。なぜ、そんな話を貴子はするのだろうか。賀臼の両親も驚いている。

「今、私が一緒に住んでいるのは、叔父夫婦なんです。叔父は、亡くなった母の弟ということですが、私には、とても血のつながっているようには思えないのです。ふたりは、私にとってもよくしてくれるのですが、何か遠慮があるのです」

賀臼は心配になって

「清洲さん。そんな大事な話をここでしてもいいのかい」

と聞いた。

すると貴子は

「賀臼君のご両親と会ったら、何か聞いて欲しくなったの。ごめんなさいね。もし、ご迷惑でしたら、ここで話は終わりにします」

すると、母の理恵は

「いえ、せっかく貴子さんが話し出したのですから、最後まで聞きたいわ」

と言った。すると、貴子は意を決したように話し出した。

「叔父の話によると、私の両親は、私がまだ赤ん坊の頃に、ある事件に巻き込まれて死んでしまったらしいのです。どんな事件だったのか、いくら叔父に聞いても教えてくれません。」

貴子は少し悲しそうな顔をした。賀臼は、貴子が気の毒になった。両親の顔を見たことがないのだ。

「叔父は、まだ小さかった私を引き取って、いままで育ててくれたのです。叔父夫婦には子供はいません。だから、私がひとり娘みたいなものです。叔父は、とても裕福でしたので、私は、何不自由なく育てられました。それでも、なぜか違和感がとれないのです。」

「違和感？」

「ええ、例えば、時々私に対して敬語を使うのです。敬語を使ったあとは、慌

てたようにいつもの叔父に戻るのですが、とても不自然です。それに、可愛がってくれてはいるのですが、どこか、私を警戒しているようなところもあります。」

賀臼はそんなばかなことはないだろうと思った。それに、もし本当の身内でないとしたら、苦労してまで育ててくれるはずはない。

「小学校五年生の時に、変な思い出があります。その時は、夢と思っていたのですが、最近、それは、現実ではないかと思うようになりました。」

夢と聞いて賀臼はドキッとした。最近、自分も変な夢を繰り返し見ている。

「私は、目隠しをされて馬の背に乗りながら、山道を登っていくのです。目的地につくと、そこで目隠しをとられました。すると、そこには、赤い大きな社があって、その中に私は連れていかれました。白いひげをはやした年寄りが居て、私を抱きとめてくれました。私は、最初はとっても怖かったのですが、なぜかその胸に抱きしめられたとたん、とても安らかな気持ちになりました。その時、もしかしたら、この人は私のおじいちゃんかもしれないと思いました。残念ながら、私の記憶はそこで止まっています」

なぜ、貴子が、夢ではなく、それが現実と思うようになったかと言えば、それ以降の大きな変化らしい。

「あれは、ある儀式だったような気がします。なぜなら、それを機会に、私の成績はみるみる上がっていったのです。自分でも、不思議なくらい、よくできるようになりました。算数で、はじめて満点をとった時は、とても嬉しかったのですが、それ以降は、満点をとるのが当たり前になりました」

貴子は、それまでは勉強ができる生徒程度であったのが、それ以降は天才と呼ばれるようになったという。

ここで、貴子は思い切ったように話した。

「その社で、私はある文字を見ました。それはかすかな記憶だったのですが、大学に入って確信したのです。あれは賀臼という文字です」

賀臼は、なぜ貴子のような美人が、みずから自分に近づいてきたのかの理由をさとした。貴子は、賀臼という名前の秘密を知りたかったのだ。賀臼の家に来たいというのも、その秘密を探るためだったのだ。賀臼は、少し、さびしい気もしたが、かえって謎がとけてほっとした気分だった。

「清洲さんが、僕みたいな人間に近づいてきたのは、それが理由だったのだね」と賀臼はつぶやいた。

「もちろん、それもあるけど。何か賀臼君が気になっていたのも本当なのよ」賀臼の父と母は、貴子の話を驚いて聞いていた。ふたりとも、蒼白になってい

る。父が決心したように、言い出した。

賀臼家の秘密

賀臼流人は驚くべき話を始めた。

「これは、平にはまだ話していないことなのですが、いい機会なので話しましょう。実は、平には双子の妹が居たのです」

平は驚いた。

「えっ、それって本当のこと？僕は、そんな話一度も聞いたことがないよ」

「いままで黙っていたのにはわけがある。それをこれから説明しよう」

賀臼家は、古来より伝統のある家柄であるが、実は、賀臼の先祖は、ヨーロッパから渡来した南蛮人と言われている。賀臼家の人間は、背が高く、色白なのは、この系譜による。

賀臼本家には、古来より言い伝えられている秘密がある。賀臼流人の父は、本家ではないが、小さい頃に、本家の秘密寺につれていかれたことがあるという。そこで、秘密を聞かされたらしい。ただし、これは正当な系統者が不慮の死を遂げた場合のことらしい。流人の父の兄は、ある事故で亡くなっていた。幸い、息子が二人いるので、系譜は守られたが、まだ幼い二人に代わって、流人の父の賀臼孝和、つまり平の祖父がこの秘密を伝授されたらしいのだ。

賀臼家には、不思議なことに女の子が生まれにくい。つまり、古来より、男系家族なのである。江戸時代より、ここ数百年も、ずっと、この伝統が守られてきた。つまり、賀臼家は、常に嫁を他家から入れて、家系を守ってきたことになる。

ところが、賀臼流人に娘が生まれた。このことが、本家に伝わると、すぐに使いのものがやってきた。そして、理由も聞かされないまま、その娘は、本家に引き取られていったのだ。流人も理恵も、娘をとられまいと必死であったが、流人の父が

「これは賀臼家の宿命だ。あきらめてくれ」

と泣きながら懇願したという。最後には、流人もあきらめざるを得なかったようだ。

平は驚いた。とすれば、貴子は、自分の双子の妹なのだろうか。貴子も、思わぬ話の流れにただ驚いているようである。

「それは、賀臼君のお父さんとお母さんが、私の本当の両親かもしれないということなのではないでしょうか？」

「まだ、結論を出すのは早いかもしれない。でも、先ほど、貴子さんが目隠しをされて連れていかれたのは、賀臼本家の隠れ里の可能性が高い」

四人は、互いの顔を見合わせた。すると、理恵が言い出した。

「でも、おかしい点もあるの。実は、娘を連れ出す時に、本家の方が、娘が二十歳を過ぎたら、必ず返すという約束をしてくれたの。でも、貴子さんは、まだ十九よね。一年も早いわ」

平は

「それって数え年じゃないの？」

と暢気なことを言った。そして、ふと思った。おい、貴子が妹だったら、僕とは結婚できないということじゃないか。それは困る。

理恵は

「いえ、満二十歳と言っていたわ。実は、貴子さんが、はじめて家に来た時、本当は、自分の娘ではないかと思ったの。本家が、約束通り、返してくれたのかと思った。でも、それでは計算が合わないの」

流人は言った。

「実は、私も父に、何度も賀臼家の秘密を教えて欲しいと聞いたことがある。だって、大切な娘を、そのために奪われたのだからね。でも、父は教えてくれないんだ。しかも不思議なことを言う。自分自身に聞いてみるとね」

平は、口を挟んだ。

「それは、父さん自身が知っているということ？」

「いや、自分の生き方に秘密が隠されているということらしい。しかし、私は、一介の物理学者で、いまは重力の謎を解明しようとしているだけだ。それが、賀臼家の秘密と関係があるとは思えない」

平の祖父孝和はすでに死んでいた。それも、七十歳を過ぎた時に、ヨーロッパ大陸を横断すると言って、旅行にでかけ旅先で飛行機事故にあって亡くなっている。本家の秘密を語ってくれるひとは、もはやこの世にいないのである。

貴子は、こう言った。

「すると、秘密の鍵は賀臼君のお父さんの生き方にあるのですね。申し訳ありませんが、いまの研究テーマのことを話していただけますか」

「私の研究テーマ？」

「ええ、いまのところ、それしかヒントがありません」

流人は少し考え込むようにしたが、まあいいだろうと話し出した。

賀臼流人の研究テーマは重力である。

「実は、物理の世界で知られているマクロな力は、三種類ある。厳密には、も

っとあるが、今は簡単のために三種類だけとしよう。貴子さんは、知っているかな」

「ええ、もちろんです。電気力、磁気力と重力ですよ」

「その通り。しかも、これらの力は、距離の二乗に逆比例するという特徴を持っている」

「不思議だよ」

と平は間に入った。

「ところが、重力だけは特別な存在なんだ。なぜか分かるかい？」

貴子はしばらく考えてから、こう答えた。

「それは、電気力と磁気力には、引力と斥力があるのに対し、重力には引力しか働かないということです」

「その通り」

流人は満足そうに答えた。

「電気には電荷、磁気には磁荷というものがあって、それぞれプラスとマイナスの成分がある。ただし、磁場の場合、一般にはN極とS極と呼んでいるがね」
平は間に入った。

「そして、重力では、質量が電荷や磁荷に相当するんだけど、質量にはプラスしかないということだよ」

「その通りだ。平もよく勉強しているな」

と流人は息子のことを誉めた。

「しかし、われわれ物理を研究している人間にとって、これは、とても不思議なことなんだ。これを対称性の破れと呼んでいる。実は、われわれが住んでいる世界はうまくできていて、ほとんどのものが対称になっていることが多い」

「そうか、すると、重力だけが、力の仲間では異質ということになるんだね」

「しかし、それに異をとなえる研究者もいる」

貴子が聞いた。

「それはどういうことですか？」

「重力も本来は対称的で、マイナス質量があるというんだよ」

「マイナス質量？」

「ああ、電荷や磁荷にプラスとマイナスがあるように、質量にもプラスやマイナスがあるというんだ。そうすれば、すべての力は平等になる」

「マイナス質量というのは発見されたの？」

平は疑問に思った。マイナス質量と言う意味がよく分からない。

「いや、残念ながら、まだ発見されていない。残念というよりも、幸運にもと

も言えるかもしれない」

「どうして幸運なんですか」

「それは、マイナス質量がプラス質量と出会うと、消滅してしまうからだよ。プラスの電荷とマイナスの電荷が出会うと、電荷は消滅してしまう。ということは、質量も消滅してしまうことになる。つまり、この世は、消えてなくなるということさ」

平と貴子は顔を見合わせた。マイナス質量、それは、まさに悪魔の存在ではないのか。

ふと気づくと、時間はすでに午後十時を回っていた。貴子は

「あら、もうこんな時間です。私、もう帰らなくちゃ」

流人と理恵は、貴子に居て欲しいというそぶりであったが、自分たちの娘と決まったわけではない。平は、すかさず

「僕が駅まで送っていくよ」

と言った。

「ところで、おじいちゃんは数学者って聞いたけど、どんな研究をしていたの？」

「複素関数論と呼ばれる分野さ。いわば虚数の研究者ということになる」

「虚数！」

平と貴子は同時に声を出した。いま、まさにふたりが講義を受けているのが虚数であった。

学校

翌日、賀臼が学校に出かけると、すぐに貴子が寄ってきた。賀臼は、複雑な気持ちだった。もしかしたら、貴子は自分の妹かもしれないのだ。

「昨日は本当に驚いた。賀臼君の家族が、私の本当の家族かもしれないなんて、驚きよね」

貴子は、興奮した面持ちである。賀臼は、貴子の気持ちが計りかねた。いったい、貴子は自分のことをどう思っているのだろうか。

「でも賀臼君のご両親って本当に素敵ね。あのふたりが、私の本当の両親だったらどんなに幸せか」

と言っている。賀臼は、心の中で、それが本当ならば自分達は兄妹なのだぞと思った。

「実はね。昨日一晩考えたの。それで、思ったんだけど、賀臼君の先祖って、

やはり、あの有名なガウスではないの？」

賀臼は、そんなばかなと思った。いま、ちょうど数学の複素関数論の講義では、ガウス平面を習っている。そういえば、おじいちゃんの研究テーマは虚数と言っていたなと賀臼は思った。

「そんなばかなことはないよ」

そう賀臼が言うと、貴子は

「ねえ、ふたりでガウスのことを調べてみない？」

と言ってきた。

賀臼は迷った。しかし、貴子のこともある。自分の気持ちの整理も含めて、自分の家のことを調べてみるのもいいかもしれない。賀臼は承諾した。

ガウスは、ヨハン・カール・フリードリッヒ・ガウスという長い名前を持っている。1777年にドイツで生まれた。父はレンガ職人で、数学の素養はない。しかし、ガウスは小さい頃から神童ぶりを発揮した。

有名な逸話は、小学校で、1から100まで足す計算をたちどころに行ったことである。小学校の教師は、自分の仕事をするために、時間稼ぎに、子供たちに1から100まで足す計算を課した。これで、たっぷり一時間は稼げると思ったが、たちどころに答えを出してしまった生徒が居た。それがガウスである。ガウスは1から順番に足していくのではなく、1と100を足すと101、2と99を足すと101、3と98を足すと101となつて、結局101を50倍すれば求める解が得られることに気づいたのである。

父は、ガウスに自分の仕事をついで欲しかったが、あまりの才能に、まわりが大学へ進むことを薦めた。そして、ガウスは奨学金を得て、大数学者へと育つのである。

ガウスの業績は数え切れないほどである。しかも、ガウスは数学だけではなく、天文学や物理学でも大きな業績を残している。

貴子は言った。

「そう言えば、磁場の単位のガウスは、ガウスにちなんでいるのよね。昨日の賀臼君のお父さんの話で思い出したわ。それにしても、ガウスの業績というのはすごいわね」

「だけど、ガウスが日本に来たなんて話はどこにもないよ。やはり、ガウスは賀臼家とは何の関係もないと思うよ」

「私、少しだけ気になることを見つけたの」

「ガウスは、最初の妻、ヨハンナとの間に三人の子供を設けたの。その娘のビルヘルミナは、父に似てすごく数学が得意だったらしいの。ところが、なぜか、

その子は、若くして亡くなるの。最後に生まれたルイスという娘は、一歳で亡くなっているのよ」

「それが、どうしたの？」

「賀臼家には男しか生まれないのよね」

「ああ、そうらしいね」

「でも、それって少し変じゃない。確率から言ってもおかしい。私は、こう思うの、賀臼家では女の子が生まれるなら、それを隠しているのではないかって」平は、貴子が何を言い出すのかと思った。しかし、父と母の言葉を思い出した。娘が生まれたと分かったら、本家から使いがきて、その娘を連れて行ってしまったという。

「しかし、どうして、そんなことをする必要はあるのかな」

「それをふたりに調べてみましょう」

賀臼には、検討もつかなかった。すると貴子は、さらに、こう付け加えた。

「賀臼君のように、最初から否定しては、何も真実は見えてこない。ガウスが日本に来たという前提で考えてみましょう」

「ところで、ガウスは 1855 年にドイツのゲッティンゲンで死んだことになっているよ。これが本当なら、ガウスは日本に来たことにはならないよ」

「そのガウスが本物かどうか分からないでしょう」

「何を言ってるんだ！」

「これをちょっと見て。ガウスは 1811 年にガウス平面を発表している。そう、複素平面よ。ところが、それ以降は、ガウスらしい業績はないのよ。それと、最初の奥さんが亡くなったのが 1809 年。ガウスは、最初の奥さんを劇愛していたらしいの。それにもかかわらず、すぐに再婚している。何か変じゃない。それに二番目の奥さんの子供はアメリカに移住している」

「そのの、どこが変なんだい？」

「私は、こう思うの。ガウスは 1811 年にガウス平面を発表したあと、きっと逃亡したのよ。そして、それをごまかすために、別人を自分にみたと、そして再婚したように見せかけた」

「何か、推理小説のような話だけど、何も根拠がないじゃないか」

「もちろん、根拠はないわ。ただ、ガウスが日本にやってくる、賀臼家を創始したという仮定に立って、考えれば、有り得ない話ではないということよ」

「ばかばかしい」

賀臼は、貴子の相手をまったくしなかった。

「それに、どうしてガウスは日本に来なければならなかったんだい。いくらで

も他に行くところがあるだろう」

「きっと、日本が鎖国をしていたからよ。ガウスは、ヨーロッパの国との交渉を断ちたかったに違いないわ」

「どうして？」

「そこに、きっと秘密があるのよ」

「ねえ、わたしの苗字の清洲って、少し変だと思わない」

「賀臼に比べれば、当たり前だと思うけど」

「実は、わたし、こっそりと家の中を調べてみたの。すると、驚くべき資料を見つけたの。清洲は、もともとは『きよす』ではなく、『きよすう』らしいの」

「きよすう？」

「ええ、きよすう、つまり虚数よ」

「虚数？」

賀臼は、自分達がいま習っている数学の用語と、貴子の家にどんな関係があるのかと不思議に思った。

「ガウスが失踪したのは、ガウス平面を発表してからよね。ガウス平面は虚数に関係がある。どう、面白い発見と思わない」

賀臼は、困り果てた。貴子の妄想である。大体、虚数などという純粋数学の道具がどうして、自分達と関係があるのであろう。しかし、清洲が虚数に関係があるとは、どういうことなのだろうか。そういえば、賀臼の祖父も虚数の研究をしていたはずだ。平は、祖父孝和のことを少し調べようと思った。

平の秘密

ガウスが賀臼家の創始者という貴子の思いつきは、でたらめとは思うが、虚数が、何か賀臼家や貴子の謎に関係があるのは、もしかしたら有り得ることだ。祖父が虚数の研究者ということを知って、賀臼はそう思った。

家に帰ると、食卓に夕ご飯の支度がしてあった。母の置手紙がある。

「今夜は、お父さんと一緒に、国際会議のバンケットに出かけます。夕ご飯は準備しておいたので、あとは味噌汁を暖めて食べて下さい。母」とある。そう言えば、今日は、父が参加している会議のバンケットであった。帰りは、午後十一時を過ぎると言っていた。

ご飯を済ませると、賀臼は、あることを調べようと思った。祖父の資料である。この家は、もともと祖父の家である。賀臼家は、資産に恵まれており、都内の一等地に二百坪近い敷地を持っている。家は、少し古いのが、建て付けは立

派だった。祖父の蔵書や資料は、離れの倉にしまっておくはずだ。母からは、絶対に入ってはいけないと言われていたが、いまは、そんなことを言っている時ではない。賀臼は倉の鍵のありかは知っていた。母は、内緒にしている積りだろうが、書棚の背にガムテープで貼り付けているはずだ。

倉には明かりがないので、賀臼は、懐中電灯を持っていった。鍵穴に鍵を差し込むと、難なく鍵は開いた。そっと、扉を開けて中に入って賀臼は驚いた。ものすごい蔵書の数である。英語、ドイツ語、フランス語、みな数学に関する本である。ほとんどの本に *imaginary number* と書いてある。これは、確か、虚数の英語だ。しかし、よくこれだけの本を集めたものである。

虚数というのは、日本語ではその数字ということになる。英語では想像数だ。普通の数字ならば、同じ数字を二回かけてマイナスになることは絶対ない。しかし、仮想的に、そのような数字があったらどうかと想像したひとがいる。そして、その数字を虚数と名づけた。つまり(虚数)×(虚数)=マイナス1なのである。こんな数字は有り得ないと多くのひとは嘲笑したが、虚数を導入したことで、数学の世界は大きく広がった。

ただし、賀臼には、やはり虚数はまともではないように思えてならなかった。賀臼は、虚数のことを思いながら、倉の中をしばらく探索した。すると、賀臼は数学の本だけではなく、古文書のようなものも、かなりの数そろっていることに気づいた。かなり歴史のあるものも見られる。そのうちの一冊をそって開いてみると、中は、賀臼では読めない文字で埋まっている。今度、貴子連れしてきた方がよさそうだ。貴子の博学ぶりには、すごいものがある。最近、いろいろな国の古文も勉強しだしたようだ。

さらにページをめくっていると、その中から一枚の写真が落ちた。なんだろう。手にとってみて驚いた。空飛ぶ円盤の写真ではないか。そこには、SF小説でよく見るUFOの写真があった。よくある合成写真だろう。しかし、どうして、こんな写真が祖父の蔵書の中にあるのだろうか。

しばらく、賀臼は、祖父の蔵書をめくっていたが、賀臼家のヒントになるようなものは無かった。その時、どこかで見た本に出合った。*Disquisitiones arithmeticae* とある。これは、確か、ガウスの著した有名な『整数論』である。どうして、こんなところに、この本があるのだろうか。賀臼は、少し背筋が寒くなった。近くを探すと、*Theoria motus* が出てきた。ガウスの有名な『天体運行論』という本である。貴子の賀臼家の創始者は、もしかしたらガウスではないかという推論が頭をよぎった。しかし、すぐに打ち消した。そんなばかなことはない。祖父は、数学者であった。ガウスの本があっても何もおかしくな

い。しかし、このことを貴子が知ったら、ますます、妄想に入っていくであろう。

しばらく、賀臼は、倉の中を探索した。ほとんどが古文書や数学に関する本ばかりで、肝心の賀臼家の秘密につながるような資料は見つからなかった。賀臼が、あきらめて倉から出ようとした時、倉の扉の先に緑色の何かが目に入った。何だろう。ひろってみると、それは紙袋だった。少し変色している。封がしてあるが、賀臼は、母に怒られるかもしれないと思いながら、封を切ってみた。中から、祖父の手書きの資料が出てきた。

その中の一文に賀臼の目が釘付けになった。1987年7月7日という日付だ。祖父の日記を破ったものらしい。これは、賀臼の誕生日だ。急いで、文章を読んだ。

「今日、長男の流人に子供が生まれた。残念なことに女の子であった。元気でよく泣いている。理恵さんに、何と云えばいいのだろうか。賀臼の家では、女兒が生まれたら、本家にただちに知らせなければならない。そして、流人と理恵さんには、つらい別れが待っている」

文章は、そこで終わっていた。これは、どうしたことだろう。両親の話では、生まれたのは確か双子であったはずだ。平と妹のふたりが生まれたはずである。ところが、祖父の日記には、生まれたのは女の子とある。双子とは書いていない。それに、男の子が生まれたならば、それが書かれていてもいいはずだ。平は頭が混乱した。

賀臼がふと顔を上げると、そこには、蒼白な顔をした母理恵が立っていた。涙を流している。賀臼は混乱した。母の涙はいったい何を意味するのだろうか。母は言った。

「あなた、ここに来て。平が秘密を知ったようなの」

賀臼は、母はいったい何を言っているのかと思った。しばらくすると、父もやってきた。すまなそうに平を見ている。

「いったい、ふたりともどうしたんだい。これは、何かの冗談なんだろう。そう言ってくれよ」

平は、懇願した。こんなばかな話はない。

父の流人は、観念したように、こう言った。

「母さん、いずれは、平にも話さなければならないことなんだ。今がいい機会かもしれないよ」

母は、静かに泣いている。

「平、よく聞いて欲しい」

父は話し出した。

「いままで黙っていたけど、実は、お前は私達の実の子供ではないんだ。理恵に女の子が生まれた時、賀臼の本家から使いがきて、娘を奪っていった。その時、かわりに私達ふたりに託されたのが、平、お前だったのだ」

平は、頭の中が混乱した。自分は、この両親の子供ではない。そんなばかなことがあるはずがない。

「でも、信じて欲しい。父さんも母さんも、お前のことは、実の子供のように思って可愛がってきた。いまでは、本当の子供とさえ思っている」

母は、一言も言わずに、泣いているだけだった。

賀臼は、自分が何を言っているのか分からなかった。ただ、このふたりの子供ではない。その事実が、賀臼の胸に突き刺さった。自分は劣性遺伝と言われたことがある。しかし、それは、当たり前の話だったのだ。もともと、実の子供ではないのだから。

賀臼は

「いまは、頭の中が混乱している。何も考えられない。今日は、もう寝るよ」
そう言って、自室に戻った。

そのままベッドに横になったが、頭がさえて眠れなかった。何よりも、自分が両親の実子ではないことがショックだった。そして、気づいた。あの夢が現実のものとなったのだ。暗闇の中で両親を探していたら、ふたりは貴子を抱いていた。

両親の本当の子供は貴子なのだろう。貴子との出会いを喜んでいたが、それはそうではなかったのだ。平にとっては、地獄の始まりだったのかもしれない。

平は、昔のことを思い出していた。両親は実子ではない自分を本当に可愛がってくれた。幼稚園に入った時、小学校に上がった時、いつもふたりは、心から祝ってくれた。容姿のことで、平がいじめられたと聞くと、母は泣いてくやしがり、そして、父は、学校まで抗議に行ってくれた。父と母の愛情を思うと、あのふたりには感謝しても感謝しきれない。

しかし、一方で思った。それならば、自分はいったい誰の子供なのだろうか。確か、賀臼本家から送られてきたという。賀臼は思った。いままでは、あまり真剣ではなかったが、賀臼家の秘密を明らかにしなければならない。自分の正体を知るためにも。

つぎの朝、賀臼が朝の食卓に下りていくと、母が心配そうにしている。賀臼は、いつものように

「母さん、お早う。今日もうまそうな朝食だね」

と言って、食卓に座った。母は、大学の新学科のリーダーを務めている。多忙を極めているはずなのに、賀臼の朝食と夕食の準備は、必ず欠かさない。賀臼は母に感謝した。大学に出掛けに、賀臼は父と母に言った。

「父さん、母さん。何があるかと、ふたりは僕の父さんと母さんだ。それでい
いだろう。」

父は涙を流しながら、賀臼を抱き寄せ

「当たり前だろう」

と言った。母も嬉しそうだ。ふたりとも安心した顔をしている。賀臼は、たとえ、血がつながっていなくとも、この両親の子供で良かったとしみじみ思った。

天は虚に宿る 連載 3

賀臼本家

学校に行くと、さっそく貴子が寄ってきた。

「あれから、調べたんだけど、ガウスが生まれるずっと前に虚数で面白い研究をしたひとがいるの」

賀臼は、自分の秘密を貴子に打ち明けるべきかどうか悩んでいた。貴子は、そんな賀臼にはおかまいなしに話を続けた。

「それはね、賀臼君の名前の平の由来になったオイラーなの。レオンハルド・オイラーよ。ねえ、聞いている」

賀臼は上の空だった。その時、貴子の友達が冷やかにやってきた。

「あらあら、ふたりとも本当に仲がいいわね。妬けてきちゃうわ」

最近、賀臼は結構女の子にもてるようになっていた。貴子に会ってから、急に背が伸びたし、顔も引き締まってきている。今ならば、貴子と付き合っていると言っても恥ずかしくないくらいだ。

すると貴子は

「敏子、誤解しないで。平君は、わたしの兄なのよ」

と言った。賀臼は驚いた。貴子は何を言い出すんだ。

それでも、それを聞いた敏子は、もっと驚いている。

「貴子、それって本当の話なの？冗談でしょ」

「うそじゃないわ。本当の話よね、平にいさん」

「でも、苗字が違うじゃない」

「双子だったので、妹の私がよその家に貰われていったのよ」

賀臼は頭が痛くなった。そんな話を敏子にしたら、一日で大学中に知れ渡ってしまう。

敏子は、賀臼の方をじっとみている。それが本当の話かどうかたずねているのだ。賀臼は仕方なく言った。

「その可能性が高いということが最近分かった。貴子が僕に声をかけてきたのも、それが理由らしい」

敏子は納得したように

「それで分かったわ。だって、どう見ても、貴子と賀臼君じゃつりあいがとれないでしょう。みんなで、どうしてって噂をしていたの。兄妹じゃしょうがないわね。でも、最近の賀臼君って、すごくかっこよくなったって評判よ。貴子

のお兄さんじゃ当たり前か」

と勝手にうなずいている。賀臼は、あわてたように

「でも、まだ完全に兄妹と決まったわけじゃないんだ。それが、本当かどうかをふたりで調べているところ」

「そうか。それで、いつもふたりで調べ物をしていたのね」

という、慌てたように去っていった。きっと、ビッグニュースと言って、大学中に言い触れ回るんだろうなと賀臼は憂鬱になった。

「貴子、どうして敏子にあんなことを言ったんだ。大変な騒ぎになるぞ」

「いいじゃない。本当のことかもしれないんだから。それよりも、最近、まわりがうるさいのよ。賀臼君と私ができてるんじゃないかって、それこそ、大変なんだから」

「だからと言って、言っているいいことと悪いことがあるんじゃないか」

実は、昨日までは、賀臼も貴子は、おそらく、自分の双子の妹だろうと信じていた。貴子は、母の理恵に面影がそっくりだからだ。ところが、昨夜、驚くべき事実を知ってしまった。自分は、賀臼家の子供ではないのだ。賀臼は、腹を決めた。貴子に本当のことを言おう。

「実は、大変なことが分かった」

賀臼は真剣な顔になった。

「僕が、両親の実子でないことが判明した」

貴子は、賀臼が言ったことを聞き取れなかったようだ。

「賀臼君。いま何ていったの？」

「僕は、賀臼家の子供ではないんだ」

貴子はあっけにとられている。

「ちゃんと、両親にも確かめた」

賀臼は、昨日、家の倉にしのみこんだ話をした。そして、両親の告白も。

貴子は、しばらく考え事をしていた。

「それで、賀臼君はどうだったの」

「もちろん、すごいショックだよ。でも、しばらくして立ち直ることができた。自分の子供ではないと知りながら、ここまで僕を育ててくれたんだ。それに、いままでは、血がつながっていようと無かろうと関係ない。あのふたりは、僕の立派な両親だからね」

「偉いのね」

「それでも無いさ」

貴子は、しばらく考え事をしていた。

「でも良かったんじゃない。私達が兄妹でなければ、恋人になってもいいってことでしょう」

と言った。賀臼は、一瞬、貴子の言っている意味が分からなかった。すると、貴子はあわてたように

「それから、私達が兄妹という話、否定せずにおきましょう。その方が、なにかと楽なんだから」

と言った。

賀臼も少し考えたが、その方が無難かもしれないと思った。

すると貴子は急に

「それよりも大事な話を忘れていたわ。オイラーよ」

賀臼は、自分の話は大事ではなかったのかとむっとした。賀臼にとっては、驚天動地の出来事であったのに。

「賀臼君も真剣にならざるを得なくなったわね」

と言った。言われなくとも分かっている。自分がいったいどこから来たのか。そして自分の存在意義は何なのか。それを明らかにしなくてはならない。

貴子は続けた。

「オイラーの公式は知っているでしょう」

「もちろんさ。三角関数と指数関数を虚数でつなく公式だろう」

「そう。この虚数が大切な役割を果たすのよ」

「それが、われわれの問題とどう関わってくるんだい」

「オイラーの仕事は、ガウスに大きな影響を与えているの。ガウス平面という発想もオイラーの業績と無関係ではないわ」

「そうか、オイラーの公式をガウス平面で書くと、半径一の円になるんだっただよね」

「そう、しかも、この公式を使うことで、量子力学が誕生したの。そして、不思議なことに、量子力学は虚数を使わないと解くことができない」

「うん。僕もいつも不思議に思っていたんだ。どうして、虚数でなければいけないのか。もし、量子力学が虚数でないと解けないとしたら、虚数こそが、すべての根源ということになってしまう。そんな馬鹿なことはないよね」

「でも、そこに大きなヒントがあるように思えるの」

貴子は真剣な顔つきで考え込んだ。賀臼も悩んだ。

「でも、虚数は、父が研究している重力とは何の関係もないだろう」

すると、貴子は思いついたように言った。

「重力の問題は、その非対称性よね。質量にはプラスしかなくて、マイナスが

ない」

「うん、そんなことを言っていたな」

「ということは、マイナスが鍵を握るわよね。つまり、マイナスーよ」

「そうか、虚数は二回かけるとマイナスーになるんだった。これが、何か関係があるのだろうか」

ふたりは、いろいろなことを考えた。虚数と重力。何か関係がありそうだ。

すると、そこにクラスメートがやってきた。

「よう賀臼。おめでとう。お前は、清洲さんのお兄さんなんだって。それはよかった。僕らも安心したよ」

などと言っている。さっそく、敏子のご注進に及んだらしい。賀臼は、残念ながら、そうではなかったよと言ってやりたかったが、そのまま、やり過ごした。貴子と兄妹と思わせている方が何かとやりやすい。

そして、ある事を思い出した。

「そういえば、うちの倉にはおじいちゃんの蔵書の他に、いろいろな古文書もあるんだ。その中で、U F Oの写真も見つけた。何か賀臼家の秘密と関係があるかな。いろいろな言葉で書いてあるんで、僕には読めなかった。今度、一緒に、倉の中を探索してくれないか」

貴子はおおいに興味を持ったようだった。

「分かった。今週末に、またお邪魔するわ」

誘拐

つぎの日、学校に行くと貴子の姿が見えなかった。どうしたのだろうか。いつもなら、賀臼がつくやいなや、そばに寄ってくるのに、どこを探しても貴子の姿は無かった。実は、驚くことに、貴子は携帯電話を持っていないのだ。そういう賀臼も持ってないので、ひとのことは言えないが、こんな時は、連絡がとれなくて不便だ。

朝から、何人かのクラスメートが寄って来て、貴子と兄妹と聞いて驚いたと声をかけてくる。驚いたと言いながら、みんな安心したようにも見える。貴子をねらっている男子学生は多いのである。

一時間目の講義が終わっても、貴子は姿を現さなかった。クラスのみみんなも慌て出した。つぎの講義は、あのいじわるな吉川である。貴子がいれば、吉川も静かにしているが、貴子がいないと分かったら、何をしてくるか分からない。賀臼のもとに

「妹の居場所ぐらい分かるだろう」

と何人かが詰め寄ってきた。

「妹と言っても、普段は別れて暮らしているんで、すぐには分からないんだ」と賀臼は言い訳した。そういえば、これだけつき合いが長いのに、賀臼は貴子の家に呼ばれたことはない。貴子は、叔父夫婦と言っているが、いままでの経緯から考えると、それも本当かどうか分からない。

賀臼は少し心配になった。貴子の身に何か起きたのではなかろうか。吉川の講義は難なく終わった。それは、賀臼が貴子の役割を果たしたからである。吉川は、貴子がいなかったことをいいことに、誰にも解けそうにもない問題を出したが、すべて賀臼が解答した。吉川は驚愕したようだ。貴子だけでなく、もうひとりの強敵が現れた。そして、こう言った。

「賀臼が清洲と兄妹という話は、本当だったんだな」

と。敏子のおしゃべりには参った。この吉川まで、情報が伝わっている。

昼を過ぎても貴子は学校に来なかった。さすがに、賀臼も心配になった。風邪かもしれないが、一応、貴子の家に連絡をとってみよう。賀臼は、貴子から渡された自宅の電話番号にかけてみた。二〇回ほど、鳴らしてみたが、応答がない。ふたたび、電話をかけた。すると、ようやく受話器がとられた。

「もしもし、貴子さんの同級生の賀臼平というものですが、貴子さんはご在宅でしょうか。」

すると、男の声がした。

「賀臼さんですか。あの平さんですね」

「はいそうですが」

「自宅まで至急いらしていただけますか」

「どうしたのですか？」

「貴子は、誘拐されました」

賀臼は一瞬のどがつまった。誘拐？いったいどういうことなのだろうか。

「ただし、ご安心下さい。いまは、安全なところに匿われています」

「そうですか」

賀臼はほっとした。そして、学校を後にした。

解放

貴子は、一瞬、自分がどこにいるのかわからなかった。頭の芯に、わずかな痛みがある。気づくと、窓のない部屋に入れられていた。手足はしばられてい

ない。のどが乾いていることに気づいた。みると、ペットボトルの水が置いてある。毒がはいっていないか心配になったが、誘拐犯が、自分を殺そうと思っていたら、とっくに殺されている。貴子は、ペットボトルに手を伸ばした。

水をいっきに飲むと少し落ち着いてきた。昨日、学校の帰り道、自宅のすぐそばまで来た時、道路のはしに黒塗りの乗用車が止まっていた。なんで、こんな場所に止まっているのだろうと思った瞬間、車の中から数人の男が駆け出してきた、何か薬品の散布されたハンカチで口を覆われた。抵抗を試みたが、そのまま意識を失ってしまった。

時計を見ると、すでに午後二時をまわっていた。襲われたのが、前の日の午後八時頃だから、もう一八時間近くも気を失っていたことになる。貴子は、衣服を調べてみた。着衣に乱れはなかった。

「しかし、誰が自分を誘拐したのだろうか？」

貴子には心当たりが全く無かった。もちろん、叔父夫婦は裕福ではある。しかし、大学生の貴子を襲ってまで身代金を要求することは考えられない。第一、貴子は、叔父夫婦の実子ではない。いざとなったら、身代金を拒否することも考えられる。営利目的の誘拐ならば、その辺の事情も調べているはずだ。

突然、ドアが開いた。貴子は、その隙に逃げようかと思ったが、すぐに思いなおした。自分がどこに監禁されているか分からない。この部屋から逃げられたとしても、外に逃げ出せるとは限らない。

男がひとり入ってきた。覆面で顔を覆っている。貴子はほっとした。覆面をしているということは、顔を見られたくないということだ。貴子を殺す気ならば、最初から素顔を曝すはずである。

「少し手荒なまねをして申し訳ありません」

と覆面男はていねいに言った。

「こうでもしないと、われわれも事情をつかめないものですから」

そしてこう言った。

「心配しないでいただきたい。情報が得られれば、すぐにお帰し致します」

貴子が無言でいると、男は、そのまま話を続けた。

「わたしがお聞きしたいのは、あなたと賀臼家の関係です。最近、あなたは、あの家に結構入り浸っていますね。いったい、どんな用事なのでしょう」

貴子はゆっくりと口を開いた。

「賀臼平君は私のボーイフレンドです。家に遊びに行くのは当然ではないでしょうか」

「その辺の事情は、私どもも察しています。しかし、それだけではないだろう

とっています。どうですか」

貴子は、この男は、どこまで事情を知っているのだろうかと思った。まさか、自分が賀臼家のひとり娘かもしれないなどということは言えない。

「どうして、賀臼君の家のことを、そんなに気にかけるのですか？」

男は、少し考えた。

「実は、私どもは、国家機関です。具体名を言うことはできませんが。そして、ある使命を受けて、賀臼家のことを監視してきました」

「監視ですか？」

「ええ、そうです。正確に言えば、賀臼家にあるはずの資料を探しています」

貴子は、こんな手荒なことをする国家機関とはいったいどんな組織なのだろうか」と疑問に思った。

「実は、私どものライバル機関が、あなたを襲うという情報が入ったのです。あなたが、その重要な資料を賀臼家から持ち出したとライバル機関は思ったようです」

大事な資料とは、いったいなんだろうか。

「われわれは、その情報を得て、密かに、あなたを監視していました。そして、ライバル機関の連中があなたを襲おうとしたところで、あなたを奪還したのです」

貴子は意外な展開に驚いた。あの時、貴子に薬品入りのハンカチを嗅がせた人間は、そのライバル機関の連中ということになる。それでは、この人は、私の恩人ではないか。でも、それならば、どうして覆面などしているのだろうか。

男は、貴子の考えを察したように、こう言った。

「私は、かげで動いていますが、いつなるとき、あなたと出くわすかもしれません。お互い、顔を知らない方がよいでしょう」

「あなた方のライバル機関とは、どんな組織ですか」

「日本ではない国の機関とだけ言っておきましょう。彼らは、賀臼家にある情報が、新型兵器の開発に役立つと考えているようです」

貴子は、驚いた。

「新型兵器？」

それは、突拍子もない話だ。しかし、新型兵器とはいったいどんなものなのだろう。

「重力と虚数がヒントとっておきましょうか。これ以上は、聞かない方がよいでしょう。まあ、専門家ではないので、それ以上説明しようがないというのが正しいところですがね」

重力と虚数？貴子には、それがどうして新型兵器の開発につながるのか、とんと見当がつかなかった。

「ところで、もう一度聞きます。賀臼平さんは、あなたに何か重要なものを渡しませんでしたか？」

「いえ、私は何も受け取っていません」

「そうですか。実は、彼が、家の倉に入ったことは、われわれも把握していました。ところが、その後、何かを持ち出された形跡があるのです」

貴子は、ふと思い出した。賀臼は、おじいさんの資料が入った緑色の封筒のことを話していた。彼は、日記に書いてあったことから、自分が賀臼家の子供ではないということを知って、大いにショックを受けたと言っていた。ライバル機関が探している資料とは、その緑色の封筒に入っていたものではないのだろうか。

でも貴子は、不思議に思った。

「何かを持ち出された形跡があるということを、どうして知っているのですか？」

「ええ、実は、ライバル機関が、あの倉に重要な資料が眠っていることを知ったのです。そして、機関員が、こっそり中にしのびこんだのです。しかし、いくら探しても、その資料が出てこない。それで、誰かが運び出したと思ったようです」

「ライバル機関の情報は、逐一、ご存知のようですね」

貴子は、少し嫌味っぽく言った。すると、男は、こう言った。

「ええ、われわれのスパイが潜入していましたから。しかし、今回、あなたを助けたことで、スパイの件はばれてしまいました」

貴子は驚いた。そこまでの危険を冒して、自分を助け出したのだ。

「安心して下さい。そのスパイはうまく脱出しました。死んではいません」

死という言葉も聞いて、貴子はおじけづいた。

「もう一度お聞きします。あなたは、賀臼平さんから何も受け取っていないのですね」

「はい、何も受け取っていません」

「そうですか。それは残念です」

貴子はどうしてだろうかと思った。

「実は、昨晚、賀臼家に空き巣がはいりました。ライバル機関の人間です。その人間が緑色の封筒を持ち出したという情報が寄せられました」

やはり、賀臼の言っていた封筒の中に、何か重要なものが入っていたのだ。

「もしかして、あなたの手元にはないと期待していましたが、手遅れだったようです。もはや、その資料は敵の手に渡ったと考えていいでしょう」

覆面の男は少しくやしそうに言った。

「それと、清洲貴子さん。あなたが襲われる心配はなくなりました。安心して下さい。敵は、欲しいものを手に入れました。向こうもプロです。いたずらに、一般市民に危害を加えることはしません」

貴子は何と言っているのか分からなかった。

「それでは、われわれの車で途中までお送りします。申し訳ありませんが、目隠しをしてよろしいでしょうか。われわれの機関名は伏せておきたいものだから」

そういうと、男は、貴子に目隠しをした。貴子は、この男が何も危害を加えないと分かったので、されるままにした。

車の後部座席に座らされると、車はゆっくりと発進した。貴子は、目隠しの隙間から、何とか場所を探ろうとしたが、無駄だった。向こうもプロということであろう。

車が動きだしてから、一〇分ほどすると、車から降りるように命ぜられた。

「男は、後五分したら、目隠しをはずして下さい」

そういうと去っていった。貴子は、いますぐにも目隠しをはずしたいという衝動に駆られたが、あえて危険を冒す必要はない。男の指示通り、五分後に目隠しをはずした。そこは、新宿御苑の裏通りであった。すると、すぐにタクシーがやってきた。貴子に乗れという。

「運転手は、嬉しそうに、すでに十分お金はいただいていますので、自宅までお送りしましょう」

と言った。あの男は、貴子の自宅の住所を知っている。自分を監視していたくらいだから、当たり前かと思いなおした。

清洲家

清洲家は、渋谷区松涛の瀟洒な住宅街にあった。賀臼は、その大きさに驚いていた。賀臼家も大きい、その二倍はあるのではないだろうか。玄関の呼び鈴を押すと、すぐに貴子の叔父が現れた。清洲大吾と表札には書かれている。

「賀臼平さんですね。ようこそおいでくださいました。貴子は、まだですが、おあがり下さい」

そういって、賀臼を中に招じ入れ、10畳以上は裕にある大きさの応接間に通さ

れた。しばらくすると、貴子の叔母を思われる上品な女性が現れた。

「ようこそ、いらっしゃいました」

と言って、お茶を置いていった。

それから、五分ほどして貴子がタクシーで帰宅した。玄関で叔父と何か話している。貴子と叔父は、いっしょに応接間に入ってきた。

「賀臼君、ごめんね。心配かけて」

と言っている。賀臼は、貴子が元気そうなので、安心した。

「私ね、昨日の夜、すぐそこで誘拐されちゃったの」

と言っている。大吾は

「私がうかつでした。もっと、貴子の身辺警護に気を配っているべきでした」

と反省している。

「しかし、誘拐した理由が予想外のもので安心しました」

「予想外？」

賀臼と貴子は、同時に同じ言葉を聞き返した。

大吾は

「その意味については、また、後ほど、詳しく話します」

と言っている。

「それよりも、貴子、怪我は無かったかい」

と貴子に聞いた。

「ええ、とても紳士的に扱っていただきました。どこも何ともありません」

それを聞くと、大吾はとても安心したようだった。

「実は、わたしの知り合いから電話があり、お嬢さんは無事なので安心して欲しいという伝言がありました。信頼できるひとだったので、安心はしていましたが、それでも不安はありました」

貴子は、誘拐された事情を説明した。一度は、ある組織に誘拐されたところを、日本の国家機関が救ってくれたという。賀臼が驚いたのは、その誘拐に、祖父の倉で見つけた緑色の封筒が絡んでいたことである。

「でも、日本の国家機関とはどこなんだろう」

賀臼は疑問を口にした。

「わたしも気になって、何とか探ろうと思ったんだけど、結局、何も分からずじまいだったわ」

すると大吾は、事も無げに

「日本の国家機関というのは正確な表現ではないですね。C I Aの出先機関です」

と言った。

「CIA？」

貴子は驚いた。アメリカの中央情報機関であり、世界中にスパイ網をめぐらせていると本で読んだことがある。何か、海外で不穏なことが起こると、そのかげには、いつもCIAが絡んでいる。

「しかし、どうしてCIAが貴子さんを助けたんですか？」

「おそらく、貴子を誘拐しようとした外国組織は、北朝鮮でしょう」

「北朝鮮？」

「はい、彼らは、核兵器に変わる究極の兵器製造を画策しています。その重要情報が賀臼家の倉に隠されているという情報が入ったらしいのです」

「それじゃ、その情報を狙ったのが、北朝鮮で、それを阻止したのがCIAということ？」

と貴子は聞いた。

「いえ、それも正しくない表現です。CIAも、その情報を欲しがっていたはずですから」

「なんだ、じゃ、私を助けたとか言ってたけど、実は、自分達も、その情報が欲しかっただけなのね」

と貴子は不満そうに言った。自分を助けてくれた正義の味方と思っていたようだ。

「国家間の戦いはきれいごとでは済まされません」

賀臼は不思議だった。大吾は、賀臼に対してだけでなく貴子に対しても、ていねいな言葉づかいを使っている。

「しかし、あの緑色の封筒に入っていた情報とは何なんですか？」

「その説明をするには、話が長くなります。いい機会と思って、賀臼平さんにもご足労願いました」

「まず、最初に断って起きますが、貴子さんは賀臼家の令嬢です。賀臼流人さんと理恵さんの間に生まれたお嬢さんです」

賀臼は、おそらくそうだろうとは思っていたが、あらためて、清洲大吾の口から、それを聞くと、感慨が新たになった。やはり、そうだったのだ。しかし、大吾はなぜそんなことを知っているのだろうか。

「それと、もうひとつ大事な話があります。賀臼平さん。あなたは、清洲本家の正当な後継者なのです。」

賀臼は驚いた。意外なところから、自分の出所が明らかになったからだ。

「私が清洲なのですか。」

「はい、そうです。」

「あなたは、私の兄泰三のひとり息子です。兄夫婦は、残念ながら、ある組織によって暗殺されてしまいました。その時、私が、ひそかにあなたを救いだしたのです。」

自分の両親が殺されている!

それは、賀臼にとってショックな話だった。そして、いま目の前にいる人間が、自分と血のつながった叔父なのだ。

「実は、清洲家には、代々架せられた使命があります。それは、賀臼家をお守りするという事です。特に、賀臼家に女のお子さんが生まれた時には、必死になって、それをお守りする。それが大事な使命となります。」

守るとはどういうことなのだろうか。

「賀臼家に生まれた女のお子さんには、特殊能力が潜まれています。その能力を、うまく使えば、人類を守ることができますが、まちがった使い方をすると、人類、いや、宇宙の秩序を破る結果を招きます。」

「宇宙の秩序？」

賀臼は、大吾は、なんと大袈裟なことを言うのだろうと思った。貴子は

「私、そんな能力なんか要らないわ。ただ、普通に暮らせれば、それでいいだけなのに。なに、その能力って。」

「その話は、これからします。」

「実は、江戸時代に賀臼ルイという娘が、ヨーロッパから亡命して来ました。その子孫が賀臼家です。」

貴子と賀臼は顔を見合わせた。

「それって、もしかして」

「はい、ガウスのお嬢さんです。ガウスの三番目のお嬢さんはルイスさんと名づけられました。ガウスは、お嬢さんが危害にあうのを恐れ、生まれてすぐに、日本に密かに送ったのです。歴史では、ルイスさんは一歳で亡くなったことになっていますが、実は、密かに日本に送られていたのです。」

賀臼は薄気味が悪くなった。貴子は、ガウスが日本に来て賀臼家を創設したのではと言っていたが、実際に日本来たのは、ガウスの娘であったのだ。

しかし、どうしてガウスの娘は、危険な目に逢わなければならなかったのだろうか。

「賀臼ルイさんは、清洲清一郎と結ばれました。賀臼家を創設するため、清洲家が清一郎を婿養子に出した格好になります。ですから、貴子さんの遠い先祖は、清洲家の血も引いているのです。」

「しかし、ガウスはなぜ、自分のお嬢さんを守るために、日本なんかに送ったのですか。」

「それは、日本が鎖国をしていて、ヨーロッパに情報が伝わりにくかったことが第一です。それと、虚数の能力を持つものが日本に居るということをガウスが知っていたからです。」

「虚数の能力？」

「はい、清洲家の当主には、代々、虚数の能力が備わっているのです。平さん、あなたにも虚数の能力があります。」

賀臼は、頭が混乱した。ガウスや虚数など、まるで数学の世界である。それが、どうして、自分たちの人生と関わってくるのだろうか。

「虚数の能力については、後ほど、話させていただきます。その前にガウス家について話させて下さい。ガウスの父は、れんが職人でしたが、実際には、ガウスと同じくらい数学の才能があったと思われます。しかし、ガウス家では、代々、その能力を隠してきたのです。その能力をつけねらう連中から、守るためです。ところが、ガウスは、数学の才能を世界に知らしめてしまいました。その結果、家族に不幸が訪れます。晩年のガウスは、誰とも親しく話すことがなかったと言い伝えられています。それは、自分の不明を恥じたからでしょう。」

賀臼と貴子には、驚くべき話だった。そして、大吾はもっと驚くべき話をし出した。

天は虚に宿る 連載 4

宇宙創成

宇宙が生成した時、はじめは混沌しかなかった。初期の宇宙には、電気と磁気と質量が一様に満ち溢れていた。すべてのプラスとマイナスが等量であり、プラスとマイナスが常に反応消滅と生成を繰り返していた。物理的には、この状態がエントロピー最大の状態であり、もっとも安定な状態である。時折、ゆらぎによる変化が生じて、すぐにもとの混沌に戻ってしまう。はじめもなく、終わりのない世界である。この宇宙には時間の概念がない。なぜなら、何も変化がないからである。

この宇宙は死の世界であり、そこからは、何も秩序は生まれない。実は、この宇宙に意識的に変革をもたらしたものがいる。それを神と呼ぶ人もあり、意識体と呼ぶ人もあり、サムシング・グレートと呼ぶ人もいる。

どうやって、彼は混沌の宇宙に秩序をもたらしたのか。彼は、マイナス質量だけを消したのである。そして、プラス質量だけになったとたん、宇宙に変化が生まれた。それが、いまビッグバンと呼ばれている宇宙のはじまりである。はじめは、塵あくたがあつまり、小さな星くずが生まれ、そして銀河へと成長した。その中からわが地球が誕生し、そして生命が生まれたのである。

大吾の話は、賀臼と貴子に衝撃を与えた。自分たちの存在が宇宙創成の秘密にまで関わるとは思ってもみなかったからである。

「清洲さんは、なぜ、そんなことまで知っているんですか？」

「私もなぜなのかは分かりません。ただし、清洲家に代々伝えられたきた話なのです。」

「マイナス質量のことですか？」

「マイナス質量という用語を使い出したのは、つい最近のことですが、その考え方は昔から言い伝えられてきました。」

「それでは、マイナス質量は、どこにきえたのでしょうか？」

「その半分はブラックホールに隠されたと言われています。」

「ブラックホール！」

賀臼と貴子は同時に叫んでいた。

「確かに、マイナス質量が消されたと考えれば、いろいろなことが説明できますが、あまりにも壮大な話なので、すぐには理解不能です。」

賀臼は正直に答えた。

貴子は続けた。

「賀臼君のお父さんも言ってたけど、三種類の力の中で重力だけが仲間はずれなの。だって、質量の符号がプラスでも、その間に働く力は、引力になってしまうのよ。」

大吾は、そこで、とんでもない話をした。

「私たちは、質量には虚数が隠されていると考えています。」

「虚数ですか？」

賀臼と貴子は、虚数や重力についてふたりで雑談したことを思い出した。

「そうか、質量にもし虚数が隠れているとすると、同じものをかけてもマイナスがでてくるわよね。」

賀臼も貴子の言わんとすることに気づいた。

「それなら、重力が引力になるということを説明できるんだね。」

「とすると、虚数質量とでも呼んだほうがよいのかしら。」

大吾は、ここで口を挟んだ。

「虚数という概念は、あくまでも人間が便宜的に考え出したものに過ぎません。神のレベルで、この概念が、そのまま通用するかどうかは、それこそ、神のみぞ知ることです。ですから、われわれが人間の知識で判断するのには限界があるということも、謙虚に受け入れるべきと思います。」

確かに大吾の言う通りである。しかし、自分たちのレベルで考えるためには、数学に頼るしかない。貴子は言った。

「でも不思議なことがもうひとつあるの、質量間に引力があるのなら、どうして、宇宙はひとつにまとまらないのかなって。」

大吾は言った。

「それも虚数のなせる業です。質量どうしが近づきすぎますと、虚数が反発して斥力が働くのです。ただし、虚数の反発を上回る力が働けば、虚数が結合して、マイナスになります。」

「分かったわ。それがブラックホールなのね。」

「ええ、そうです。ブラックホールの中では、虚数の反発相互作用よりも大きな力が働いているため、マイナス質量の存在が可能となっているのです。」

賀臼は納得した。

「先ほど、大吾さんが、マイナス質量はブラックホールに隠されていると言ったのは、このことだったのですね。」

「はい。」

「しかし、確か、マイナス質量の半分はと言いませんでしたか。残り、半分は

どこにあるのですか。」

「実は、残りの半分は、プラス質量に分配されたのです。マイナス質量は虚数質量ふたつに分解されます。そして、この虚数質量はすべてのプラス質量に割り当てられたのです。」

「そうか、マイナスは虚数二個に分解できるから、すべてのプラス質量に割り当ててるのに、マイナス質量の数は半分でいいということですね。」

「その通りです。」

貴子は言った。

「でも、すべてのものに虚数がついているなんて、不思議な話ね。簡単には、理解できないわ。」

「もちろん、この秘密は普通の人には分からないはずですよ。ガウス家の人間だけが知らされていたのです。ですから、虚数の存在は、秘密として封印されてきたのです。」

「でも、人類は虚数の存在を知ってしまったのね。」

清洲大吾は続けた。

「虚数そのものの存在は、古くは紀元前のアレクサンドリアの時代から知られていました。実は、仏教の世界でも虚数の存在は知られています。」

「仏教ですか？」

「ええ、そうです。仏教では、虚空界という言い方をします。これは、一方では、何も無い世界のことを言いますが、他方では、すべての万有を包括する真理のことも示しています。つまり、虚がすべてに宿ることを知っていたのです。」
賀臼も貴子も驚いた。

「しかし、虚数の有用性を顕在化させた罪は、ガウスにあります。彼は、代々家に伝わる秘密を表に出してしまったからです。もちろん、そのために、彼は大きな代償を払いました。長女の死と、次女の日本への脱出です。」

しかし、虚数の有用性を世に知らしめたことが何をもたらしたのだろうか。大吾は続けた。

「虚数にヒントを得た物理学者が、ミクロの世界を記述する量子力学を誕生させてしまったのです。」

「量子力学が虚数と関係があるのですか。」

「はい、量子力学は、万物の基礎に虚数があることを明らかにしてしまったのです。これは、封印しておかなければならない秘密でした。」

「量子力学ですか。」

「ええ、これも神の封印を破ったものの仕業です。」

「それは、誰ですか。」

「ド・ブロイ伯爵です。彼は、フランスの名家の出身で大変な金持ちでした。彼は、歴史研究家でしたので、古文書などもかなり集めていたようです。そして、偶然にも、虚数の秘密を明かした古文書を手に入れたのです。それは、表に出てはいけない書だったのですが、なぜか市中に紛れ込んでしまったようです。そして、彼は、大金をはたいて、その書を手に入れました。そして、虚数の秘密も同時に手に入れたのです。」

「虚数の秘密？」

「はい、万物に虚数が宿っているという秘密です。彼はそれを物質波と名づけて世に発表しました。」

「物質波ですか。」

貴子は言った。

「それならば、よく知っているわ。すべての物質には波の性質があるというものですよね。」

「その通りです。実は、この波という性質が、虚数の別の姿だったのです。ド・ブロイ伯爵は、神の秘密を暴く時に、少し衣に包みました。それが物質波という概念で発表された理由です。物理学者ではなかった彼が、ノーベル賞という栄冠を手に入れられたのは、この神の秘密を知ったからです。」

賀臼は、ここであることに気づいた。

「清洲さんの話で、マイナス質量や虚数のことは分かりましたが、それで、何か問題があるのでしょうか。たとえ、神が宇宙創造でマイナス質量だけを隠したとしても、いま、われわれが存在している宇宙があるのですから、何も問題はないのではないですか。それをあえて秘密にする理由が分からないのです。」

貴子も思った。確かに宇宙の神秘を知ることができたという感動はある。しかし、それが明らかになったからと言って、何か問題があるのだろうか。

「実は、大きな問題があります。たとえば、誰かがマイナス質量をつくり出せたとしたらどうでしょうか。」

賀臼と貴子は考えこんだ。そして、ふたり同時に気づいた。

「それは危険ですね。」

「そうです。マイナス質量をプラス質量に浴びせれば、質量は瞬時に消滅してしまいます。そして、何も証拠が残りません。もちろん、質量どうしが結合する際には、エネルギーが光として放出されるかもしれませんが、その後には、いっさい、痕跡が残りません。」

「究極の殺人マシンになるということですね。」

「いえ、それだけではありません。もっとスケールが大きいことも考えられます。例えば、国家そのものを消し去ることもできるのです。」

「なるほど、北朝鮮やCIAが探しているというのは、マイナス質量をつくる方法なのですね。」

「おそらく、そうだと思います。」

「でも、それって、使い方を間違えれば、地球そのものも消えてなくなるということよね。」

「その通りです。ガウス家が代々、虚数の秘密を封印してきたのは、その危険性を考えてのことだと思います。」

「しかし、その封印が解かれてしまった。そういうことですね。」

「残念ながら、そのようです。量子力学の登場によって、いずれ、こうなることは予想していましたが、こんなに早く、その秘密が漏れるとは考えていませんでした。」

「ところで、マイナス質量をつくり出す方法は、あの緑の封筒の中に入っていたのでしょうか？」

賀臼は心配になった。

「そうかもしれません。ただし、もしマイナス質量がつくり出せたとしても、その取り扱いが容易ではありません。まわりのプラス質量と反応して消えてしまうのですから、危険このうえない代物となるのです。」

賀臼と貴子は納得した。たとえ、マイナス質量を作り出せたとしても、プラス質量でできた世界では、それが生成したとたんにまわりと反応して消えうせてしまうだろう。

「ですから、マイナス質量を武器に使うということは、あまり心配していません。たとえ、北朝鮮やCIAが、それを作り出す方法を見つけたとしても、それは、無駄になるでしょう。」

大吾は、緑色の封筒の中味を知っているようなそぶりを見せたが、あまり詳しいことは話そうとしなかった。

「しかし、マイナス質量というのは実在するのですか。」

大吾はこともなげに言った。

「もちろん実在します。」

大吾は、さらに、驚くべき話をした。

「実は、マイナス質量を作り出せる人間が居るのです。」

「なんですって？」

「それが、清洲貴子いや賀臼貴子さんです。」

貴子は驚いたように大吾の顔を見た。

「私ですか？」

「はい、ガウス家に生まれた女の子には、その力があると伝えられています。」

「どうして、そんな」

大吾は、それからもっと驚くべき話を始めた。

サムシング・グレイト

「宇宙が混沌としていた時、ある意識体が、マイナス質量を隠したという話をしました。覚えていますか」

「ええ、そのおかげで宇宙に秩序が生じたのですよね」

「その通りです。しかし、話は、これで終わっていません。この意識体、これを神と呼んでもいいかもしれませんが。科学的にはサムシング・グレイトと呼ぶ方が正しいのかもしれませんが。つまり、何か偉大な存在です。なにしろ、われわれには、その正体が分からないのですから」

「そのサムシング・グレイトのおかげで、いまの宇宙が生まれたようなものですよね」

「だから、古代の人々は、神として崇めてきたのね」

と貴子が口を挟んだ。

「そうです。しかし、実は、サムシング・グレイトは、一人、こういう言い方が正しいかどうか分かりませんが、一人ではないのです。」

「もう一人居るといいますか。」

「はい、もう一人のサムシング・グレイトが居ます。一説には、神の双子のかたわれだと言われています。宗教によって呼び方は異なるようですが、もう一人のサムシング・グレイトは、悪魔や、瞑王、あるいはルシファーなどと呼ばれています。実は、ルシファーは、マイナス質量ではなく、プラス質量の方を消したかったようなのです」

「なんですって!」

「プラスを選ぶか、マイナスを選ぶかは自由です。サムシング・グレイトもプラスとマイナスの二人が居たと考えられるのです。たまたま、現在の宇宙が、プラス質量を選択したに過ぎません」

確かに、二者択一であるから、どちらの質量を消しても、何の問題もない。

「おそらく、もう一人のサムシング・グレイト、つまりルシファーは、プラス

質量を消したかったのではないのでしょうか」

宇宙創成が偶然で決まったと言われると、賀臼や貴子はあまりいい気分がしなかった。それは、自分達の存在にも関わるからだ。

「そして、神もそれを許していたと思われれます。それが、ハルマゲドンと呼ばれているものなのです」

「ハルマゲドン？」

賀臼は最終戦争という言葉を出していた。

「あのヨハネの黙示録に出てくる善と悪との最終決戦が起こるというハルマゲドンですか？」

「ええ、黙示録では、善と悪の戦いと書かれていますが、それはプラス質量とマイナス質量のことかと思われれます」

人類にとっては、マイナス質量はいわば悪の存在であるが、神とルシファーにとっては、そのような区別はなかったはずだ。

「しかし、予想外のことが起こりました。生命体の誕生です」

大吾は続けた。

「神が意図していたのかどうかは私には、分かりません。しかし、宇宙は、その進化の中で、地球という惑星に生命体を誕生させました。しかも、その中の一種は、神と同じような高度な知識を有する意識体へと進化したのです。神はあわてたでしょう。まさか、このような奇跡が起こるとは思っていなかったはずですよ」

賀臼は、なぜ神が慌てる必要があるのだろうといぶかった。

「平等を期するならば、プラスとマイナスは常に同じでなければなりません。神はルシファーに、いずれは、プラス質量を消すという操作を宇宙に施すことに同意していたのでしょう。ところが、自分がつくりあげた宇宙には人間が誕生しました。自分と同じような意識を持った生命体です。もし、宇宙からプラス質量を消してしまえば、人類はすべて滅んでしまいます。もとの混沌にもどるだけと言え、それまでですが、神は、それを惜しんだのです」

賀臼や貴子には、信じがたい話であった。

「そして、神はある人間に知恵を授けました」

「それが、ガウス家の先祖ですか」

「そうです。そして、ガウス家を守るイマーゴもつくったのです」

「イマーゴ？」

「はい、日本語に直せば、虚数です。つまり、清洲家の先祖です。」

賀臼は、自分が、そのイマーゴの子孫なのだと実感した。

「でも神は、どんな知恵を与えたのですか」

「神は、宇宙創成の秘密と、マイナス質量の話、そして虚数のことを、すべて教えたのです。そして、この教えは、万が一の場合以外は、すべて封印するよう命じました」

「しかし、その知恵だけではルシファーに対抗できないのではないですか」

「もちろん、その通りです。ですから、神はガウス家に生まれた女性にのみ、特殊な能力を与えました」

「特殊な能力！」

貴子は、自分が持っている能力が何なのか知りたかった。

「それは、マイナス質量をつくり出す能力です」

「マイナス質量！」

「はい。ガウス家の女性が身ごもれば、必ず双子が生まれます。そして、その双子には虚数の能力が備わります。この双子が意思を統一すればマイナス質量をつくり出せるのです」

「なんですって！」

「おふたりは気攻というのをご存知ですか？」

「ええ、中国の有名な拳法ですよね。確か、気を込めただけで、相手を倒すことができるのですよね」

「はい、実は、気攻のもとには虚数なのです」

「虚数ですか？」

「はい」

「すでに説明しましたように、すべてのプラス質量には虚数がそなわっています。ですから、虚数を送れば、反発力が働きます。普通のひとでも、わずかながら、この能力は持っているのですが、その力はあまりにも小さくて外からは見えません」

「中には、この気攻が強いひとがたまに居ます。それが、気攻の名人といわれる人たちです。しかし、そのような名人がいくら集まっても、マイナス質量をつくることなどできません。ところが、ガウス家に生まれる双子の気は、とてつもないものです。なにしろ、マイナス質量をつくり出せるのですから。そして、彼らが力をあわせれば、たちどころに物質を消滅させることもできるのです」

賀臼は、疑問に思った。

「なぜ、そのような能力が必要なのだろうか？」

神の考えが分からない。貴子は、自分にではなく、自分が生む子供たちに、

特殊な能力が授かると聞いて、少し複雑なようだ。

「平さんは、どうして、そんな力が必要なのかと考えているのではないですか？」

「ええ、その通りです」

「ルシファーのねらいは人間です。神が偶然にもつくりだした意識体。この存在のために、神はプラス質量の消滅を嫌がっているのです。ですから、人間さえいなくなってくれば、問題は解決します。つまり、ルシファーの願いは人類の消滅なのです。彼は、過去にも、マイナス質量を使って、人間を攻撃しようとしてきました。昔、神隠しと呼ばれて恐れられた事件がありました。それどころか、家や船がまるごと消えたという言い伝えがあります。これらは、すべてマイナス質量の仕業なのです」

「それをルシファーが手引きしたということですか」

「そうとしか思えません。しかし、マイナス質量がどこに出現するか。それを予知できれば、ルシファーのたくらみを止めることができます。彼らが、マイナス質量を送れば、それは、たちどころにプラス質量に変換できます」

「そうか、ふたりが虚数を一度に送ればマイナス質量になる。そうすれば、マイナスとマイナスで、プラスに変換されるということですね。」

「その通りです。しかし、マイナス質量を、そのまま持つことはできません。危険ですからね。ですから、マイナス質量を作り出す虚数を持つことになったのです。神は、虚数の能力というかたちで、ある特殊な人間にのみ、その権利を与えたのです。」

「しかし、ルシファーは、どうやってマイナス質量を蔓延させるつもりなのでしょう？」

「実は、マイナス質量を作り出すには膨大なエネルギーを必要とします。ルシファーとて、簡単になるものではありません。しかし、一度、マイナス質量とプラス質量を反応させると、そこに大きなエネルギーが生じます。うまくいけば、このエネルギーを利用して、つぎのマイナス質量を作り出すことができるのです」

「そうか、ちょうど連鎖反応のようなものですね」

「そうです。ですから、連鎖反応が起きないように、初期の段階でルシファーの企みをつぶせれば、人類の滅亡は防げるのです」

「ところで、どうして、ルシファーは連続して攻撃を仕掛けてこないのでしょうか？」

「私もよくは分からないのですが、ブラックホールの活動と関係しているよう

です。90年に1度の割合で、ブラックホールの活動が弱まり、マイナス質量が宇宙にごくわずか放出されるらしいのです。ルシファーは、それを利用しているようなのです。」

「ちょっと、待って下さい。もしかして、その攻撃が、もうすぐあるということなのですか。」

「はい、1830年の時は、賀臼ルイの双子の息子が、その危機を食い止めました。その次は、1920年のナチスドイツの誕生年です。そして今度は、2010年に攻撃があります。その時は、賀臼貴子さん、あなたのお子さんが危機を食い止める番です」

貴子は驚いている。

「勝手に決めないでよ。それでは、私が、双子を生んで、その双子が危機を食い止めるというの。そんな話、おかしいわ。だって、私は、そんなこと承諾していないのよ」

「運命と諦めて下さい」

清洲大吾は申し訳なさそうに、そう言った。

「そして、もっと重要なことがあります。この世には、ルシファーの手下となって動いている人間が大勢居ます」

「なんですって!」

「彼らは、富と権力を与えられています。そして、その代償にルシファーに魂を売ったのです。ルシファーに協力すれば、いずれ自分達が消滅させられるということも知らずにです。愚かな連中としか言いようがありません。実は、貴子さんが誘拐されたと聞いたとき、てっきりルシファーの手下どもが犯人かと思っていました」

そういうことだったのか。賀臼は、大吾が誘拐の相手の予想がはずれたと言っていたのは、そういうことだったのだ。

「少し休みましょう。おふたりも疲れたでしょう」

こう言うと、大吾は席をはずした。

天は虚に宿る 連載5

運命

賀臼と貴子は、言葉が出なかった。自分達がいましがた聞いた話がにわかには信じられない。あまりにもスケールの大きな話に、どう対応していいかわからないのだ。サムシング・グレート、そんなものが本当に存在するのであろうか。いまにも、大吾が顔を出し、さっきの話は、全部でたらめだったと言ってくれそうな気もした。しかし、それにしても、できすぎた話だ。

賀臼は貴子に声をかけた。

「貴子はどう思う。」

貴子は、悄然としている。

「どう思うって、今の話を信じるかっていうこと？」

「ああ。」

「分からないわ。あまりにも荒唐無稽な話で。でも清洲の叔父さんが冗談を言うとは思えない。」

「そうか。」

賀臼も気が重かった。しかし、今の話が本当ならば、貴子はもうすぐ双子の子供を生むことになる。本当だろうか。それが運命と清洲は言っていた。そして、ふと気がついた。その双子の父親は誰なのだろうか。まさか、自分ではあるまい。賀臼は意識せずに、貴子の体を凝視していた。

「あのね、賀臼君。いま、何か変なことを考えていなかった。」

賀臼はあわてた。

「だって、すごくいやらしい目で私を見ていたでしょう。」

「そんなことはないよ。誤解しないでくれ。ただ、貴子が双子を生むと聞いたんで、どうしても意識してしまったんだよ。」

「自分が相手をしてやるなんて言うんじゃないでしょうね。」

「何を言ってるんだ。そんなことは思っていないよ。」

賀臼は、心の中を覗かれたようで、ちょっと慌てた。

「ところで、貴子は、最近、誰かとセックスした？」

貴子はいったい何を聞くのかという顔をしている。

「いや、そんないやらしい意味ではないんだ。ただ、もしかして、双子を身ごもったりしていないかと思っただけだよ。」

貴子は、賀臼の頭を思いっきり叩いた。

「私は、結婚する相手としかそういう関係にならないの。見損なわないで」
「ということは、貴子は処女ということだね」

貴子は、また目をむいて怒っている。

ふたりが険悪なムードになりそうなところに、清洲大吾が、ある包みを抱いて戻ってきた。そして、その包みを賀臼の前に置いた。

「これは、賀臼さん、あなたのお父さんから預かっていたものです。あけて下さい」

何だろう。賀臼が包みを開けると、若い男女の写真が出てきた。

「平さん、あなたのご両親です」

賀臼は、はじめて自分の両親を見た。なぜか、涙がでてきた。そこには、自分とあまり年の変わらない若い親が居たからだ。もう、この世にはいない両親。できれば、一度会って話をしてみたかった。

ふと見ると、写真と一緒に、透明なプリズムが包みの中にある。

「このプリズムは何でしょうか」

「それを額に近づけてみて下さい」

賀臼が言われた通りにすると、プリズムが突然光りを放ちだした。そして、まもなく一条の光が、賀臼の脳を貫いた。一瞬、全身がしびれるような感覚に襲われた。

「これで、あなたは清洲家の正式な当主となりました。おめでとうございます。これからは、当主と呼ばせてください」

賀臼は何のことか分からなかった。

「いったい、どうしたのですか」

「はい、ある種のエネルギーが当主の体に注入されたのです。あなたの脳の一部を活性化するためです。すでにあなたには虚数の能力が備わっているはずですよ。」

「虚数の能力？」

「はい、当主には、虚数を送る能力があります」

賀臼は、自分の体の変化には、まったく気づいていない。どうすれば、その能力を使えるのであろうか。すると大吾は、こう言った。

「ただ念ずるだけで大丈夫です。例えば、テーブルの上のコップに気を投げかけて下さい」

賀臼はいったい自分が何をすればいいのか分からなかったが、テーブルの上のコップを眺めて、息を吹きかけるまねをした。すると、驚いたことに、コップが勢いよく飛びはね、壁にあたってこなごなに砕けた。貴子は、目の前で起き

たことが信じられないという顔をしている。

「また、コントロールがうまくいかないようですね。いまのでは、強すぎます。

ほんの軽く気を注入するだけ充分です」

賀臼は、今度は、応接間の椅子にねらいを定めた。少し気を送っただけで、椅子は壁まで滑っていった。

「そのうち、練習を積んでいけば、コツがつかめます」

と大吾は言った。

「それから、大きな相手に対する時は、それだけ大きなエネルギーを消耗します。あまり、乱用しないで下さい。そして、この能力は、賀臼貴子さんを助けるために備わっているのだということを、くれぐれも忘れないようにして下さい」

賀臼は気になっていることを聞いてみた。

「あのう。貴子さんに双子が生まれた時に、彼らも僕と同じ能力を持つことになるのですよね」

「ええ、そうです」

「ということは、私もマイナス質量を作り出せるということでしょうか」

「いえ、残念ながら、それはできません。当主の出す虚数波はかれらとは波の位相が異なるのです」

「位相が違う？」

「ええ、簡単に言えば、波の高低が逆なのです。ですから、同じように虚数を発しても、当主のは、双子の虚数を打ち消す働きをすることになります」

「それは、また、どうしてですか」

「多分、安全策だと思います。万が一、双子がルシファーに利用されそうになった時、当主が発する虚数で、その働きを阻止することができます。あるいは、双子が間違っ、その能力を使おうとした時には、それを未然に防ぐこともできるのです」

賀臼には、理屈はよく理解できなかつたが、自分にはマイナス質量をつくり出す能力のないことは、なんとなく理解した。そして、少しほっとした。

ふと見ると、貴子は顔面蒼白である。

「貴子さん、どうしました？」

大吾が心配そうに聞いた。

「叔父さんの話は、やはり本当だったのですね。心のどこかで嘘であって欲しいと願っていたのです。でも、いまの賀臼君の能力を見せられては、もはや疑うことはできません」

「貴子さんには、申し訳ないと思っています」

「それと、賀臼家に戻るのは、もう少しお待ちいただけますか」

「そう言えば、母さんが、私が二十歳になれば家に戻れると言われたと言っていたけど、あれは、どういうことなの？」

賀臼は、貴子が母の理恵を母さんと呼ぶのを聞いて、違和感を覚えた。しかし、理恵はまさに貴子の母親なのだ。自分の両親はすでに亡くなっている。

「貴子さんをわたしが預かったのには、ふたつの理由があります。ひとつは、敵の目を欺くためです。彼らも、賀臼家にお嬢さんができはしないかと監視していたはずですが、今回は、本家ではないところで貴さんが生まれました。そうなった理由は、私には分かりませんが、まさに神の思し召しかもしれません。ただし、油断はできません。賀臼家には女の子は生まれていないと、敵に思いこませる必要がありました。ですから、わたしが引き取ったのです」敵とはいったい誰だろうか。すると貴子は続けて聞いた。

「それでは、二十歳というのは、どういう理由なの？」

「はい、実は、貴子さんの能力が発揮されるのは二十歳以降なのです」

「なんですって。」

「貴子さんが、二十歳前に子供を生んでしまえば、例の能力は消えてしまいます」

賀臼は思った。とすると、敵から守ると言えば、聞こえはいいが、実は、貴子にマイナス質量を作り出す能力のある双子を生ませるために監視していたということも言える。

「賀臼流人さんも理恵さんも、ガウス家の使命は完全には教えられておりません。もちろん、二人に説明して納得してもらうことも可能でしょうが、それでは、情報が拡散するおそれがあります。このため、本家の命令として、貴子さんを預かることにしたのです」

考えようによっては、ひどい話だ。貴子を利用するために、大人たちが画策していたことになる。

貴子はしばらくは無言のままだった。

「これも人類を救うためです。貴子さんには、大変な重荷と思いますが、覚悟を決めていただけないでしょうか」

貴子は弱々しく言った。

「運命は変えられないのでしょうか？」

大吾は、気の毒そうにかぶりを振った。

ふと時計を見ると、もうすでに午後十一時をまわっている。大吾は

「平さん、理恵さんには、すでに連絡しております。今夜は遅いのでうちに泊まって行って下さい」

賀臼は少し迷ったが、大吾の好意に甘えることにした。

「うちの客間に布団を敷いております。当主ですから、客間というのも変なのですが、どうぞゆっくりおやすみ下さい」

賀臼は、気になっていたことを聞いた。

「両親は、誰かに殺されたのでしょうか」

「はい、敵の手のものに闇討ちを受けたのです」

「どういうことだったのか教えていただけますか」

「平さんにはつらい話かもしれませんが、実は、お父様とお母様は平さんを連れて、ある社におまいりに車で出かけたのです。その車が、前後を大きなトラックで囲われました。敵の手のものです。お父様はふたりを救うために、必至になって虚数の能力を使ったようです。ところが、敵は、それを知っていたようで、数台のトラックを用意していたのです。お父様は、何台かのトラックを大破させましたが、最後は力つきました。そして、最後の最後の力を振り絞って、平さんを脱出させたのです。こちらも、襲撃に気づいて、現場に急行したのですが、すでに、ご両親の乗った車は跡形も無く壊されていました。幸いだったのは、道路の脇の草むらに平さんが横になっていたことです」

平は、最後に父が必死になって自分を助けてくれたことを思うと、とても切ない気持ちになった。

「そうですか。私にも覚悟ができました。その敵と戦います」

大吾は最後にこう言った。

「実は、われわれも敵の正体は完全には把握していないのです。大体的見当はつけておりますが、次第に明らかになるでしょう」

大吾は賀臼を客間に案内した。そこは、二十畳は優にあるかという大きな部屋であった。中央に布団が敷いてある。

「大吾は、かつてお父様が着ておられた寝巻きを用意しておきました。清洲家の当主が着るものです。どうか、今後は平様がお使い下さい」

そう言うと、頭を下げて、部屋を出ていった。

これからどんなことが起きるのだろうか。賀臼は不安であったが、自分の巻き込まれた数奇な運命と、真剣に取り組まなければならないと心で誓った。

初夜

大吾が用意した寝巻きは自分にぴったりだった。賀臼の身長は185センチほ

どになっている。おそらく父も同じくらい大きかったのだろう。賀臼は、布団に入ったが、なかなか寝付けなかった。今日、大吾から聞いた話は、まさに驚天動地である。いまでも信じられない。しかし、自分に備わった能力を見ると、その話を信じざるを得ない。

賀臼は確かめるように、部屋の奥にある書棚に集中した。軽く気を飛ばすと、ちょっとやさっとでは動きそうもない書棚が、横に移動した。やはり自分の能力は確からしい。

しかし、賀臼は、貴子のことを思ってかわいそうになった。彼女に架せられた運命は、賀臼の比ではない。これから、貴子は、人類を救うかもしれない双子を生まなければならないのだ。しかも、その双子には、人類を滅ぼすこともできる能力が備わっている。自分なら、そんな過酷な運命に耐えられるだろうか。

その時、かすかな物音を聞いた。何だろう。賀臼は心配になった。両親の死の真相を知って分かったことだが、その敵にとっては、自分も危険な存在である。いつ、命を狙われても不思議ではない。ここで、気づいた。自分が賀臼家の養子になったのは、二重の安全策だったのだ。清洲家に自分が残れば、敵は、自分をも狙ったに違いない。

賀臼は、緊張した。もし敵であれば自分の能力を使うしかない。そう思って身構えた。すると、襖が半分ほど開いた。驚いたことに、そこには貴子が立っていた。貴子は、しばらく、中の様子を伺っていたが、思い切ったように賀臼の布団のところまでやってきた。そして、滑り込むように賀臼の横に入ってきた。

何をしているんだ。賀臼はあっけにとられた。貴子に声をかけようとする、貴子は

「しずかに」

と言うように、人差し指をたてた。若い女性の甘い香りがして、賀臼は息苦しくなった。貴子は、賀臼の耳に口を押し当てた。

「賀臼君。お願い私を抱いて」

賀臼は、わが耳を疑った。貴子はいったい何をしようとしているのか。その時、貴子が薄着の着物の下に何も着ていないことに気づいた。男の欲望が急に頭をもたげた。しかし、状況をよく知る必要がある。

よく見ると、貴子は半分泣いている。

「賀臼君。助けて、お願い。私は耐えられないの。自分の子供に、地球を滅ぼすような能力が備わるなんて」

「でも、人類を救うためなら、しょうがないじゃないか」

「いやよ。きっと、他に手はあるはず。賀臼君の能力だって、たいしたものじゃない。それを使えば何とかなるわ」

賀臼は貴子の真意が計りかねていた。

「叔父さんが言っていたでしょう。二十歳前に子供が授かれば、その能力は消えるって。今なら、まだ間に合うの。いま、子供ができれば、その子供は異常者ではなくなる」

賀臼は貴子の考えていることを理解した。自分から、能力を消そうとしているのだ。しかし、そんなことをしたら、人類に危機が訪れる。賀臼は迷った。そして、貴子に聞いた。

「だけど、いくら、能力を消すためとはいえ、好きでもないひとに抱かれるなんて、貴子はいやだろう」

こういうと、貴子は

「わたしは、賀臼君のことは嫌いじゃないわ」

と言ってくれた。

賀臼は胸が締め付けられるような気持ちだった。たとえ、それが貴子の嘘だとしても、それで良かった。

思わず、貴子を抱きしめた。胸の柔らかさに思わず、興奮してしまった。しかし、賀臼には、少し理性も残っていた。いま、自分の欲望に負けてしまったら、自分は、人類を滅亡させてしまうかもしれない。

すると、貴子の唇が賀臼のそれをふさいだ。貴子が言った。

「たとえば、マイナス質量をつくる能力がなかったとしても、賀臼君が、わたしと生まれている子供を守ってくれればいいじゃない」

自分には、どこまでそれができるだろうか。ルシファーと戦うことなどできるのだろうか。しかし、賀臼は、とうとう欲望に負けてしまった。そして、誓った。

「俺は、貴子を守る。どんなことがあっても、守るんだ」

と。

賀臼は、貴子の着物をはいで、自分も裸になった。そして、貴子をいとおしむように抱き寄せた。

「本当にいいんだね」

こう聞くと、貴子はゆっくりうなずいた。賀臼は、いままで味わったことの無いような感覚に包まれた。そして、貴子の中に虚数を注入した。

気がつくと、朝になっていた。隣をみると貴子の姿は無かった。これで、良

かったのだろうか。自分は、人類に対して、大変な過ちを犯してしまったのではないだろうか。賀臼は、とても心配になった。

決意

自分の洋服に着替えていると、ふすまの外で、大吾の妻が声をかけた。

「平様、もう起きておられますか」

賀臼は平様などと呼ばれて、少し気がひけた。

「はい起きております」

「朝食の用意ができておりますので、下まで起こし下さい」

「わかりました」

賀臼は、顔を洗って、食堂に向かった。そこには、貴子もすでにいた。

「貴子さん、大吾さん、おはようございます」

こう挨拶すると、貴子は、何事もなかったように

「賀臼君、おはよう。昨晚はゆっくり眠れた？」

と聞いてきた。

昨晚の出来事は本当にあったことなのだろうか。

貴子の対応ぶりを見ていると、賀臼は少し不安になった。自分は夢を見ていたのかもしれない。

「ああ、もちろんだ。こんなに安らかに眠れたのは何年ぶりだろう」

と少し冗談まじりに話したが、貴子には通じなかったようだ。

朝食をすますと、大吾がこう言った。

「申し訳ありませんが、本日は、おふたりとも大学を休んでいただけますか。

実は、昨日だけではいい足りない話がありました」

賀臼は思った。もし、大吾の話が本当だとしたら、大学などに行っている余裕はない。

三人は再び応接間に集まった。大吾は、二人に見せたい資料があると言って、それをとりに席をはずした。すると、貴子が賀臼に近づいてきてこう言った。

「昨夜のことは絶対に内緒よ」

「ああ、分かっている」

賀臼は、もしかしたら夢ではなかったかと考えていたが、どうやら夢ではなかったようだ。すると、貴子は賀臼の頬にキスをした。それから、五分ほどして大吾が戻ってきた。

「これを見ていただけますか」

大吾が手にしたのは、名簿であった。

「确实ではありませんが、これが敵と思われる人たちのリストです」

賀臼は驚いた。現職の総理大臣の名前が載っていたからだ。政界だけでなく、産業界の重鎮の名前も載っている。錚々たるメンバーだ。

「これが、本当に敵と思われる人たちの名簿なのですか」

誰にも教えずに、この名簿を見せたら、普通のひとは日本名鑑と間違えるであろう。

しかし、どうしてこれだけの人物が、ルシファーの手先になどなってしまったのだろうか。すると大吾は

「実は、ある宗教団体がバックについています。それは、透明信教という教団です。信者も、かなりの数が国会議員になっています。最近では、透明党という政党もつくっています。彼らの手口は簡単です。政治家には金、そして企業人にはポストです」

賀臼は透明信教という宗教団体はよく知っていた。東都大学内にも信者は多い。確か、トランスペアラント・ビリーフというサークルのバックに透明信教がいるはずだ。このサークルは、全国の大学に勢力を伸ばしている。

「彼らは、まず自分の信徒を増やし、政治家に育て上げます。さらに、有力な国会議員には多額の献金をするのです。はじめは、宗教団体と距離を置いていた政治家も、多額の献金と、選挙の時の集票力を宛てにするようになり、最後には、この教団の支援なしでは、政治家として立ち居かないようになります。後は簡単です。政治家たちは、すべて言いなりです。現職の総理大臣も、この教団のおかげで、いまのポストにつけたのですから」

しかし、その陰にはルシファーが潜んでいるのだ。賀臼は恐ろしくなった。

「政治家を手なずけたら、産業界を牛耳るのは簡単です。いまの日本は、すべて政府の許認可で動いているようなものです。そして、政治の力を利用して、自分たちの子飼いを企業のトップに据えるのです。すでに、ほとんどの大企業に、この教団の信者が入り込んでいます」

貴子は聞いた。

「警察はどうなの。検察だってあるわ。その人たちが取り締まってくれんじやないの」

「残念ながら、警察や検察も当てになりません。すでに教団に取り込まれています」

しかし、そこまで侵食されていたのでは、どうやって戦えばよいのだろうか。

「実は、ルシファーは日本をターゲットにしているのです。それは、賀臼家と

清洲家の存在を知っているからです。昔は、ヨーロッパに勢力を広げた時期もありました。ナチスドイツがいい例です。あれは、ルシファーの手先だったのです」

「そうか、ガウス家はドイツにいたんですものね」

「前にルシファーが行動を起こしたのは 1920 年です。この年、ヒトラーはルシファーに魂を売って、自分は独裁者になることを誓ったのです。ルシファーはヒトラーに演説の才を授けました。しかし、その時も、ガウス家の一族が活躍し、人類を救いました」

「ルシファーは、日本で何をしようとしているのでしょうか」

「ルシファーは、いままでの失敗で賢くなっています。賀臼家の力も分かっているはずですよ。ですから思い切った手を打ってくるでしょう」

貴子は、心配そうに言った。

「私達だけで、ルシファーの計画を食いとめられるかしら」

大吾は覚悟したように言った。

「止めなければなりません。そのためにも、彼らの計画を事前に知る必要があります」

「どうするのですか？」

「私が、透明信教の本部に潜入します」

「それは危険すぎるのではありませんか」

「確かに危険かもしれませんが、でも、いまは平さんという当主を懐くことができました。清洲家はもう大丈夫です。私がたとえ犠牲になっても十分戦える準備ができたのです。」

賀臼は少し不安になった。大吾は誤解している。われわれには賀臼家の切り札は、もはや残されていないかもしれないのだ。

天は虚に宿る 連載 6

賀臼の両親

賀臼から、事の真相を聞かされた賀臼流人と理恵は、いまだに信じられないという面持ちで、考えこんでいた。ただし、貴子が自分達の本当の娘と知らされた時には、とても喜んでいて。

賀臼は貴子に託された使命については、話さなかった。貴子が双子を生み、その双子が人類を救う最終兵器となるかもしれないのだ。それに、もはや、その能力は失われた可能性もある。

もちろん、流人と理恵は賀臼の話に対して懐疑的であった。当然のことであろう。同じ話を聞かされたら、百人が百人みな同じような感想を持つであろう。しかし、賀臼が自分に授けられた能力を見せると二人の対応が変わった。最初は賀臼の手品と思ったようだが、いくら検証しても種がない。次第に、賀臼の話に耳を傾けるようになった。実は、流人も賀臼家の血が流れている。それとなく小さい頃から、予備知識は植えつけられているのである。

「それにしても、平が清洲家の御曹司とは知らなかった」

と流人は驚いている。理恵も、貴子と平が賀臼家と清洲家で入れ替わっていたという話には正直驚きを隠せないようだ。流人は

「宇宙創成の秘密に、自分が研究している重力が関係しているとは、まさに驚きだ。父は、このことを知っていたんだろうな」

「そういえば、おじいちゃんは、父さんの生き方に賀臼家の秘密があると言っていたんだよね。父さんが重力研究をしているということが、まさに、根幹だったんだな」

知らず知らずのうちに、流人が重力に興味を持つようにもっていったのかもしれない。

「しかし、マイナス質量の可能性は知っていたが、それが、ブラックホールに隠されていたとは驚きだった」

「いまの学説ではどうなっているの」

「うん。ブラックホールでは、重力が強すぎるため、光さえも脱出できないとされている。つまり、質量が凝縮されたものがブラックホールという考えだ。マイナス質量という可能性は否定できない」

賀臼は思った。もし、貴子の秘密の能力が封印されてしまった場合、父流人の科学的知識を役立たせることができないだろうか。確かに、いままでは、ガ

ウス家に伝わる特殊能力で、難を逃れてきたかもしれないが、それが未来永劫続くとは限らない。人間には神が予測しなかった知恵が備わっている。現代科学の粋を集めることで、ルシファーの悪巧みに対抗できるかもしれない。

理恵は口をはさんだ。

「それでも、遺伝子工学の立場から言うと、マイナス質量を消したことで、宇宙に秩序が現れ、それが生命の誕生につながったという話は、とても信じられないわ。だって、生命の世界というのは、本当に複雑なのよ。ただし、サムシング・グレイトの存在はうなずけるところもあるの。実は、この呼び方は、生命研究者が好んで使うものなのよ。いま、ゲノム解析が進んで、いろいろなことが分かってきているんだけど、それでは、どうしてこのような遺伝子配列になったのかは誰にも分からないの。しかも、その配列は、まさに妙としかいえないような緻密さなの。まさに神のなせる業としか思えない。これが、われわれ研究者の共通見解なの」

賀臼は、サムシング・グレイトの存在はいまだにピンとこなかった。しかも、それが二人も居て、神とルシファーという。これでは、あやしげな宗教団体が、信者を勧誘に誘うときに使う世迷言と、なんら変わらない。

何しろ、人間には神の存在を確かめることはできないのだ。しかし、遺伝子工学の権威の理恵までが、サムシング・グレイトの存在を認めている。

それから母は続けた。

「実は、私には、もうひとつ気になっていたことがあるの。貴子さんのこと。生まれてすぐに、連れ去られたということは、彼女は敵にとってやっかいな存在ということになるわ。その理由が分からない」

父の流人も同調した。

「そうだな。賀臼家の人というだけで、危険視されるなら、私だって警戒されておかしくない。」

賀臼は、本当のことを言おうかどうか迷っていた。もし、本当の事をつげたら、二人は苦しむことになる。しかし、いずれは、真実を話す時がくるだろう。それは、貴子の特殊能力が封印された時だ。賀臼は決心した。それまでは、両親には内緒にしておこうと。

「そういえば、貴子さんは、今週末にも遊びに来てくれるそうよ」

と理恵は、嬉しそうに言っている。

流人は、さらにこう言った。

「今、決めたんだが、アメリカの大学には辞表を出す。来週にでも、アメリカを引き上げて、日本に帰ってくるよ」

「本当ですか。それは、心強い。大歓迎だよ、父さん」

と平は喜んだ。

「事態が事態だから、僕も清洲さんや平の戦いに協力することを決めた。しばらくは無職状態で、母さんの世話になるが、申し訳ない」

「何を言っているの。わたしだって、あなたがそばに居てくれた方が心強いわ」
賀臼は父がそばにいてくれれば、これほど心強いものはないと思った。貴子の究極の切り札がない状態では、父の科学知識が大きな味方になる。

流人は、こんなことを聞いてきた。

「平の虚数の能力はすごいと思うが、それは、虚数を飛ばすだけなのかい」

「えっ、それはどういう意味？」

「虚数を物質から奪うことはできないのかな。それなら、相手を飛ばすだけでなく、引き寄せすることもできるはずだ。実は、平の能力が気攻のようなものと聞いて思ったのだが、気攻の名人は、気を送るだけでなく、それを集めることもできるはずなんだ」

平は、そんなことは思ってみたこともなかった。しかし、試してみる価値はありそうだ。

「よし分かった。試してみるよ。」

大吾は、呼吸のようなものだと言っていた。確かに、いままでは物を飛ばすことしか試してみなかった。

賀臼は、テーブルの上の花瓶に集中した。最近、自分の能力をかなりコントロールできるようになっている。

まず、いつものように軽く気を送ってみる。すると、花瓶はわずかに動いた。今度は、空気を吸うように気を引き寄せてみた。残念ながら、花瓶は動かない。やはり、虚数は送ることしかできないのかもしれない。

三度目の時、花瓶がかすかに動いた。賀臼は驚いた。父の言っていることは正しいかもしれない。賀臼は集中した。すると、花瓶は明らかに、自分の方に寄ってくる。流人と理恵は関心したように賀臼を見ていた。

「やはり、平の能力は可逆なんだ」

流人はそう言った。

「かぎゃく？」

「大抵の物理法則は可逆だ。つまり、虚数を送れるということは、それを引き寄せすることもできる」

流人は、さらに、こんなことを言った。

「平、テーブルと花瓶から、同時に虚数を奪うことはできるかな」

賀臼は、父の意図が分からなかったが、試してみることにした。いままでは、花瓶しか見ていなかったが、テーブルにも気を集中した。そして、息を吸うようにしてみた。

理恵が驚いた顔をしている。

「あなた、花瓶が宙に浮いているわ」

平も驚いた。花瓶が本当に浮いているのだ。流人は

「やはりそうか」

と一人でうなずいている。

「平、これは平の能力が素晴らしいという意味だけではなく、科学の分野においても重要な発見だよ」

「どうして？」

「反重力を実証したんだ」

「反重力！」

「あるいは、重力が本来の姿を見せたと言ってもいいかもしれない」

平には意味が分からなかった。

「前に貴子さんが言っていたことを覚えているかい。三種類の力の中で重力だけが仲間はずれだって」

平は、電気力と磁気力と重力の式を思い出していた。

「重力だけは質量がプラスとプラスなのに、引力が働く。本来ならば、斥力なのにだ」

「それは、虚数が隠されていたからだよ」

「その通り。だとしたら、もし虚数をはぎとったらどうなる」

「そうか、本来の姿に戻るんだ」

「そうだよ。重力にも斥力が働くようになる」

「分かったよ、父さん。いま、僕がテーブルと花瓶から虚数を奪ったから、質量どうしに反発する力が働いたんだ」

「実は、反重力の研究は世界各国が軍事研究の一環として精力的に行ってきたいる」

「どうして軍事研究なの？」

「UFOさ。空飛ぶ円盤だよ」

「そうか、反重力があるとしたら、自由に空を飛べるものね」

「実は、軍の研究チームはUFOの飛行をくわしく分析して結果、重力場では、あのような動きは無理だという結論に達した。私も相談を受けたことがある。結論は、必ず、反重力があるはずだということだね」

U F Oと聞いて、賀臼は、あることを思い出した。

「実は、おじいさんの蔵書がしまっている倉に入ったとき、U F Oの写真が出てきて驚いたことがあるけど、それは、反重力と関係していたんだね」

「しかし、こうなると平の持っている能力というのは、大変なものになる」

「どうして？」

「平が能力をうまく使えば、U F Oを撃墜できるということになる」

「そうか虚数波を送れば、引力が働くから、地上に落ちてしまうということなんだね」

「それだけではない。平の能力を使えば、何でも人を思いのままにあやつれる。もしかしたら、地球を征服できるかもしれない」

「そうか」

「きっと、神に選ばれたものにしか、その能力は与えられないのだろうな」
神に選ばれし者。その意味を平は噛みしめていた。

調査開始

賀臼は久しぶりに大学に顔を出した。もし、清洲大吾の話が本当であるとすると、勉強どころではない。これから、自分は、人類の敵と戦わなければならないのだ。しかし、いまのところは、敵の動向が読めない。それが分からなければ作戦の立てようがない。

講義室に顔を出すと、貴子がみんなに囲まれていた。賀臼は、目で合図した。どうやら、貴子が誘拐された話で盛り上がっているようだ。きっと、敏子が面白可笑しく、言いふらしたに違いない。

「で、どうやって助けられたの？」

「それが、気づいた時には、正義の味方の手にあつたというわけ」

敏子たちは、貴子が秘密の場所に匿われていたということで大いに盛り上がっていた。

「それより、敏子。あなたは、確かトランスペアレント・ビリーの会員よね。あれって、どんな会なの？」

すると、敏子は

「びっくりするくらい素晴らしい会なの。しかも、入会金も会費もただなのよ」
賀臼が話に加わった。

「その会の会合はどれくらいの頻度で開かれているの？」

敏子は、驚いた。

「あれ、賀臼君、久しぶりね。しばらく顔を見ないうちに、また、いい男になったんじゃない。貴子のお兄さんなら、私がアタックしちゃおうかしら」などと冗談を言って、賀臼の腕に、自分の手を絡ませてきた。賀臼は対応に困った。このまま、じゃけんに手を振りほどくのも大人気ない。それに、貴子とは兄妹ということになっている。すると、図に乗った敏子は甘えるように、頭を賀臼の二の腕に擦りつけてきた。ふと見ると、貴子がものすごい顔で睨んでいる。

賀臼は、ちょっと咳払いして、話題を変えた。

「もし、近いうちに会合があるならば、僕も参加したいんだけど、どうだろう」すると敏子は

「もちろん大歓迎よ。トランスペアレントは、誰にでもオープンなの。確か、今度の水曜日の夜に集まりがあるから、ふたりで行ってみよう」と積極的だ。

賀臼は敵陣視察のつもりなのだが、敏子は、すっかりデートにでも行く気分になっている。賀臼は敏子の腕を振りほどくようにして

「それじゃ、水曜日によろしく」

と言って、その場を去った。

あのまま、腕を預けていたら、敏子は、もっと大胆なことをしてきそうだ。それにしても、貴子は、ものすごい顔でにらんでいた。やきもちでも妬いたのだろうか。

その日の夕方、賀臼は清洲家に赴いた。賀臼は、大吾にトランスペアレント・ビリーフの会合に潜入することを相談したかったのだ。もちろん、貴子の顔を見たかったのも事実である。最近、賀臼は貴子のことばかり考えるようになっていた。一時でも離れたくない。そんな気持ちが強くなっていったのである。

例の応接間に通されると、貴子が入ってきた。だまって、向かいの椅子に腰掛けている。あまり機嫌が良さそうではなかった。

「やあ、こんばんわ」

賀臼が話しかけても黙ったままである。

「貴子。どうしたんだ。具合でも悪いのかい？」

そういうと

「敏子に腕を組んでもらって、とても嬉しそうだったわね。目じりがさがりっぱなしで見てられなかったわ」

「何を言っているんだ。あの場では仕方がないだろう」

「それにデートの約束までしちゃって。このドスケベ」

「敵の視察だから仕方がないじゃないか。機嫌を直してくれよ」

貴子の機嫌は直りそうもない。自分の目の前で、敏子が賀臼に甘えるように、頭を押し付けていたのを見て、思わず、頭にきてしまったのだ。敏子にあたるわけにはいけないので、怒りは賀臼に向かっているというわけである。賀臼が弱っていると、大吾が入ってきた。

「当主、ようこそお出でいただきました」

「清洲さん、今日は忙しいところすみません」

すると、大吾はこんなことを言った。

「当主、もし、貴子さんにお会いしたいのであれば、私をダシにつかわなくとも結構ですよ。いつでも、気が向いた時にお越し下さい。この家は、本来は、当主の持ち物なのですから」

賀臼は、大吾が自分と貴子との関係を知っているのだろかと一瞬思ったが、それならば、こんなに平穩でいられるわけがないと思い直した。

「いえ、今日は、本当に相談に来ました。透明信教のことです」

「透明信教ですか」

「はい、透明信教がスポンサーになっているサークルのトランスペラント・ピリーフがあります。最近、このサークルが急速に大学に浸透しています。その活動が、敵の計画と何か関係があるのかもしれませんが。そこで、今度、そのサークルの会合に行ってみることにしました」

「ありがたい話ですが、あまり、無理はしないで下さい」

「もちろん、いきなり危険なまねはしません。様子を見るだけです。実は、貴子さんの友人がサークルに入っているのです。その方の紹介ということにします」

「潜入とかいって、敏子とデートしたいだけじゃないの」

貴子はまだ怒っている。

「そんなことはないよ。本当に、敵情視察だよ」

「それじゃ、私も一緒に行こうかしら」

「それは、危険すぎる。いざとなったら、僕には、虚数の能力がある。それで、逃げおおせられるが、いまのところ、貴子は無防備だ」

「ほら、やはりデートしたいだけじゃないの」

大吾は、そんなふたりをほほえましそうに見ている。

「当主、貴子さん。実は、私も透明信教の信徒になることになりました」

「大吾さん。それは、危険ではないですか」

「実は、透明信教に入るのは実に簡単なのです。インターネットで申し込みが

できます。」

「インターネットで信者になれるのですか？」

「ええ、実に簡単です。登録サイトで名前などを記入して、あとはお布施を振り込めば、自動的に信者証を送ってくれるのです」

賀臼は驚いた。

「今度、本部での集まりがありますから、顔を出そうと思っています」

「しかし、それこそ危険ではないですか」

「いえ、その集会には千人以上が集まるということですから、心配はいらないと思います」

「そうですか？」

賀臼は、本当に大丈夫だろうか。

「それと、もうひとつお願いがあります。トランスペアレント・ビリーフの会合に貴子が来ないように監視していて欲しいのです」

「なによ。それ、私がじゃまってこと」

貴子は怒った。

「違う。貴子。よく聞いて欲しい。もしかしたら、その会合で何かが起きるかもしれない。何も無いとは思いますが、いまは万が一のことを考えた方がよい。もし、ふたりとも捕われたら、それこそ敵の思うつぼになる」

「それは私が足手まとってこと？」

「そうとってもらっても構わない」

貴子は不満そうだ。すると大吾は

「貴子。ここは、当主の言うとおりにしていただけませんか。その日は、私が監視役を務めます」

大吾は、賀臼の意図を少し違って捕えたようだ。貴子には人類を救う双子を生んでもらうという大事な使命がある。その使命を全うするためにも、貴子を守らなければならない。そう賀臼が決心したと見たようだ。しかし、賀臼の本心は違う。大事な貴子を、ただ守りたい。それだけなのだ。

その時、大吾に電話がかかってきた。大吾が席をはずすと、賀臼は貴子に近づいた。そして、そっと抱き寄せた。貴子は、賀臼の胸に顔をうずめた。

「僕は、君を守る。人類なんてどうでもいいんだ。貴子を守りたい。それだけだ。分かってくれるだろう」

こういって、貴子はだまってうなずいた。ようやく心が通じたようだ。

トランスペアラント・ビリーフ

会場は熱気に包まれていた。サークルの会合は、武道館を借り切って行われていた。ステージには、サークルのリーダー達が五人ほど陣取って、会を仕切っていた。多分、会場には数千人が詰めかけている。その八割近くが女性である。これが、すべて無料というのだから驚きた。

リーダーたちは、プロの歌と踊りで会場に集まった会員を魅了していた。まるで、アイドルスターのショーのようだ。ステージは、色鮮やかな照明が、めまぐるしく回転している。

横の敏子は、すっかり会の雰囲気にも染まっている。

リーダーが

「楽しいですか！」

とかけ声をかけると、みんなが

「楽しいです！！」

と大声で答えている。会場に集まったみんなには、番号札が渡されていた。

これから、いよいよメインイベントが始まるらしい。リーダーたちが、番号札の入った箱から、一枚ずつ札を選びだす。そして、札に書いてある番号を読み上げる。その番号札を持った会員は商品を貰えるのである。

賀臼は驚いた。その商品が、みな高額なのである。最初の景品は、最近はやっている携帯音楽プレーヤーである。10台ほど用意されている。1台40000円近くする代物だ。それを惜しげもなく、どんどん配っていく。商品をもたらした会員はステージに呼ばれ、リーダーたちから手荒い祝福を受けたあとに、ステージに並ばされる。今日のラッキーメンバーというわけである。

つぎの商品は、驚いたことに、ノートブックパソコンである。1台20万円以上は、するだろう。それが10台。しかし、それから商品は、ますますエスカレートしていった。隣の敏子は、番号札が呼ばれるたびに興奮している。

リーダーたちは、みな背が高く、端正な顔立ちをしていた。女性の会員が多い理由も分かる。敏子は、リーダーたちの中にお気に入りがあるらしい。まるで、アイドルスターのようである。

商品は、ついに海外旅行になった。賀臼は、これらの資金はどこから来ているのだろうかと考えた。こんなに気前よく商品を配るということは、並大抵の財力では適わない。バックにかなりのスポンサーがついているはずである。本来、宗教団体は、金儲けのために、このようなイベントを行うはずだ。これでは、自分達が損をするばかりである。

その時、敏子が大きな声を上げた。

「賀臼君。やったわ。本当にやったの。私に海外旅行があたったのよ!。」と番号札を振り上げている。敏子は、喜びいさんでステージに上がった。リーダーたちは、敏子を抱きしめ、キスマでしている。異様な光景だ。しかし、敏子は、海外旅行があたったという興奮で、もう普通の状態ではない。賀臼は少し心配になった。しかし、商品が当選するのは、ほとんどが女性会員である。何か魂胆があるのだろうか。

会場は興奮の渦に包まれていた。じっとしてられずに、その場でジャンプしているものもいる。この時、リーダーが話した。

「本日来られた会員の皆様は、とてもラッキーです。実は、本日、わがサークルのスポンサーが会場に来ているのです」

こういって、会場は歓声に包まれた。すると、一瞬、会場が真っ暗になり、ステージの上手にスポットライトが当たった。そこには、男が立っていた。この会場には珍しくスーツにネクタイという格好である。歳は三十五ほどであろうか。エリートサラリーマンのように見える。

リーダーは、男のことを田村大作と紹介した。賀臼は、その顔に記憶があった。そうだ、大吾がみせてくれた透明信教のパンフレットの表紙の裏に載っていた。透明信教の教祖ではないか。こんな会合に教祖みずから出てくるとはいったいどういうことなのだろうか。

「本日、トランスペアレント・ビリーフの会員の皆様に素敵なプレゼントがあります」

そう言って、田村は、下手から布で覆われたテーブルを持って来させた。布をとると、そこには、一万円札が載っていた。

「ここに100万円の束が20個あります。本日は、この100万円を20の方にプレゼントしましょう」

と田村は宣言した。賀臼は驚いた。どこまで大盤振る舞いなのだろう。会場の興奮は、これまでの最高潮に達した。中には、失神したものまでいる。

田村はこう言った。

「私は、透明信教の教祖をしております。田村大作と申します」

ここで、田村は一呼吸おき、会場を見渡した。そして、ゆっくりとした口調で話し出した。

「皆様は、宗教団体と聞くと警戒されるかもしれませんが。当たり前です。いままでの宗教団体は、信者をいかにだまして金を出させるか。それしか、頭になかったからです。しかし、それは真の宗教団体ではありません。真の宗教団体は、困ったひとが居たら、援助してあげる。それが、本当の宗教なのです」

すると、リーダーが

「タムラ、タムラ、タムラ...」

と声を出した。すると、会場のみみんなも、それに併せるように

「タムラ、タムラ、タムラ...」

と連呼し出した。

すると、田村はおもむろに最初の番号札を引いた。その番号を持った会員が飛び跳ねるように喜んでいる。まわりのものも、肩をたたいて祝福している。つぎつぎと100万円を手にする幸運な会員が呼び出されていった。そして、いよいよ、最後の100万円になった。会場にいる者たちは、最後の幸運を求めて、みな祈っている。すると、田村は

「1177番」と読み上げた。賀白は驚いた。自分の番号札だ。どうしようか迷っていると、再び

「1177番」

と呼ばれた。賀白は仕方なく、自分の札を掲げた。まわりは大興奮である。賀白がステージに上がると、田村は、最後の札束を高く掲げ、そして、それを急に賀白に投げつけた。ものすごい勢いである。会場のみみんなもあつけにとられている。賀白は思わず、気功を使った。すると札束は、急に速度を落とし、賀白の手に収まった。会場は、奇跡でも見たかのように、驚いている。

教祖の田村は、笑いもせず、賀白をにらんでいる。

「そして、本日の最後の幸運者に透明信教のご加護を」
そういうと、上手に去っていった。するとリーダーが

「透明信教ばんざい!!」

と叫んだ。他のリーダーたちも

「透明信教ばんざい!!」

と呼応した。すると、それに併せるように会場からも

「透明信教ばんざい!!透明信教ばんざい!!」という声が上がった。そして、ひとりが、こう叫んだ。

「透明信教に入信すれば、もっと良いことがあります。みなさん、透明信教に入りましょう」

すると、再び

「透明信教ばんざい!透明信教ばんざい!透明信教ばんざい!!!」

という声が会場に鳴り響いた。

賀白は集団心理の恐ろしさを思い知らされた。この会場の中で、おそらく賀白ひとりだけが覚めているのであろう。

あの敏子でさえ、狂ったように

「透明信教ばんざい！」

と叫んでいる。

異様な盛り上がりを見せた会場は、それから一時間近く興奮状態のままだった。リーダーのひとりが

「本日、幸運を勝ち得た人たちのために、二次会が用意してあります。もちろん、すべて、透明信教が費用を持ちます。どうぞ時間のある方は参加して下さい」

とステージに上がった今日のラッキー会員に声をかけた。どうやら、全員参加するようである。九割は女性であろうか。男といえば、賀臼のほか、数人しかいない。賀臼は、すこし迷ったが、興奮状態の敏子が心配だった。それに、敵の動きを探るのにもよい機会かもしれない。そう思って、参加することにした。

二次会場には、バスで移動させられた。豪華なバスである。なんと、七台のバスが用意されていた。賀臼は敏子の隣にすわった。

「賀臼君、どうだった。来てよかったでしょう。私は、今日で五回目なんだけど、ようやく、商品があたったの。賀臼君は、最初から100万円があたるなんて超ラッキーよね」

と言っている。

「あの、教祖はいつも来ているの？」

「いえ、今日がはじめてよ。でも、立派なひとよね」

と言っている。何が立派なものか。単に、金で人心を買っているだけではないか。賀臼は、そう思ったが、それは口に出さなかった。

「私、決心した。絶対に、透明信教の信者になる」

賀臼は考えた。確かにこれだけの会合を開けば、参加者の多くは入信するかもしれない。しかし、透明信教の信者を増やすことだけが、この大盤振る舞いのサークルの目的なのだろうか。

バスは、20分ほどで、ある大きな日本風のレストランに到着した。今日は貸切りらしい。大きな門をくぐって中に入ると、すでに料理が容易されていた。賀臼は驚いた。見たこともないようなご馳走が並んでいる。大きなたらばガニや毛蟹、ふぐやおおとろの刺身、あわびやイセエビもある。

会員たちは大喜びである。すぐに大宴会が始まった。リーダーたちが各席に赴いて酒をついで廻っている。敏子も、平気で酒を飲んでいる。ほかの女性会員もみな酒で盛り上がっている。海外旅行にあたったものたちが、みんなで一緒にツアーを組んで行こうなどと盛り上がっている。しかし、賀臼は警戒して

いた。先ほどの田村は、賀臼の腕を確かめたに違いない。それに、自分が最後の幸運を勝ち得るといふこともおかしい。もしかしたら、仕組まれていたのではなかろうか。そんな不安を抱いた。

リーダーのひとりが近づいてきて、賀臼に話しかけた。

「あなたは、飲まないのですか？」

ひとり覚めた様子の賀臼が気になったようだ。

「ええ、酒はあまり飲めないのよ」

そう言うと

「アルコールの入っていない飲料もありますが、どうされますか？」

と聞いてきた。ひとりだけ、何も口にしないのもおかしい。賀臼は

「それでは、ウーロン茶をいただきます」

男が持ってきたのはペットボトルに入ったウーロン茶のようだった。

「それでは、これをどうぞ」

ボトルを置くと、リーダーは去っていった。賀臼は少し警戒したが、それが市販のペットボトルであったので安心した。蓋を開けて、いっきに流し込んだ。かなりのどが渴いていたので、とてもおいしかった。まわりの熱気と興奮で、のどがからからになっていたのだ。

敏子とはみると、まわりの人間と肩を組みながら、騒いでいる。賀臼は、敏子があまりにも無防備なので気になっていた。さっきから、スカートの中が覗いている。敏子は、興奮しているのか、そんなことを気にしていない。すると、リーダーのひとりが、急に敏子に抱きついてキスをした。そのまま、床に押し倒している。他の男たちは面白そうにはやしたてている。賀臼は、あわてて止めに入ろうとしたが、身体が自由に動かない。男は、敏子の服を脱がせている。

「やめろ！」

そう言おうとしたが、声がでない。なんとか虚数を送ろうとしたが、なぜか男には通じない。そして、急に意識が遠のいた。

「しまった」

そう思った時には、すでに手遅れだった。

畏

ドアを叩く音が聞こえた。あれ、どこかで聞いた声だなと思った。しかし、頭の中がどうにかなっている。

「敏子、大丈夫なの。はやく戸を開けて。」

誰かが、ドアを叩いている。しかし、しばらくすると、その声の主は去っていった。賀臼は、ようやく意識が回復してきた。

「そうだ。そういえば、昨夜はトランスペラント・ビリーフの会合の後の飲み会に連れて行かれて、そこで意識を失ったのだった。自分は、いったい何処に居るのだろうか。」

すると、自分が全裸であることに気づいた。どうして自分は、こんな格好をしているのだろう。見ると誰かが横に寝ている。薄明かりの中で、目を凝らしてびっくりした。敏子が全裸で寝ている。これは、どうしたのだ。

その時、ドアの鍵が開けられた。

「大家さん、すみません。緊急事態なものですから。」

そう言った声は貴子のものであった。賀臼はあせった。

貴子は、敏子のアパートの部屋に入ったとたんに驚いた。そこには、全裸の賀臼が立っていた。しかも、その同じ布団には、敏子が横になっている。騒ぎに気づいたのか、敏子も目を覚ました。

「あら、貴子じゃない。どうしたの。」

と暢気なことを言っている。状況がよく分かっていないのだ。そして、賀臼がそばに居ることに気づいたようだ。そして、最悪の言葉を発した。

「賀臼君、きのうは楽しかったね。」

貴子は、ふたりのことを目をまるくして見ている。一緒に来た大家は、まずいところに出くわしたというように

「私は、これで失礼します。」

と言って、あわてて帰っていった。

「貴子、これは誤解だ。何かのまちがいなんだ。」

賀臼はそう言ったが、貴子は、そのまま走り去っていった。ようやく目が覚めた敏子は

「なんで賀臼君は裸なの。」

と聞いている。そして、自分も全裸なのに気づいて

「やだ。私どうしてこんな格好をしているの。」

そう言って、ふとんで自分の体を隠した。敏子は

「私、昨日の夜のことは覚えていないんだけど、賀白君と、こんな関係になっても私は、後悔しないわ。」

などと、とんちんかんなことを言っている。

賀白は気づいた。これは、罠なのだ。自分はどうかつだった。貴子に真相を知らせなければならない。その前に敏子を説得する必要がある。

「敏子、これは何かのまちがいだ。僕達は、決して、そんな関係になっていない。」

そう言うと

「男はいつもそうやって逃げるのね。」

と言っている。

賀白は覚悟した。そして、敏子に真実をつけることにした。

「敏子に秘密にしていたことがある。実は、貴子は僕の妹ではないんだ。」

「なんですって。」

「貴子は、僕にとって、この世でいちばん大切なひとだ。」

敏子は驚いている。

「それから、透明信教は、敏子が考えているような立派な宗教ではない。気をつけて欲しい。」

そして、服を身に着けると、学校に向かった。

天は虚に宿る 連載 7

清洲家

あまり期待はしていなかったが、やはり貴子の姿は大学に無かった。賀臼は同級生に「貴子をみなかった」と聞いたが、誰も、今日は見えていないという。

賀臼は、清洲家に向かった。そして応対に出た大吾に聞いた。

「貴子さんはいますか？」

「ええ、いま自室にこもっています」

賀臼は安心した。

「実は、今朝はやく貴子さんに電話がかかってきました。すると、あわてたように出て行ったのですが、すぐに、戻ってきて、後は部屋にこもりっきりです」賀臼は昨晚から今朝にかけての出来事を大吾に話した。

「そうだったのですか？」

賀臼は、疑問に思っていることを口にだした。

「敵は、どうして、こんな周りくどいことをしたのでしょうか。私は無防備だったのですから、そのまま消すこともできたはずですよ」

「敵には当主を殺すことはできません」

「それはどうしてですか」

「虚数の能力を授かった当主は、たとえ気をうしなっているとしても、能力を発揮できるのです。誰かが近づき、当主に危害を加えようとしても、自然に虚数が発せられます」

賀臼は知らなかった。

「もちろん、敵が本気で当主を亡き者にしようと、最初から道具を準備していたら、別だったでしょう。例えば、巨大な機械で襲われたら、当主といえども苦戦します。しかし、昨日は、敵もそこまでの準備はできていなかったはずですよ」

「しかし、今朝のわなはいったい何だったのでしょうか。あまり意味がないと思います」

「敵は、貴子さんと当主の仲を知りたかったのではありませんか」

「えっ、それはどういうことですか」

「当主、これはつらいことかもしれませんが、よく聞いてください。おそらく、敏子さんは透明信教に取り込まれたと考えて良いでしょう」

賀臼は混乱した。

「当主が、最後の当り番号を引いたのは偶然ではありません。おそらく、敏子さんがステージ上で、リーダーに当主の番号を教えたと思われます」
そうか、それならば、自分の番号を田村が当てた理由が納得できる。
すると、そこに貴子が現れた。

「賀臼君。わたしもそう思う」

貴子は疲れたような表情を見せていた。

「実は、今朝は頭が混乱して飛び出してきちゃったんだけど、よく考えてみたらおかしいということが分かったの」

「なにがあったんだ？」

「今朝、わたしに変な電話がかかってきたの。友人の敏子が大変なことになっているから、彼女のアパートまで助けに行きたくて欲しいと言うのよ。昨夜は、トランスペアレント・ビリーの会合に出たはずなので、何かあったのかと心配したの。それで、敏子の携帯に電話してみたんだけど、何度かけても、通話ができない状態というメッセージが出て、あわてたの」

「それで、敏子のアパートに飛んできたというわけか」

「ドアを叩いても、中から返事がない。そこで、大家さんに頼んで合鍵で開けてもらった、敏子と賀臼君は裸で抱き合っていたというわけ」

賀臼は

「何も抱き合っていたわけではないよ。布団の中に寝かされていただけだよ」と抗弁した。

貴子は、冷静になったとは言いながら、今朝のことを根に持っているなど賀臼は感じた。

「敏子をこんなことに巻き込んでしまって、とても残念だわ」

と言った。

「僕は、敏子を説得するために、かなりのことまで本当のことを話してしまった。貴子が自分の妹ではなく、自分にとって、世の中でいちばん大切な存在ということも話した。まずかったかな」

すると大吾は

「仕方がないでしょう。敵はふたりの関係を疑がっていたはずですよ。問題は、貴子さんが賀臼家の出ということに彼らが気づいたかどうかです。田村は、当主の能力を確かめました。つまり清洲家の正当な系統者ということを知ったはずですよ。ところが、その当主が、貴子さんは自分の妹ではないと言った。それならば、誰なんだろうと考えているはずですよ」

賀臼は、自分がいかにかつだったかを悟った。

「しかし、敏子が敵のスパイなんて信じられない」

「いまは何事にも慎重を期すべきです。彼女は、トランスペアレント・ビリーフの会合に出ています。すでに、透明信教に取り込まれたと思った方がいいでしょう」

そして、大吾はこんなことを言った。

「昨夜、豪華商品があたった会員は、ほとんどが女性ではなかったですか？」

「ええ、その通りです。わたしも、少し気になっていました」

「しかも、美人ぞろいだったでしょう」

賀臼は少しつまったが

「ええ、確かに、みな美人でした」

しかし、大吾は何を言い出すのだろうか。

「実は、透明信教には変な噂があります。政治家や産業界の重鎮を取り込むために、女性を使っているというのです」

「女性を使っている？」

「はい、彼女らは、おそらく政治家たちにあてがわれているはずですよ」

賀臼は思った。敏子は、そんなことをしたのだろうか。貴子はショックを受けているようだ。自分の友人が、そんなことに利用されているとしたら、やるせない気持ちでいっぱいであろう。

「田村は、それを利用して政治家たちを籠絡するとともに、いざという時には、脅しの道具に使っているのです。北朝鮮が日本の政治家を取り込むときに使っている手です」

さらに、大吾は、驚くべきことを言った。

「わたしは、今夜、透明信教の集まりに出かけてみます」

「なんですって！」

「敵の様子を探ります。彼らは、何かを計画しているはずですよ。もしそうだとすれば、こちらも、それなりの対策が必要になります」

「しかし、それは危険ではないでしょうか」

賀臼は大吾のことが心配になった。

「私も覚悟を決めました。実は、妻の裕子は実家に帰しました」

そう言えば、いつもやさしい笑顔で迎えてくれる裕子の姿が見えない。

「当主、私はこれから、教団の集会に出る準備をします。今日から、この家に住んで、貴子さんを守っていただけますか。敵は、貴子さんが賀臼家の血を引いていると気づいた恐れがあります」

それは、賀臼の望むところであった。ただし、大吾とは心配していることは違

う。大吾は、貴子のことにも心配かもしれないが、これから生まれてくる双子のことを気にかけているのだ。人類の救世主だから当たり前であろう。敵は、双子の誕生の前に貴子を消そうとするはずだ。

賀臼は、母の理恵に事情を説明した。理恵は、貴子さんを必ず守るのよと言って承諾してくれた。来週には、父がアメリカから戻ってくる。

大吾は、八畳ほどの部屋に賀臼を案内した。

「兄の書斎です。これからは、当主の部屋になります」

壁には、大きな書棚があった。その横に勉強机がある。

大吾は、午後はやくに外出した。教団の集会は夜だが、その前に、いくつか道具を用意するらしい。

賀臼は、いまは自分の部屋となった父の部屋で、清洲家の歴史書を読んでいた。清洲家は、江戸時代の初期にヨーロッパから渡ってきたという。賀臼家だけではなく、清洲家も渡来人であったのだ。確か、神が特殊な能力を与えたイマーゴの子孫なはずだ。

これからは、貴子を守らなければならない。たとえ、貴子の能力が封印されたとしても、敵はそのことを知らない。ここで、賀臼はあることが不安になっていた。敏子が襲われそうになったとき、賀臼は確かに虚数を飛ばした。しかし、あのリーダーには、何の変化も起きなかった。いったい、そのからくりはどうなっているのだろうか。早急に、調べる必要がある。でなければ、貴子を守ることはできない。

夕方になって、貴子が賀臼を呼びに来た。夕ご飯ができたという。貴子が料理してくれたのだ。賀臼は感激した。ふたりだけの食卓は、うれしいようでもあり、恥ずかしくもあった。

「大吾さんは大丈夫だろうか？」

「透明信教のことはかなり調べていたみたい。大吾さんも用心していると思うわ」

「ところで、明日、母が、こちらに来るそうだ」

貴子はうれしそうだ。当たり前だ。自分の本当の母親なのだから。母は、賀臼の着替えや、身の回り品を持ってきてくれるという。

賀臼には、貴子に元気がないように見えた。敏子のことは、もう誤解がとれているはずだ。すると貴子は、こう言った。

「私は、後三ヶ月で二十歳になってしまう。とても不安なの」

そうかと賀臼は思った。まだ、貴子の特殊能力は封印されたわけではない。そ

れが不安で、貴子は心配なのだ。

食事の後は、賀臼が後片付けをした。貴子はテレビをつけてニュースを見ている。すると、いきなり田村大作の顔が現れた。こうやってみると、なかなかハンサムである。とても、人類を滅ぼすルシファーに魂を売った男とは思えない。ニュースでは、透明信教の集会の様子が伝えられていた。

透明信教は、宗教団体としては珍しく、各種慈善事業を積極的に展開している。納税も果たしているという。集会には、現総理大臣や、財界の首脳が出席している。今日の集会には、信者が一万人も集まっているらしい。田村は、お布施の強要はしないが、みな田村の教えに賛同して、自主的に寄進をするのだという。

賀臼はふと考えた。田村の豊富な資金はどこから提供されているのだろうか。先日のトランスペアラント・ビリーフの会合だけでも数億円の金を使っているはずだ。もちろん、政治家や財界とのつながりもあるが、それだけではないような気がする。それが、分かれば、敵を攻める方法が見つかるかもしれない。賀臼は、ステージに上がった時に、田村が賀臼に投げかけた眼光の鋭さを思い出した。只者ではない。

夜の十時に、大吾から電話がかかってきた。今日は、そのまま透明信教の集会に残るといふ。どうやら、集会は徹夜で続くらしい。

「大吾さん、敵は予想以上に強大です。十分、お気をつけください」

大吾は

「無理はしません。ご安心下さい」

といった。

賀臼は、貴子の部屋に向かった。部屋の外から、今日、大吾は帰ってこないと報せた。

「おやすみ」

と行って去ろうとすると

「賀臼君、ちょっと来て」

と貴子は言った。賀臼はドアを開けた。はじめて貴子の部屋に入る。六畳くらいの大きさであろうか。本棚は数学関係の本で埋まっている。

貴子はベッドに横になっていた。半分泣いている。賀臼は、ベッドに腰掛け、貴子の頭をなでた。

「僕が貴子のことは守るから安心して欲しい」

と声をかけた。すると、貴子は賀臼の腕を引き寄せた。賀臼は、貴子の顔を引き寄せ、唇を重ねた。そして、さらに貴子を抱きしめた。

捕虜

次の日、午後になっても大吾は帰ってこなかった。連絡もない。賀臼は心配になった。貴子も不安のようだ。

「大吾さんが、こんなに連絡を絶つなんてことは考えられない」

その時、母の理恵が賀臼の着替えを持って、清洲家にやってきた。貴子は、うれしそうだ。ふたりは、さっそく話をはじめた。いつもなら、そんなふたりにいいかげんにしろといたくなるのだが、今日はそれどころではない。

その時、電話がかかってきた。

「もしもし、清洲ですが、どちら様でしょうか」

相手は、無言のままである。しばらくして

「あなたは、賀臼平さんですか？」

と聞いてきた。

「はい、そうです」

「実は、わたしは清洲大吾さんと一緒に行動しているものです。実は、大吾さんが、透明信教の教団ビルに入ったまま、出てこないのです。本当は、朝の八時に待ち合わせの予定だったのですが、いまだにビルの中から出てきません。大吾さんから、もしものことがあったら、賀臼平さんに連絡するようにといわれていました」

「そうです」

賀臼は決心した。大吾を助けに行く。

「母さん。僕は少しでかけてくる。それまで、貴子と一緒に居てくれるかな。それから、知らない人が来ても、絶対に家に上げないように。たとえ、大吾さんの友達といっても、玄関の扉は開けないように。頼んだよ」

賀臼は、母が持ってきた衣装の中から、できるだけラフな洋服を選んだ。下はジーンズ、上はボタンドウンにした。スニーカーを履いて出かけた。そして、インターネットで調べた透明信教の本部ビルの地図をポケットに入れている。賀臼は考えた。大吾はなぜ本部ビルに入ったのであろう。集会は、お台場にある展示会場で開かれていたはずだ。

賀臼は途中で、めがねを買った。髪は固めの整髪料をつけて雰囲気を変えている。これで変装がどこまでできたか分からないが、何もしないよりはましだろう。賀臼は、教団ビルに入る前に、自分の能力を確かめることにした。

人気のない公園を探して、ベンチに座った。ちょうどいいタイミングだ。誰もいない。賀臼は、ベンチの上にペットボトルを置いて、少し離れた。目標に

集中して虚数波を送る。しかし、驚いたことに何もおきない。どうしたのだろうか。賀臼は、送る気の量を増やした。すると、驚いたことにかけていためがねが飛んだ。賀臼には、何がおきたのか分からなかった。めがねをかけなおして、同じことをしてみた。すると、ペットボトルはそのまま、めがねが飛んだ。

賀臼は、しばらく事態が飲み込めなかった。しかし、大事なことに気づいた。送った虚数波は、めがねに作用したのだ。考えてみれば、当たり前だ。虚数は質量に働く。すぐそばにめがねがあったら、そちらに作用が届くのだ。敏子を助けようとしたとき、リーダーに虚数波が届かなかったのは、おそらく賀臼との間に何かものがあったのだ。

賀臼は、このことに気づいて良かったと思った。たとえば、車の中から、相手を攻撃しようとしても、窓ガラスにさえぎられる恐れがある。賀臼は、めがねのガラスをはずした。大事なことに気づいてよかった。でなければ、危ないところだった。

賀臼は、教団のビルにつくと、そのまましばらく様子を眺めていた。周りを見回したが、自分に連絡をくれたそれらしい人物はいない。教団本部は、近代的な五階建てのビルであった。一流企業と言われても、そのまま通りそうだ。賀臼はビルを一周してみた。裏に非常用の出口があった。このビルの中に、大吾がとらわれているのであろうか。

賀臼は、裏口から忍び込もうと思ったが、あきらめた。堂々と、正面から入ってみよう。正面には、こんな言葉が書かれていた。

「この門はすべての人に開かれている」

自動ドアを開くと、中に立派な受付があり、きれいな女性が座っている。

その女性は

「ようこそ、透明信教ビルへ来ていただきました。本宗教は、あなたの心を透明にし、信じることの大切さを教える宗教です。何か、御用でしょうか」

この人は、来客があるたびに、同じことを言っているのであろうか。賀臼は、ロビーを見回した。奥にドアがあるが、ロビーには、この受付嬢しかいないようだ。

「あのう。実は、先日トランスペアラント・ビリーフの会合に出たのですが、すごく興味がわきまして、ぜひ、透明信教に入信しようと思って、やって来ました」

「そうですか。それはありがとうございます」

受付嬢は、機械的に言った。

「大学生の方ですか？」

「はい、そうです」

「当教団は、女子大生の方は、ただで入信できるのですが、男子学生の方には、入会金と会費をいただいておりますが、いかがいたしましょう」

「あの、どれくらいかかるのでしょうか？」

「はい入会金が五万円と、年会費が一万円となっております」

「六万円もするのですか」

賀臼は、正直高いなと思った。おそらく、女子大生には使い道があるが、男子学生には、あまり利用価値はないということだろう。だから、男子学生の入信には、かなり高いハードルを設けているのだ。そういえば、トランスペアラント・ピリーの会合でも、高額の商品があたるのは、ほとんどが女子学生であった。あれには、何かからくりがあったに違いない。

受付嬢はにこっとして

「もちろん、分割払いもできますが、どうされますか？」

と聞いてきた。

「そうですか。今日は、三万円しか持っていないので、分割にさせていただくと助かります」

「分かりました。それでは、入信の手続きをしていただきますので、こちらにいらして下さい」

と奥の部屋に案内された。賀臼は、このビルがまったく宗教色が無いことに驚いていた。内装は、まさに近代ビルのそれである。宗教団体というよりは、IT産業のオフィスビルといったほうがふさわしい。

しかし、大吾は、本当にこのビルのどこかに囚われているのだろうか。少し不安になった。自分は、もしかして大きな勘違いをしているのかもしれない。あまりにも警戒が薄いからだ。

奥の部屋に通されると、まさに、そこは、銀行の窓口のようだった。担当の男性も、どうみても宗教家にみえない。まるで、まじめな銀行の能吏のようだ。男は、田野倉作治と自己紹介した。男性入会者の担当ということである。賀臼は、田野倉から渡された入会用のシートに記入していった。田野倉は聞いてきた。

「あの身分証明書はお持ちでしょうか？」

「はあ、すみません。まだ運転免許を持っていません。学生証ならありますので、後で持ってきてみましょうか」

「まあ、分かりました。今日はいいでしょう。手付け金として二万円払ってい

ただければ結構です」

賀臼は、入会書にでたらめの住所と山下健介と言う名前を書いた。

「あの、可能でしたら、このビルの見学をさせていただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

すると、田野倉は、あっさり

「よろしいでしょう。私が案内します」

と言った。まったく、警戒した様子がない。

賀臼は、大吾は、ここに居ないのかもしれないと思った。もし、大吾が匿われているとすれば、もっと警戒してもよさそうである。そういえば、先ほどの電話の相手が誰かも聞いていない。あんな電話を信じた自分がばかだったのだろうか。

田野倉は

「それでは、私が案内しますので、ご一緒ください」

と言って立ち上がった。賀臼は、後についていった。

大吾の失敗

大吾は、後悔していた。少し調子に乗りすぎたようだ。いま、監禁されているのは、教団ビルの中のどこかの部屋なはずだ。それは、外に連れて行かれた気配がないからだ。しかし、この部屋は殺風景だ。窓がないうえ、ドアがひとつだけぼつんとある。頑丈なドアだ。大吾は何度か、開けようとしたが、びくともしない。

透明信教の大会は、大勢の人間でにぎわっていた。現役総理大臣までが来賓として招かれていた。豪華な来賓の挨拶はしばらく続いた。みな、教祖の田村を褒め称えるものであった。そして、来賓のあいさつの後に、田村がとりを飾った。大吾は感心した。実に挨拶がうまい。敵と分かっているにもかかわらず、話に引き込まれそうになる。

そして、それよりも驚いたのは、その後のパーティーである。会場の横に、大宴会場が用意されていた。大吾はパーティーに招待されていた。若い男性会員は、パーティーには参加せず、そのまま解散するものが多い。

さらに驚いたのは、信者の女性がコンパニオンを勤めていることだ。みな驚くほど美人ぞろいである。実は、コンパニオンは入れ替え製になっているようなのだ。この場で、来賓が、気にいったコンパニオンを指名するようだ。さっそく、総理大臣が、あるコンパニオンと談笑している。

このパーティーは徹夜で繰り広げられるらしい。料理も和洋中と世界の食材を集めて、素晴らしいが、高価なワインも用意されている。ただし、驚いたのは、宴会に出席している信者の年齢である。女性は若い信者が多いが、男子会員はすべて四〇歳以上にしか見えない。大吾は、お布施として一〇万円を払い込んでいた。それが功を奏したのかもしれない。

大吾は、昼にスパイ専門店で購入した小型カメラを持ち込んでいた。パーティー会場で、参加者を片っ端から映していった。この教団を支援している政治家や財界人の名簿は持っているが、思わぬ収穫があるかもしれない。大吾は、できるだけアルコールは控えていた。コンパニオンは、客がグラスが空になると、すぐにおかわりを持ってくる。大吾は、築かれないように、ワインをスプーンなどの容器に捨てていた。

すでに午前一時であるが、いまだに宴会場は熱気に包まれている。すでに、多くの政治家や財界人は、気にいったコンパニオンを連れて、会場を後にしている。教団が用意した豪華ホテルのスイートがあるらしい。マスコミからは、完全に守られているようだ。

この時、宴会場の外にある人物を見つけた。ほんの一瞬であったが、見たことのある外人が通り抜けた。あれは、確か、ジョージ・ソロモンだ。どうして、ソロモンが、透明信教の会合に来ているのだろうか。ソロモンは、個人総資産一〇兆円と呼ばれる大金持ちだ。アメリカの大学在学中に小さなソフト会社をスタートし、いまでは世界中の企業を買いあさっている。立志伝中の人物である。大吾は興奮した。もしかしたら、ソロモンが透明信教のスポンサーかもしれない。

写真を撮ったつもりだが、うまく写っているだろうか。大吾は、会場の外に出た。見ると、ソロモンらしき人物が、黒塗りの車に乗って出かけるところだ。横には、教団の人間であろうか、数人の護衛がついている。

大吾は急いで、会場を後にして、待機している車にのった。

「すぐにあの車をつけてくれ」

車で待っていたのは、佐伯信二である。清洲家の支援者のひとりである。普段は、探偵事務所に勤めている。

「大吾さん、どうしました？」

「うん。透明信教のパーティー会場で、みょうな人物を見かけた。もしかしたらはずれかもしれないが、あの車のあとをつけてほしい」

佐伯の運転は巧みだった。さすがに、探偵業をしているだけのことはある。ソロモンらしき人物を乗せた車は、あるビルに到着した。

「ここは、透明信教の教団ビルじゃないか」

「そのようですね」

大吾は、一生懸命写真を撮っていた。後で、コンピュータで画像解析すれば、もっと、はっきりと顔がわかるかもしれない。

「大吾さん、どうします。一行はビルの中に入っていましたよ」

大吾は迷った。あまり深追いすると、墓穴を掘ることになりかねない。

「ちょっと、待っていてくれるかな」

大吾は、教団ビルのまわりを探ってみた。すると、後ろに非常用の出口がある。しかし、強引に忍び込んだのでは、セキュリティーにかかるだろう。すると、非常口の横に窓があるのに気づいた。その鍵は、簡易的なものだ。大吾はしのびいることにした。千載一遇のチャンスかもしれない。

ジョージ・ソロモンは一代で財をなしたことで有名だが、実は、そのバックにはある組織がついているという噂がある。フリーメーソンだ。ソロモンの成功は、その組織のおかげだと見る向きもある。あの外人がソロモンだとすると、フリーメーソンが影のスポンサーということになる。

実は、フリーメーソンは、ルシファーの手先という噂が昔からある。

大吾は、佐伯の車までやってきた。時間は午前三時である。

「中に忍び込むことにした。遅くとも、午前八時までには戻ってくる。もし、その時間までに戻ってこなかったら、ここから撤収して欲しい。そして、賀白平というひとに電話して欲しい。平さんは、私の家にいる」

大吾は、窓の鍵をドライバーではずした。見ると、簡単な構造をした鍵だ。あまりにも無用心だと大吾は思った。鍵は簡単にはずれた。窓枠に手をビルの中に忍び込むと、そこはトイレだった。内部の人間に気づかれないように、窓を閉めて、鍵も元の状態に直しておいた。

トイレのドアを用心して開けた。そこは、ロビーにつながる廊下であった。廊下を進んで、ロビーを調べた。そこは深夜灯だけがついて静まり返っている。どうやら、本部の人間もパーティーに借り出されているようだ。

大吾は、ロビーに出て、エレベータを見た。明かりは、四階の位置にある。ということは、ソロモンは四階で降りたことになる。階段を探した。大吾は、ゆっくり、階段を進んだ。そして四階についたところで、ドアの外の様子を伺った。声は聞こえない。大吾はゆっくりとドアを開けた。廊下に誰もいないことを確認し、すばやく体を滑り込ませる。

奥の部屋に明かりがついている。大吾は、部屋のそばまで進んだ。廊下には身を隠すものがない。ここで、誰かに見つかったら一巻の終わりだ。大吾は、

明かりのついている部屋の隣の部屋のドアノブを回した。大吾はついていていると思った。鍵がかかっていない。大吾は、部屋の中に忍び込むと、隣の部屋との壁に耳をつけた。音声を拾うことのできる特殊マイクを壁に装着した。

隣から声が聞こえる。英語で話しているようだ。やはりソロモンであろうか。どこかで聞いたような声を聞こえる。これは、もしかして、教祖の田村ではなからうか。流暢な英語だ。大吾は、特殊マイクに音声レコーダーを装着した。これも、後でコンピュータで解析してみよう。話の内容が分かれば、重要な秘密がわかるかもしれない。

大吾は迷った。このまま、ここで監視を続けるべきか。しかし、このままでは、あまり情報量は多くはない。それよりも、捕まらないように警戒すべきだろう。大吾は急いで、部屋を抜けた。廊下をすばやく移動し、階段のあるドアを開けた。誰にも見つからなかったようだ。階段をゆっくりと音を立てないように降りた。

今日は、大収穫だったかもしれない。敵の正体が見えてきたからだ。もし、ジョージ・ソロモンが透明信教のスポンサーだとすると、フリーメーソンがバッグにいることになる。強大な敵だ。一階について、ロビーを抜けようとしたら、突然明かりがついた。そこには田村が立っていた。大吾が逃げようとする、後ろから何か重いもので頭を殴られた。薄れる意識の中に、にやりと笑う田村の顔が見えた。

大吾が、気づくと、この狭い部屋に閉じ込められていた。それにしてもうかつだった。せつかく、重要な譲歩を得られたのだから、ここまで無理をする必要はなかったのだ。

すると、突然、ドアが開いた。男が三人入ってきた。三人とも体格がすぐれている。おそらく教団の護衛であろう。男たちは、大吾の両腕をしっかりとつかむと、部屋の外に連れ出した。ふたりが大吾をおさえ、もうひとりが予備の監視役である。大吾は、場合によっては、抑える手を振り払って逃げようかと思ったが、男たちの膂力を感じてあきらめていた。これでは、対抗できない。

護身用に持ってきたスタンガンは、すでに奪われていた。

男たちは、大吾を、同じ階にある別の部屋に押し込んだ。そこには、田村が座っていた。

「ようこそ、透明信教へ。清洲大吾さん」

大吾は、驚いた。この部屋には、数多くのモニター画面がある。そして、そこには、賀白平の映像が写っていた。田村はこう言った。

「変装した賀白平さんが、どうやら大吾さんを救出に来たようです。あまり、

うまい変装ではないな。それに山下健介などというすぐばれる偽名を使っている」

大吾は驚いた。この教団ビルのあらゆる場所が、ここで監視できるようになっている。

「昨夜、大吾さんが、このビルに忍び込んだ様子は、すべてモニターで見せていただきました。さすがに忍び込むのはお上手のようですね」

大吾は後悔した。やはり、すべて監視されていたのだ。

「もうすぐ、あなたの甥子さんを、この部屋にお連れします。感激の対面になるでしょう。実に楽しみですな」

「その前に、少し尋問させていただきます。平さんが到着する前に予備知識が必要ですからね」

大吾は、平が救出に来るとは思ってもみなかった。いまは、大吾よりも貴子を守ることの方が大切である。しかし、このままでは、平もつかまってしまう。何とか、平に危機を知らせる方法はないのであろうか。

「大吾さん。平さんにはゆっくり教団ビル内を見学してもらいます。あなたに聞きたいことがある」

大吾は何か手がないか考えていた。

「まず、お聞きしたいのは、あなたのお嬢さんの清洲貴子さんの正体です。神田敏子の最初の情報では、賀臼平さんは貴子さんを自分の妹と言っていたようですね。そこで、われわれは、賀臼さんは、実は清洲さんではないかと思ったのです」

大吾は、驚いた。敏子は、かなり前から教団のスパイだったのだ。

「それから、いろいろと調べた結果、実は、賀臼平が清洲家の正当な後継者ということを探り当てました」

大吾は沈黙を守った。

「さすがに清洲家の当主です。あれだけの気をもたれているとは驚きでした。」やはり田村は、平の能力を試したのだ。しかし、田村は、どこまで平の能力の秘密を知っているのだろうか。単なる気功の使い手と思っているのならば、活路はあるかもしれない。

大吾は、田村が居る部屋の構造を観察した。横の壁一面にはモニターがところ狭しと並んでいる。もうひとつの壁は、なにもない。奥の外に面したところは、ブラインドが下りている。おそらく窓であろう。

「清洲貴子は、私の妻の親戚の子供です。幼い頃に、貴子の両親がなくなったので、私が引き取りました。貴子は、最初は賀臼平が清洲家の当主と知って、

自分の兄と思ったようです。ところが、貴子の方が清洲家の人間ではないことがわかったのです。それを知って、ふたりは恋仲になったようです」

「一応、つじつまは合っていますな」

田村はそう言った。しかし、目は笑っていない。

「ところで、清洲さんは、どうしてわが教団を探っていたのですか。もちろん、信者になっていただくのは、大歓迎です。しかし、スパイのような真似は感心しません」

天は虚に宿る 連載 8

大吾の救出

「それでは、山下さん。教団内を案内しましょう。」

銀行員に似た田野倉は、賀臼を案内してくれた。ロビーにいる案内係の女性に手を振っている。女性は軽く会釈した。

ロビーにあるエレベータで二階に上がった。

「ここは、教団の資料と図書が置いてあります。一般の信者のために資料閲覧室も用意してあります。山下さんも正式に信者になられましたら、下の受付で申請していただければ、いつでも使うことができます。」

田野倉は、そう説明した。この階は、確かに一般の信者に開放されているようだ。何人かが図書で調べ物をしている。

三階は、礼拝堂があるという。

「透明信教は、教祖の教えが大切ですので、偶像崇拜はしません。その代わりに、礼拝堂には教祖の田村の写真が掲げてあります。信者は、いつでも、そこで礼拝することができます。」

偶像崇拜はしないと言いながら、実際には、教祖の田村を神聖なものとして崇めている。矛盾があるように賀臼には思えた。

「この隣の部屋は視聴覚室になっております。教祖が、いままで行った演説などが、簡単に聞けるようになっています。」

モニターの横にマイクがつけられている。賀臼がマイクを耳にあてると、モニターが自動的についた。そこには、田村が行った講演のタイトルが並んでいた。賀臼が指で、タイトルのひとつを指すと、画面に田村の顔が現れ、演説が始まった。田村の演説は実にうまい。すぐに、人の心をひきつける。難しい内容だが、具体例を出して説明しているので、分かりやすい。しかも、政治の批判や、他の宗教団体の批判も、一般の人間が、普段から疑問に思っていることをずばりと指摘している。講演は三〇分ほどで終わった。

「田村教祖は、実に演説がお上手ですね」

賀臼は正直な感想を漏らした。すると、田野倉は

「山下さん、今日は、あなたは運がいい。ちょうど、ここに、教祖が来ておられます。いい機会なので、教祖を紹介しましょう」

賀臼はあせった。田村は、賀臼の顔を覚えているはずだ。いくら変装しているといっても、すぐにばれるだろう。

「いえ、今日は入会に来ただけです。正式に信者になったわけではありません。教祖にお会いするのは、正式な信者になってからで結構です」

すると、田野倉は

「そんな遠慮は入りません。教祖もぜひお会いしたいと言っております」といって、賀臼の腕を掴んだ。賀臼は驚いた。田野倉を華奢な男とみくびっていたが、強い力だ。明らかに鍛えていることが分かる。田野倉は、強引に賀臼を引っ張っていくと、ある部屋のドアを開け、賀臼を中に押し込んだ。

賀臼は驚いた。そこには、大吾が居た。

「大吾さん、大丈夫ですか」

大吾は、ぐったりした様子で椅子に座らせてられていた。横には、田村が座っている。

「ようこそ、賀臼平さん。いや、信者名は山下健介でしたかな」

賀臼は驚いた。すべて見られていたのだ。

大吾の左腕は、変な方向にねじれていた。かなりひどい拷問を受けたに違いない。

「いや、あなたのおじさんもなかなかしぶとい。われわれに協力していただければ、こんな目にあわずにすむんですがね」

と言った。賀臼は、大吾が薄目を開けて、こちらを見ていることに気づいた。何かを訴えている。大吾は、ブラインドのある窓を、一生懸命、目で指しているようだ。いったい、どういう意味なのだろうか。

「われわれは、あなたの恋人の清洲貴子さんに興味があります。貴子さんは、いったいどういうひとなのでしょう」

賀臼は、どうしようか迷っていた。大吾を連れて逃げなくてはならない。しかし、うまい脱出方法はなさそうだ。

賀臼が黙っていると、護衛が特殊警棒のようなもので、大吾の背中を叩いた。大吾は、苦しそうにうめいた。

「賀臼さんが、本当のことを言ってくれなければ、大吾さんが痛い目にあいます。この護衛は手加減をしりませんので、大吾さんが、どうなるか分かりませんよ」

この時、大吾の意図が読めたような気がした。窓から脱出しろということなのだ。賀臼は、ブラインドに集中した。そして、体中の力を込めて、虚数波を送った。すると、ブラインドとともに、窓が大破した。田村も護衛も、何事が起こったのかと驚いている様子だ。

護衛が窓に、気をとられた隙に、賀臼は、大吾を奪った。そして、一緒に、

窓まで進んだ。

大吾は

「私は放っておいて、当主が逃げてください」

そう言うと、賀臼を窓の外に押しやった。

賀臼はそうはいかないとばかりに、大吾の手を思いっきり引っ張った。すると、賀臼と大吾のふたりは、重なるようにして窓の外に飛び出た。賀臼は、自分の能力にかけたのだ。そして、地面と大吾に同時に虚数波を送った。すると不思議なことが起きた。地面に叩きつけられる直前に、大吾の体がふわっと宙に浮いたのだ。そして、賀臼の体は、大吾の体にぶら下がるようにして、地面に足がついた。

大吾は、何が起こったのかわからないようだ。自分が助かったのが信じられないという顔をしている。田村や護衛たちも、信じられないという面持ちで、賀臼と大吾の脱出劇を見ていた。

賀臼は、大吾をうながした。

「大吾さん、逃げましょう。あいつらが追ってきます」

しかし、大吾の動きはにぶかった。どうやら、足にもけがを負っているようだ。このままでは、田村たちに追いつかれてしまう。その時、白いバンが猛スピードで近づいてきた。バンのドアが開くと、運転手がこう言った。

「はやく乗ってください」

大吾は言った。

「当主、佐伯です。われわれの味方です。はやく乗りましょう」

賀臼は、大吾を車に押し込むと、助手席に滑り込んだ。それと同時にバンは、猛スピードで発進した。

佐伯は、大吾に声をかけた。

「大吾さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫とは言えないが、何とか生きている。それよりも、佐伯、家に電話をかけてくれ。急いで」

大吾はかなり慌てている。

「当主、もし電話に貴子さんが出たら、すぐに家を出るように告げて下さい。行き先は、築地の金港ホテルと行ってください」

賀臼は、どうして大吾があせっているのだらうと訝った。しかし、指示にしたがうことにした。

電話には、貴子が出た。

「もしもし、貴子か？」

「あら、賀臼君ね。大吾さんには会えたの？」

「いいか、時間がない。いまからすぐに、その家を出て、築地の金港ホテルに向かってくれ。何も持ってでるな。いますぐに出るんだ」

貴子も緊急を要することを悟ったようだ。

「分かったわ。いますぐね」

「僕らも、ホテルに向かう」

賀臼本家の隠れ里

佐伯の運転はたくみだった。渋滞した東京の道路をうまく迂回していく。裏道もよく知っている。何とか、透明信教の追っ手からは、逃れられたようだ。金港ホテルは、けっして立派なホテルではなかった。佐伯は、ホテルの玄関で、賀臼と大吾を降ろした。

玄関をくぐると、フロントに居た男が、あわててやってきた。

「清洲さん、どうされました？」

大吾は、フロントの男に目配せした。すると、ふたりは、客室ではなく、フロントの裏手の部屋に通された。賀臼は、大吾をベッドの上に寝かせた。すぐにも治療が必要だ。

その時、玄関に理恵と貴子が到着した。賀臼が迎えに行こうとすると、フロント係が制した。

ベッドに寝ている大吾を見て、貴子と理恵はかけよった。

「大吾さん大丈夫？」

貴子は心配そうだ。

「貴子さん。ごめん。へまをやってしまった」

どうやら、大吾は腕と足が折れているようだ。そうとうひどい拷問にあったようだ。

「今頃、清洲の家には、警察がかけつけているはずですよ」

「なんですって！」

賀臼は驚いた。

「いいですか。透明信教は、政府の中枢に影響力を持っています。当然、警察も彼らの支配下にあると見てよいでしょう」

しかし、警察を使って何をしようというのだ。

「おそらく、清洲貴子さんの身柄を確保しようとしたはずですよ。田村は、貴子さんの正体を疑っています。もし、賀臼家の血を引いていると分かったら、必

ず、消しにかかるでしょう」

「でも、貴子さんは、犯罪に関わるようなことは、一切していませんよ」

「警察と検察が組めば、どんな罪でもでっちあげることができます」

そんなばかなことができるだろうか。

「ここもぐずぐずしてはいられません。このホテルは、清洲家の支援者のひとりが経営していますが、警察力を使えば、いずれ、われわれがここに居ることは、突き止められてしまいます。急いで安全なところへ移動する必要があります」

「安全なところですか？」

「はい、ここから、車で三時間ぐらいでしょう」

「しかし、大吾さんの体が持つか心配です」

「私は大丈夫です。かなりひどくやられましたが、死ぬことはないでしょう。それよりもぐずぐずしてはいられません。貴子さんが居なくなったことを知れば、警察は検問を張るかもしれません。その前に東京を脱出する必要があります」

「理恵さんは、自宅に戻ってください。そちらに罫は及ばないと思います」

理恵は、貴子や平と別れるのがつらそうだが、大吾の指示に従うことにしたようだ。

「分かりました。でもみなさん、くれぐれも気をつけて下さい」

すると、フロント係が部屋に入ってきた。

「準備ができました」

ふと見ると、玄関にタクシーが止まっている。賀臼は、大吾に肩を貸して、タクシーまで運んだ。賀臼は、助手席に乗った。後部座席には、貴子が座り、大吾を横にしている。

「佐伯、急いでくれ」

気づかなかったが、運転手は佐伯だった。どこで、調達したのか、制服に帽子までかぶっている。

「おそらく、敵は白いバンを警戒しているはずだ。タクシーならばノーマークだろう」

理恵は心配そうに見ている。

「母さん、行ってくる」

「貴子をよろしくね」

母ははじめて貴子呼び捨てにした。すでに親子の確認は済んでいる。

佐伯は、すぐに発車した。貴子と、賀臼は、理恵のことをずっと見ていた。また、会える日があるのだろうか。

タクシーは首都高に乗ると、北を目指した。東京を抜けるまでは油断ができ

ない。しかし、警察の検問はまだ張られていないようだ。

「われわれは、どこに向かっているのですか？」

すると、大吾は

「行けば、分かります」

と言ったまま、苦痛に顔をしかめた。貴子は、大吾の腕と足をさすっている。かなり出血もしているようだ。

タクシーは高速から降りて、山道を走っていた。自分たちはどこへ向かっているのであろうか。もはや、町の明かりは消え、車のヘッドライトだけが道を照らしている。どうやら、山道を登っているようだ。しばらくして、佐伯はタクシーを止めた。

「これ以上は車ではいけません」

大吾は言った。

「ここからは歩いていきます」

「でも、大吾さん、その体で大丈夫ですか」

賀臼は心配した。

「無理をしてでも行かなければなりません。」

そう言って、車の外にでた。そこからは、山の頂上に向かって小さな山道が見えた。この先に、目的地があるのだろうか。

佐伯とは、ここで分かれた。

「佐伯さん、本当にありがとうございます。あなたのおかげで命拾いをしました」

賀臼は、心から感謝した。

「いえ、とんでもありません。そのようなありがたい言葉をいただけるだけで光栄です。当主」

と佐伯は言った。佐伯が去ると、あたりは真っ暗になった。

貴子は、何とか大吾の体を支えている。本当に大吾は大丈夫だろうか。これでは、目的地に到着する前に大吾は参ってしまうだろう。

ここで、賀臼にいいアイデアが浮かんだ。そうか、自分の力を使えばいいんじゃないか。賀臼は、大吾に集中した。すると、大吾の体が宙に浮いた。貴子も大吾も、いったい何が起きたのか驚いている。

「貴子、そのまま大吾さんの体を引いてくれないか」

すると、大吾の体は簡単に動いた。

「よし、これなら大丈夫だろう」

「当主、これはいったい」

「反重力です。父に教えられました」

大吾は、体がすっかり楽になったようだ。三人は進んだ。山道は貴子にもきつそうであった。二〇分ほど歩くと、目の前に山門が現れた。大吾はほっとしたようだ。

「到着しました」

貴子は、驚いている。

「もしかして、ここは」

「そうです。10年前に貴子さんが連れてこられたところです。賀臼本家の隠れ里です」

賀臼も驚いていた。

山門を抜けてさらに進むと、大きな社が現れた。巨大である。すると、白いひげに覆われた老人が現れた。

「ようこそ、賀臼本家に来られました」

老人は、大吾が宙に浮いているのを見て驚いたようだ。

「おおこれは、宙の舞ですな。これはお見事!」

そういつて、賀臼を見た。

「あなたが、清洲本家の当主ですな。よう、来られました。私は、賀臼本家の当主、賀臼我門と申します」

「賀臼平です。実際は、清洲平と名乗った方がよいのかもしれませんが。よろしく願います」

「そちらは、貴子さんか。ずいぶんと綺麗になられた。なつかしいの」

貴子には、かすかな記憶があった。

我門は

「さあ、こちらにおあがりください。大吾さんも治療が必要でしょう」

と一行を中にさそった。

賀臼は、大吾の体をやさしく床の上に横たえるようにした。老人は、大吾を横にすると、腕と足を触診した。

「これはひどい。完全に折れていますな。まわりの出血もひどそうだ。すぐに治療に入りましょう」

我門は、なにやら薬草を腕と足に塗りだした。そして、骨折箇所を伸ばすようにした。さらに副え木をあて、包帯で縛っていった。

「これで大丈夫です。三日もすれば腫れがひくでしょう。骨折の方は、しばらくかかりますが、後遺症は残らないでしょう」

賀臼は安心した。

そして、我門はこう言った。

「しばらくは動きが不自由かもしれませんが、いざとなったら、清洲当主の宙の舞の術を使えば、どこにでも行けるでしょう」

「賀臼君。反重力とか言っていたけど、それも虚数の能力のひとつなの？」

貴子は興味深そうに聞いてきた

「ああ、そうなんだ」

賀臼は、父の流人と話した反重力の話 みんなに聞かせた。大吾は、ようやく悟ったようだ。

「実は、教団ビルに囚われていた時、窓の外に当主を放り出せば、虚数の能力で、当主は地面との衝突を免れると思ったのですが、当主がわたしの手を思いっきり引くので本当にびっくりしました。まさか、こんな術を当主がマスターしていたとは思ってもよかったです」

賀臼は、言った。

「虚数の能力は奥が深いようです。工夫しだいでは、もっといろいろなことができそうな気がします」

賀臼は、自分の能力だけで敵と戦うことを決意していた。我門は

「しばらく三人には、ここで休んでいただきます。敵の出方は、私の手のものを使って調べてみましょう。お疲れでしょうから、もう部屋でお休みください」

三人は、それぞれの部屋に案内された。大吾は、賀臼が宙に浮かせて運んだ。大吾は、賀臼の力に本当に驚いているようだ。

「当主、本当に世話になりました。そして、私を救出に来ていただき、本当に感謝しております」

すると賀臼はこう言った。

「大吾おじさん。私の肉親は、もうおじさんしかいないのです。私は、これ以上身内から犠牲は出たくありません」

ふと見ると、大吾の目に涙が浮かんでいる。

「実は、透明信教で重要な情報をつかみました。詳しい内容は明日話します」
そう言うと、大吾は横になった。かなりつらそうだ。痛みがあるうえに、相当疲れているだろう。

賀臼は、貴子のもとに行った。

「大吾さんは大丈夫だ。貴子にも迷惑をかけたね」

すると貴子は

「今日、母さんといろんなことを話したの。私の特殊能力のことも話したわ」

「なんだって！」

「そして、賀臼君とのことも、すべて話したの」

賀臼は驚いた。

「母さんは何だって？」

「あなたの好きなようにしなさいって。そして、賀臼君とのことは、とても喜んでくれた」

「そうか」

賀臼は少し安心した。賀臼は貴子のことを抱き寄せた。そして、理恵のことを思った。自分の娘が、人類を救う双子を生むかもしれないと知ったときの理恵の心情を思うと、賀臼は胸が痛んだ。そして、その双子は、理恵にとっては、孫にあたるのだ。

「貴子！たとえ、貴子の特殊能力が封印されたとしても大丈夫だ。僕がきっと、貴子を守る。そして、人類も守る。きっと父も助けてくれる。父の科学者としての知恵を借りれば、ルシファーにも対抗できるはずだ」

貴子はこくりとうなずいた。

作戦会議

つぎの日、賀臼は貴子と大吾、そして賀臼本家の当主、賀臼我門と作戦会議を開いた。我門は、新聞記事を見せてくれた。そこには、一面にでかでかと記事が載っていた。

「テロリスト、透明信教ビルを爆破」

昨日、新宿区にある透明信教の教団ビルにテロリストによる攻撃があった。教祖の田村大作氏暗殺を狙ったものと思われる。ふたりのテロリストは、入信希望の信者を装い、ビルに侵入した。担当者がビル内を案内していたところ、突如、まわりの制止を振りほどき、教祖の部屋に乱入し、爆発物を投げ入れた。教祖の田村氏は間一髪難を逃れた模様である。その後、テロリストは仲間が用意した車で逃走した。なお、警察の調べでは、犯人は、清洲大吾と賀臼平の二人であることが判明、現在、全国に指名手配している。また、金港ホテルの支配人をテロリストの逃走を支援した犯人隠匿罪の罪で緊急逮捕した。

そして、爆発物によって大破したとして、賀臼が破壊した窓の写真を載せている。

「見事にしてやられましたな」

「自分たちが犯罪者なのに、うまくでっち上げている」

賀臼は怒りに燃えた。

「大事の前の小事です。この程度のことでうろたえてはなりません。もっと厳しい戦いが待っています」

大吾をこういった。

「しかし、母さんはどうなるのだろう。自分の息子がテロリストとして、指名手配されたのだから、大変だろうな」

「いずれ、流人さんと理恵さんには、この戦いに加わってもらいますが、今は大丈夫でしょう」

大吾が話題を変えた。

「実は、透明信教の集まりで大変なことが分かりました」

「それは何ですか」

「どうやら、田村大作のスポンサーはジョージ・ソロモンのようなのです」

賀臼も貴子も驚いた。

「ジョージ・ソロモンって、あの有名な大金持ちのソロモンですか」

「はい、そうです。最初はパーティー会場で見かけたのですが、その後、教団ビルに入るのも確認しました」

大吾は、あることを思い出し、ポケットを探した。すると、一センチほどの小さな金属製の塊が二個でてきた。

「よかった。小型カメラと音声レコーダーは取られていなかったようです。いまから、さっそくコンピュータで分析にかけてみましょう。」

我門は、部下に命じてノートパソコンを持ってこさせた。大吾は、パソコンにセットしながら

「データが壊れていなければいいのですが」

と心配している。

「よかった。ちゃんと映ってますね」

そこには、パーティー会場の様子が何枚も写っていた。

すると貴子が声を上げた。

「これって敏子じゃない！」

賀臼も驚いた。やはり、敏子は透明信教に取り込まれていたのだ。貴子は

「敏子が可哀想」

と言っている。大吾の話によると、パーティーに出席した政治家などの招待者は、自由にコンパニオンを選べるのだと言う。態のいい売春婦ではないか。

大吾は、写真をスキャンさせながら、ある写真で止まった。

「これです。今から拡大してみます」

確かに外人らしき人物が写っている。

「しかし、これでは、少し見難いですね。いまから、コントラストを調整してみます」

しばらく、大吾は修正ソフトで調整していた。貴子が驚いた。

「確かにジョージ・ソロモンよ。間違いないわ」

すると我門は

「そうか、ソロモンですか。すると、フリーメーソンが敵の背後にいるということになりますね」

「そのようです」

賀白も貴子も、フリーメーソンという組織名を聞くのは初めてだった。すると、大吾が説明をしてくれた。

「フリーメーソンというのは、もともとは、ヨーロッパを本拠地とする秘密結社です。最近では、アメリカをはじめとして世界各国に勢力を伸ばしています。この二十年は、大統領選にも、かなりの影響を与えています」

我門は驚くべきことを言った。

「実は、流人の父親はフリーメーソンのことを探りにヨーロッパに出かけたんじゃない。何か証拠をつかんだという連絡の後、飛行機事故に巻き込まれた」

「そうなんですか。運がなかったんですね」

「いや、それに気づいたフリーメーソンが、飛行機事故にみせかけて、亡き者にしたとされている」

そんな大それたことが可能なのであろうか。大吾は、さらに驚くべきことを言った。

「実は、あの有名なテロリストのビンラーディンも、組織の一員という噂があるのです」

貴子は割って入った。

「でもアメリカ大統領とビンラーディンは敵どうしじゃないの。同じ組織の人間というのはおかしいわ」

「実は9・11テロはやらせだったという噂があります」

「なんですって！」

「その証拠に、国防省に突っ込んだ飛行機は旅客機ではありません。これは、公然の秘密です。今では、米軍がミサイルを撃ち込んだとされています。国際貿易センタービルに突入した飛行機も民間機ではありません」

「しかし、あんなに多くのひとを犠牲にして何の得があるの？」

「あのテロによって、アメリカ国内で軍事費増強に賛成する世論が高まりました。実は、フリーメーソンの会員の多くは軍需産業を抱えています。戦争がな

ければ儲からないのです」

「だからって、あんなばかげたことをしていいの？」

貴子は怒っている。

「彼らにとって、一般庶民は虫けら同然なのです。実は、フリーメーソンを創始したのは、ダビデという説がありますが、ダビデを操っていたのはルシファーであると、古文書には書かれています」

「しかし、フリーメーソンがわれわれの敵だとして、彼らは、どのような手段で、プラス質量を消そうとしているのでしょうか」

と貴子は聞いてきた。賀臼もその通りだと思った。田村にしても、フリーメーソンにしても、所詮はルシファーの操り人形にすぎない。彼らは、ルシファーの命令によって動いているだけだ。そして、ルシファーのねらいは、この世に、大量のマイナス質量を送り込むことにある。その手段が分からないのだ。

貴子は続けた。

「マイナス質量は、プラス質量と反応して電磁波というエネルギーを放出します。しかし、そのままでは、質量が消えただけで終わりです。何しろ、宇宙は、プラス質量で満ち溢れているのですから」

賀臼は言った。

「確か、その反応によって得られたエネルギーを利用して、ふたたびマイナス質量を作り出すということではなかったかい。そう、連鎖反応だよ」

「でも、過去は、ルシファーの企みは、すべて失敗してきたのよね」

「ああ、ガウス家がうまく、阻止してきたと言われている」

「ルシファーは同じ間違いを繰り返すかしら」

すると、大吾がこう言った。

「実は、田村とソロモンが会話しているところを盗聴してみました。私の耳では聞こえませんでした。何か録音されているかもしれません。」

こう言うと、音声データレコーダーをパソコンにセットした。ボリュームを最大に上げると、かすかな声が聞こえてきた。

「何か聞こえるね」

すると貴子が言った。

「フュージョンを早く完成させろと言っているように聞こえるわ」

「フュージョン？いったい、それは何なんだ」

「核融合のことよ」

「核融合？」

すると、大吾が反応した。

「フリーメーソンで思い出したのですが、彼らは、なぜか核融合の研究に多額の資金を提供しています。核融合というのは、地上に太陽をつくるという壮大な計画です」

原子力エネルギーは、質量の大きな元素が分解する時に放出されるエネルギーを利用するものだ。しかし、質量の小さな元素である水素が二個反応して、ヘリウム原子が一個できる時にもエネルギーを放出する。この反応を核融合反応という。しかも、そのエネルギーは原子力の 10000 倍にも達する。

「ただし、この計画はアメリカの反対で頓挫しそうになりました」

「どうしてですか？」

「多くの科学者が反対したからです。実現できないというのです。というのも、核融合反応が起きると大量の中性子が飛び出ますが、この中性子はあらゆるものを貫通します。そして、すべての物質の原子核を破壊してしまうのです」

「それでは、エネルギーが得られても意味がありませんね」

「ところが、アメリカ議会は再び核融合に多額の予算をつけることを承認しました。良識ある科学者たちの反対があつたにも関わらずです」

「それは、裏でフリーメーソンが動いたということですか？」

「そう言われています」

ここで、貴子は気づいた。

「それはルシファーの意図ということですね」

「多分そうだと思います」

「ルシファーにとって、危険な中性子が発生することなど関係ありません。彼の究極の狙いは、この宇宙をマイナス質量で埋め尽くしてしまうことです。おそらく、彼は、マイナス質量の生成に核融合反応を利用しようとしているのではないのでしょうか。」

「ただし、この計画には、少し無理があるのです」

「それはどういうことですか」

「核融合の実験炉は、フランスに建設されることが決まっているのですが、その実用化には 70 年以上かかると言われています。ルシファーが、つぎの攻撃を考えている 2010 年には、とても間に合いません」

「そうですか」

「彼らは、別の方法で核融合を実現しようとしているのではないのでしょうか。おそらく日本のどこかで研究が進められているはずですよ」

「ルシファーの狙いは日本ですよ」

我門は、ここで口を開いた。

「分かりました。さっそく日本の核融合研究のことを調べてみましょう」
賀臼は、ふと考えた。もしかして、ルシファーは二重の保険をかけているのではなかろうか。たとえ、日本で失敗したとしても、次はフランスという手がある。

天は虚に宿る 連載 9

外部との接触

賀臼と、貴子は平穏な日々を賀臼本家で過ごしていた。しかし、一日が過ぎるたびに、戦いの日ハルマゲドンは着実に近づいているのだ。

貴子は

「父さんと母さんに会いたい」

と言ってきた。二十歳の誕生日がだんだん近づいてきている。両親にも、自分のことを相談したいのだろう。

賀臼自身も両親に会いたかったが、自分は指名手配されている身である。簡単には外に出ることはできない。ただし、貴子が両親に会いたいという気持ちもよく分かる。賀臼は大吾に相談した。

「大吾さん。貴子を両親に会わせてあげるわけにはいかないだろうか」

大吾は悩んでいる。

「会わせてあげたいのはやまやまですが、少し危険なような気がします」

「しかし、貴子は指名手配されているわけではなりません。賀臼の家に行くだけなら、大丈夫なのではないでしょうか」

「いまは大事な時期ですからね」

おそらく、大吾は、貴子がもうすぐ二十歳を迎えることを言っているのだろう。そうすれば、貴子が特殊能力を発揮できる。ようやくルシファーと戦うことができる。

しかし、大吾は知らない。賀臼が裏切っていることを。賀臼は、貴子の能力を封印するための協力をしているのだ。

「分かりました。賀臼当主の我門さんに相談してみましよう」

我門は、賀臼流人と理恵に連絡をとった。すでに、流人は、日本に帰国しており、平と貴子のことを心配しているという。

「流人がいるならば、安心でしょう。こちらの様子も聞きたいでしょうからな。

分かりました。私どもが手配致します」

我門は許してくれた。

貴子は護衛つきで、賀臼家へ向かうことになった。我門は、護衛として、賀臼本家の屈強な戦士を五名配置した。貴子がいかに大事な存在であるかを、いちばん認識しているのは我門である。

賀臼家では、貴子の訪問を大歓迎した。理恵は貴子をずっと抱き寄せたまま

放そうとしない。流人もふたりを肩で包み込んだ。流人は、理恵から、貴子が背負うべき重荷を聞いて、心を痛めていた。

「平はどうしているの」

「とても、元気よ。大吾さんの怪我も大分良くなってきた」

「そう、それは良かったわ」

「お母さんの方こそ大変だったでしょう」

「ええ、息子がテロリストだものね。毎日のように警察が来たわ。居場所が分からないかって。でもね。行き場所を教えられていないから、答えようがないのよ。そのうち、警察もあきらめたみたい。それから、大学も辞職させられたの」

「そうなの。大変だったわね」

流人は怒っていた。

「しかし、警察も情けないな。そんな悪党に牛耳られているなんて」

「しょうがないわ。敵は、総理大臣まで籠絡しているんだから」

理恵は話題と変えた。

「ところで、あなたの体は大丈夫なの？」

理恵は心配しているのだ。もちろん、貴子の体のことと、彼女に備わった特殊能力のことである。

理恵は、貴子の秘密を流人にも説明していた。そして貴子の計画も。流人は「もし、貴子に、平の子供ができたら、こちらは二重の喜びだよ。だって、本当の家族になるということだろ。それに、貴子に、そんな重荷は架せられない。きっと、平と僕がみんなを守ってみせる」

と言った。

「賀臼君は、虚数の能力をどんどん磨いているの。反重力の方も、すっかりマスターしたみたい」

そう言ってから

「賀臼君という呼び方も変ね」

と笑った。久しぶりに心から笑ったような気がした。自分に、人類を救うかもしれない秘密の能力があるということを聞かされてから、安らいだ気分になったことがない。やはり、両親と一緒に安心したのだろう。我門は三日だけ外出を許すと言ってくれた。我門は、賀臼本家の当主として、きっと貴子が賀臼家秘伝の能力を発揮し、人類救世主となる双子を生む事を期待しているのだろう。貴子は、我門を騙しているようで、少し気がひけた。

貴子は、久しぶりに、理恵と流人と楽しいひとときを過ごした。このまま、

この家で過ごせたら、どんなにいいだろうか。そう思った。

食事の後、母の理恵が後片付けをしていると、応接間の電話がなった。流人は風呂に入っているようだ。貴子はどうしようか迷ったが、受話器をとった。

「もしもし、どちら様でしょうか」

すると、相手は黙ったままである。貴子は、もう一度

「もしもし」

と言うと、かぼそい声が聞こえた。

「貴子」

貴子は驚いた。敏子の声だ。

「敏子？敏子なの。あなたなのね」

貴子は、透明信教のパーティー会場でコンパニオンの格好をさせられている敏子の姿を思い浮かべた。

「貴子、ごめんね。わたし、賀臼君にも申し訳ない事をしたわ」

「何を言っているの」

「でもね。断れなかった。田村と言う人間はおそろしい人間よ。人の仮面をかぶった悪魔だわ。それを知らずに騙された私がばかよね」

「いいのよ。あなたも被害者なんだから」

「貴子、学校では大騒ぎなのよ。あの賀臼君がテロリストだったなんて分かって。でも、私は知っているわ。賀臼君はテロリストではないって」

「敏子、いったいどうしたの。」

「わたしね。透明信教から逃げてきたの。実は、昨晩もパーティーに呼び出されて、いやな思いをしたの」

貴子は、コンパニオンが何をさせられるかを聞いて憤慨したことを覚えている。

「昨日ね。変なおやじが私にまとわりついてきたの。民自党の幹事長と言っていたわ。私、とても嫌だったから、教祖の命令を断ったの」

そんなことをしたら大変なことになると、貴子は思った。

「だから、トイレに行くふりをして、その窓から逃げてきたの」

敏子が大変なことになる。貴子は心配した。

「貴子。お願い、助けて。今はあなたしか頼るひとがないの」

「分かった。いま、どこに居るの」

「貴子の家のそば。ほら、去年、一緒にいろんなことを話した公園があるでしょう。その草むらに隠れているの。この携帯もひとから盗んだのよ。多分、透明信教は追っ手を放って、私を探しているわ。本当は、警察に行こうとしたんだけど、警察も頼れないことは貴子も知っているでしょう」

「それじゃ、今から迎えに行く。待っていて」

貴子は敏子が哀れになった。おそらく、賀臼を陥れたのも、田村に命ぜられて、仕方なくやったことなのだろう。

大吾や我門に頼めば、きっと、敏子も匿ってくれるはずだ。貴子は、家を出て行こうとして躊躇した。表には、護衛が張りついている。たとえ、事情を話しても外出を許してくれないだろう。貴子は裏門に廻った。そして、塀を乗り越えた。敏子を救わなければならない。

約束の公園には敏子は見えなかった。確か、草むらに隠れていると言っていた。貴子はちいさい声で「敏子」と叫んでみた。何の返事もない。まさか、追っ手につかまったのだろうか。その時、草むらで物音がした。「敏子なの」貴子が近づこうとした時、後ろから羽交い絞めにされた。貴子は、逃げようとしたが、すぐに、もうひとりの男に腕をつかまれた。

「おとなしくして下さい。素直について来ていただければ、危害は加えません」男はそういった。貴子は覚悟した。自分に逃げ場はない。男二人は、両脇を支えるようにして、貴子を公園から連れ出した。

公園のすぐわきに、黒塗りの大きなリムジンが停車してある。貴子は後部座席に押し込められた。驚いたことに、そこには田村大作が座っていた。

「はじめまして、清洲貴子さん。私は透明信教教祖の田村大作です」と自己紹介した。

「敏子はどこ。どこにやったの」

すると、田村は

「清洲さんが、素直について来ていただければ、彼女は安全です。お約束しましょう」

貴子は、自分が罠に嵌められたことを悟った。

異変

流人は風呂から上がって、応接間を覗いてみた。貴子がいらない。

「おーい、理恵。貴子がいらないけど、どうしたのかな」

理恵は

「後片付けを手伝うと言ってくれたんだけど、貴子はお客様だから、いいわって遠慮したの。どうしたのかしら」

「二階かな」

流人は、心配になって、家中を探したが、貴子が見えない。

「ひとりで、どこかに出かけるはずはないんだが」

流人は、仕方なく、表門に陣取っている護衛のひとりに聞いてみた。すると、貴子は出ていっていないという。しかし、貴子は、どこにもいない。

流人は気づいた。裏口の鍵が開いたままになっている。そう言えば、貴子の靴もなくなっている。まさか、裏からでていったのだろうか。しかし、貴子も、今が、どのような状態か知っているはずだ。そんなばかではないだろう。その時、理恵が悲鳴のような声を上げた。

「あなた、ちょっと来て」

理恵は、受話器を落とした。流人は、最近、通話が記録できるようなメモリーを電話につけていた。理恵は、その通話記録を聞いたのだ。流人も、その会話の内容を聞いた。

「ばかな。貴子は、この敏子という友達を助けに行っただのか？」

流人は、護衛に命じて、近くの公園まで貴子を探しにいかせた。

「あなた、どうしよう。貴子がさらわれたかもしれない」

「ちょっと待とう。もしかしたら、敏子という子と一緒に、帰ってくるかもしれない」

しかし、護衛は手ぶらで帰ってきた。公園には誰もいなかったという。そして、公園で拾ったというハンカチを持ってきた。流人は悟った。クロロホルムのおいがする。貴子はさらわれたのだ。

この知らせは、すぐに賀臼我門のもとに届けられた。大吾は

「私の失策です。当主から相談を受けた時に、黙って断ればよかったのです」

賀臼は

「いえ、これは私の責任です。私が大吾さんに相談しなければよかった。つつい、貴子だけでなく、両親も喜ばせたいという気が働いたのです」

我門は、冷静に言った。

「いまさら、誰の責任と言ったところではじまりません。敵が一枚上手だったということでしょう」

「しかし、敏子を使うとは、田村はどこまでも卑劣な奴だ」

と賀臼は怒った。

「こちらとしては、まさか、貴子が護衛をまいてまで、家を出るとは思っていませんでしたからな」

賀臼は言った。

「貴子をいますぐ助けに行きましょう」

すると、大吾は言った。

「残念ながら、手がかりがありません。透明信教のテリトリーはかなり広いと思われます。その中から一箇所を特定するのは、かなり難しいと言わざるを得ません」

「それでは、このまま手をこまねいているということですか？」

「当主、落ち着いて下さい。いまは、あせりが一番禁物です」

我門は、顔に苦渋の色をにじませている。

「敵はもしかしたら、とんでもない手に出てくるかもしれない」

賀臼は、何だろうと思った。

「貴子さんを生け捕りにしたということは、その能力を封じようとしているのかもしれない」

賀臼ははっとした。もし、敵が貴子のことを賀臼家の血をひくものと知ったら、当然、貴子が人類の救世主である双子を生むということは知っているであろう。とすれば、どうするか。

賀臼はその意味に気づいて慄然とした。田村は自分の子供を貴子に生まれせようとしている。我門と大吾は黙ってしまった。

賀臼は、思わず本家を飛び出していった。

「当主、待ってください！」

大吾が止めようとしたが、賀臼はそれを無視した。

我門はこういった。

「もはや、これまでとあきらめたが、まだ終わったわけではない。清洲当主の能力にかけてみましょう。どうやら、平さんには、われわれの想像のつかない能力があるように思える」

大吾も覚悟した。

賀臼は、山道を飛ぶように駆け下りていた。何とか貴子を助けなければならない。全速力で走った。

「僕は、貴子を守ると誓った。その約束は守ってみせる」

すぐに、かつてタクシーに乗ってきた道についた。賀臼は、東京方面に向かって走り出した。透明信教の教団ビルまで行ってみよう。しばらく走ると、向こうから一台のタクシーが近づいていた。かなりの猛スピードでやってくる。賀臼がいぶかっていると、賀臼のまえで急ブレーキをかけ、見事なUターンをした。

「当主、乗って下さい」

みると、佐伯ではないか。賀臼は急いで車に乗った。

「大吾さんから連絡がありました。急いで車で来て欲しいという連絡です。そ

して、当主を見つけたら、すぐにある場所にお連れしろと言われました。それまで、大吾さんは、あらゆる情報を使って、貴子さんの居場所を探ると言っています」

佐伯は、猛スピードで東京に向かった。車の腕は確かだ。しかし、賀臼には、それでも遅いように感じた。

佐伯が賀臼を連れて行ったのは、驚いたことにアメリカ大使館の別館だった。守衛所で、佐伯が声をかけると、ノーチェックで通してくれた。敷地内のある建物の裏門に車をつけると、すぐに対応のものが出てきた。

「賀臼平さんですね。こちらにお越し下さい」

賀臼は、いったい何が起きているのか分からなかった。賀臼は、地下にある部屋に案内された。

中では、五人の男が、コンピュータや電話を使ってしきりに連絡をとっている。司令官らしき男が賀臼のもとへよってきた。

「ようこそ、CIA日本支部へ」

賀臼は驚いた。

「きっと驚かれたでしょう。でも、安心して下さい。少なくとも、われわれは賀臼さんの支援者です」

「かつて、一度清洲貴子さんも救援したことがあります。そう言えば、分かると思います」

賀臼は、思い出した。貴子が家のまえで誘拐された時に、ある日本の国家組織に助けられたと言っていた。その後、大吾の話で、その組織はCIAの日本支部であると聞いたことがある。

「しかし、CIAがどうして大吾さんと連携しているのですか？」

「話せば長くなりますが、われわれもフリーメーソンを警戒しているということです。ソロモンの動きも、ずっと監視しておりました。当然、田村の行動も監視対象です」

「でも、大吾さんの話では、必ずしも味方ではないような雰囲気でしたが」

「もちろん、味方ではありませんが、敵でもありません。しかし、大吾さんもお人が悪いですな。最初から、緑色の封筒の中身を知っていたのなら、素直に教えてくれれば良かったのです」

「それは、貴子が誘拐される原因になったものですか？」

「はい、大吾さんは、CIAが賀臼平さんを全面的に支援してくれるならば、その秘密をわれわれに教えてくれるということです」

そうか、大吾はCIAと取引をしたのか。

「大吾さんの話は、非常に興味深いものでした。本部と連絡をとったところ、十分、信用するに値する ということが分かり、取引してよいというゴーサインが出たのです」

賀臼は安心した。

「それでは、貴子の行き先はご存知なのです」

「ある程度の検討はついております。しかし、どこかというのは、完全には把握しておりません。なにしろ、清洲貴子さんは、われわれにとっては、マークすべき重要人物ではなくなりましたから」

「しかし、驚きましたよ。田村大作をマークしていたら、私がかつて救出した清洲貴子さんを見たのですから」

「そこは、どこですか？」

「賀臼さんの家のそばの公園です。貴子さんは、ふたりの男に抱えられるようにして、田村の車に押し込められました」

「その車はどうしたのですか？」

「はじめは、教団本部ビルに向かいました。そして、その後、貴子さんだけ、別な場所に連れていかれました。残念ながら、われわれは追跡しておりません」賀臼はがっかりした。それならば、探しようがない。

「あきらめるのは、まだ早いですよ。言ったでしょう。われわれは、田村大作の行動を監視していると。実は、彼は、今日の明け方、教団が熱海に持っている別荘に向かいました。貴子さんも、多分、そこに閉じ込められていると思います」

「熱海の別荘！」

「はい、教団がVIPを接待するために用意した場所です。マスコミも追いかけていけない場所です。なにしろ、警察が護衛しているのですから」

「警察が護衛ですか？」

「はい、その別荘のまわりは警察官がごろごろしています。とても、一般人が近づけるところではありません」

「田村のスケジュールによると、彼は、今日から三日間別荘で休養をとることになっています」

「休養？」

「ええ、獲物をいたぶるには十分な時間です」

司令官は意味深な笑いをした。賀臼は、その意味をさとって愕然とした。

「いますぐそこに連れて行って下さい」

「いまから行くと、二時間はかかるかもしれません。それに、必ず、警察の検

問にかかります」

「私は、どうしても行かなければならないのです」

「それが、われわれには理解できません。大吾さんも理由を言ってくれない。どうして、あなた方は清洲貴子さんを、そんなに救出したいのですか？」

「それは、私が貴子を愛しているからです」

司令官は笑い出した。

「悪いですが、女はたくさんいます。あなたほどの器量ならば、よりどりみどりでしょ。そんな無理をしてまで、彼女を救うことはないのではありませんか」

「彼女は、私にとって唯一の女性です」

「若いということはいいことですな。二〇年後に同じせりふを聞いてみたいものだ」

「お願いします。その近くまででもいいです。連れて行ってください」

「もう手遅れかもしれませんよ」

「それでも、私は行かなければならないのです」

司令官は、しばらく考えごとをしていた。

「まあ、あなたに協力すれば、さらに重要な情報をくれると大吾さんは言っていました。協力しましょう。ただし、陸から近づくことはできません。空からなら何とかなるでしょう。あなたは、パラシュートの経験はおありですか？」
賀臼は言いたかった。自分には、パラシュートなどいらぬのだと。しかし、こう言った。

「なんとかなります。お願いします」

「分かりました。すでに米軍のヘリコプターが待機しています」

もうすでに、朝の六時を過ぎていた。聞くところによると、田村が教団ビルを出たのは、午前三時らしい。もうすでに、熱海の別荘には着いているだろう。

「ありがとう。司令官」

司令官は、賀臼と握手すると

「グッドラック」

と言った。ヘリコプターはあっという間に上昇すると、猛スピードで熱海に向かった。パイロットは

「目的地には、10分で行きます」と言っている。

熱海の別荘 1

貴子は夢の中に居た。理恵と流人が、やさしく貴子を包んでくれる。貴子はとても幸せだった。すると、賀臼がやってきた。最初のうち、賀臼は頭でっかちだった。貴子は思わず、笑っていた。「賀臼君って、面白い頭の格好をしているのね。でもとても可愛いわ。」すると、賀臼の身長が急に伸びだし、頭が小さくなっていった。「これは、何か脱皮に似ている。」そう思っていると、たくしましくなった賀臼が近づいてきて、貴子を抱えた。理恵と流人は微笑んでいる。「これからは、四人で仲良く暮らそうね。」理恵がそう言ってくれた。

すると、別の声が聞こえてきた。誰の声だろう。

「貴子、とてもきれいだ。こんなに美しい体をした女性を見るのは初めてだ。」と言っている。しだいに雲が消えていく。貴子は起きようとしたが、自由がきかない。どうしたのだろう。すると、目が覚めてきた。自分はどこに居るのだろう。とても大きな部屋だ。天井には、天使が待っている。ダビデの像だろうか。

すると、すぐ横で声がした。

「いや、貴子、ようやく目が覚めたようだね」

どこかで聞いた声だ。すると、そこには、田村大作が立っていた。何と驚いたことに、田村は服を着ていない。よく鍛えた筋肉質の体をしている。貴子は、いったい自分に何が起きているのか理解できなかった。

「よい夢を見られたかい。ぐっすりだったね。昨日の晩、貴子には、楽しい夢を見られるように特殊な睡眠剤を注射してあげたんだ。ゆっくり眠れただろう」何をこの男は言っているのだ。次第に貴子は腹が立ってきた。すぐにここを出よう。そう思って、体を動かそうとして、驚いた。手と足が鎖でつながれている。しかも、自分も服をつけていない。

「これは、いったいどういうことですか」

貴子はようやく思い出した。自分は敏子を助けようとして公園に向かったのだ。田村はにやにやと笑った。

「貴子が、こんなに友達想いだとはびっくりしたね」

貴子は、ふと思った。

「敏子はどうしたの？」

「それは、聞かない方がいいんじゃないか。友情にヒビを入れるのは、私の本意ではない」

この男は、敏子が自分を裏切ったというのだろうか。

「しかし、貴子の体は本当に美しい。神田敏子とは大違いだ」

貴子は、自分の裸を、こんな男に見られているのが耐えられなかった。しかし、手足の自由がきかない。

「そんなにあせる必要はない。これから三日間もあるんだ。ゆっくり楽しもうじゃないか」

「誰があなたとなんか。私は舌を噛み切ります」

そう言って、気づいた。口の中に違和感がある。

「貴子の歯には、特殊なマウスが装着してある。舌を噛み切ることはできないよ」

と言って、笑った。そして、無理やり貴子にキスをしようとした。貴子は、顔を背けたが、強い力で顔を抑えられた。田村は、舌を入れてきた。

「どうだい。噛み切ることはできないだろう」

貴子は絶望的になった。

「ところで、今から何をするか説明しよう。貴子と僕は、愛の儀式を行う」

「絶対にいや」

「まあ、そう言えるのは、いまのうちだ。だけど、貴子は僕に感謝しなければいけないんじゃないかな」

貴子は、この男は、いったい何を言いたいのだろうといぶかった。

「しかし、賀臼家というのも面白いことを考えるね。二十歳までに子供ができてしまえば、貴子の能力が消えてしまうと言うのだろう」

貴子は、愕然とした。この男は、どこで、その秘密を知ったのであろうか。

「そして、貴子はそれを望んでいる。だから、その手伝いをしてあげるんだよ」

「いやー」

貴子は思わず叫んだ。そして、心の中で助けを求めた。

「賀臼君、助けて。お願い」

田村は、しばらく獲物を目でいたぶるように、貴子を観察していたが、隣の部屋に消えていった。

天は虚に宿る 連載 10

ヘリコプター

パイロットは、ヘリを急旋回した。すると、眼下に有名なゴルフ場が見えてきた。パイロットは、隣接する巨大な敷地を指差した。まわりを林で囲まれ、中は広い芝生の庭が広がっており、その中心に大きな建物がある。これならば、陸からは近づくことができない。隠れるものがないからだ。そこが、透明信教の別荘らしい。

パイロットは、賀臼にパラシュートの装着を命じた。もちろん、賀臼には、その必要がない。賀臼が、そう告げると、パイロットは、お前はきちがいかという顔をしている。賀臼は、構わず、建物の上空に近づくように指示した。そして、別荘めがけて飛び降りた。パイロットは、あっけにとられている。賀臼は、最初は加速を感じたが、ゆっくり虚数を送った。すると、急にスピードがゆるくなり、別荘の屋上に着地した。

屋上には、見張りは誰もいない。当たり前である。空から、敵がやってくるとは思っていないのだ。監視の目は、すべて陸上に向けられている。賀臼はいそいで、階下へ向かうドアを探した。それは、屋上のいちばん端にあった。ドアノブを回したが、鍵がかかっている。賀臼は、鍵に集中し、虚数を送った。すると、鍵はすぐに壊れた。ドアを開けて、中に侵入する。

その時、賀臼は声が聞こえたような気がした。

「助けて。はやく助けて」

この声はいったい誰の声なのだろうか。貴子が助けを求めているのであろうか。しかし、すぐに気づいた。これは、声ではない。自分の体に振動が伝わっているのだ。賀臼は、集中した。いったいどうなっているのか分からないが、その信号が出ている方に向かって進んだ。

熱海の別荘 2

田村は、なにかオイルのようなどろどろした粘液の入ったピンを抱えてもどってきた。田村は下卑た笑いを浮かべながら、こう言った。

「せっかく、愛の儀式を行うというのに、相手が嫌がっていたのでは、こちらとしても面白くない。貴子が、その気になるように、いい薬を塗ってあげよう」
そう言うと、ピンをさかさにして、手に粘液をたっぷり塗った。そして、貴子

の体に塗り出した。

それは、最初、ひやっとした感覚だったが、しだいに生暖かくなっていった。貴子は、体に塗られるたびに嫌悪感を覚えたが、粘液が塗られた後は、次第に力が抜けていった。やさしくマッサージされている感覚がある。

「これは、古代インドにつたわる誘淫剤の一種なんだよ。そのうち、気持ちが良くなるから心配しなくてもいい。うちのコンパニオンも、最初は、うすぎたない政治家との行為は嫌がっていたが、この薬を使うようになってから、楽しみにするようになったんだ。何しろ、うちでしか手に入らないからね」

田村は、貴子の全身に薬を塗り始めた。しつこいほど丁寧に塗っていく。貴子は、しだいに気分が高揚してきた。そして、体が、注に浮いたような感覚を味わっていた。

貴子の全身に薬がいきわたると、つぎに田村は、全身をやさしく擦りはじめた。薬が皮膚を通して、内部にしみていくのが分かる。次第に、田村の手は、やさしいカシミヤの肌触りとなって、貴子を包んでいった。

田村は、貴子の様子を見て、鎖をはずした。こうなれば、もはや貴子は自分のものだ。これから、たっぷり楽しもう。

救出

賀臼は、迷わずに信号の出ている方に向かって進んでいった。すると、廊下の先に二人の護衛の姿が見えた。かつて教団ビルで見かけた連中だ。賀臼は、迷わず直進した。護衛は、賀臼を見て一瞬驚いた。そして、胸ポケットから拳銃を取り出し、賀臼を狙った。賀臼は、迷わず、拳銃に虚数波を送った。すると、拳銃は吹き飛んだ。そして、もっと強い虚数波を護衛たちに浴びせた。拳銃を飛ばされた護衛は、いったい何が起きたのか分からないという顔を見せたが、つぎの瞬間、もっと驚くことが体を襲った。ものすごい勢いで吹き飛ばされたのだ。二人は一瞬の間に悶絶した。

賀臼は、急いで部屋のドアを開けた。そこは、客間のように見える。よく見ると、客間から、さらに奥の部屋に通じるドアが少し開いていた。強い信号が賀臼に伝わってきた。貴子は、そこに居る。そう確信すると、賀臼は、迷わず、その中に思いっきり駆け込んだ。

田村は、横たえた貴子に愛撫を加えようとしていた。これからは、あせらずとも貴子もその気になってくれるはずだ。上々の獲物だ。田村は、にやっと笑った。すると突然、後ろのドアが猛烈な勢いで開けられた。そして、つぎの瞬

間、とてつもない衝撃が体を襲った。気づくと、いっきに吹き飛ばされ、体全体が壁に衝突した。消え行く意識の中で、目が賀臼平の姿を捉えた。

「どうして奴がここに」

しかし、そのまま意識が遠のいた。

「貴子、大丈夫か？」

賀臼は貴子のもとへかけよった。貴子は、半分覚醒状態である。賀臼を見ると、急に抱きついてきた。

「賀臼、抱いて」

賀臼は腹がたった。貴子はいったいどうなっているんだ。すぐに、壁にあるバスロープをはおった。おそらく、賀臼の襲撃は、すでに気づかれているだろう。

賀臼は、貴子を背負うと、屋上に急いで向かった。

「あのパイロット約束どおり来てくれるだろうか？」

賀臼はちょっと不安になった。

賀臼と貴子が、屋上に上がると、遠くから点が近づいてきた。しかし、それは、あっという間に別荘の屋上までやってきた。ヘリコプターだ。約束を忘れていなかったらしい。ヘリコプターは、屋上で急に減速すると、三メートルほど上空でホバリングした。賀臼は、貴子を抱えたまま、屋上に虚数波を送った。すると、ふたりの体がふわりと浮いて、ヘリコプターまで届いた。パイロットは、目をまるくしている。

賀臼と貴子が無事に乗ったことを確認すると、パイロットは、猛スピードでその場から飛び去った。その時、ようやく屋上に銃を持った連中がたくさん集まってきた。ヘリに向かって発砲したが、もはや届く距離ではない。

パイロットは、賀臼に向かって親指を突き出した。よくやったというサインだ。

「ところで、聞きたいんだが、あんたは魔法使いかい。あんな芸当、どこで覚えたんだ？」

賀臼は、ただ黙って笑っていた。そして、こう言った。

「東洋の魔術師ですよ」

パイロットは、かなわないといったように肩をすくめた。

ヘリが米国大使館の別館に到着すると、すでに大吾が来ていた。

「当主、やりましたね。大成功です」

「大吾さんのおかげです。まさかCIAのお世話になるとは思いませんでした」

「こちらも必死ですからね」

救出直後から、貴子はずっと賀臼に抱きついている。片時も離れたくないとい

う感じだ。バスローブから、はだけた胸が見えて、賀臼はどきっとした。賀臼は、貴子を揺り動かした。次第に、貴子も目が覚めてきたようだ。そこに、司令官が入ってきた。

「賀臼さん、救出おめでとうございます」

そして、貴子を見て、こう言った。

「いや、これだけ素敵なお嬢さんなら、命がけで助けたいという気持ちも分からないではないですな」

貴子はあわてて、バスローブで体を隠した。賀臼は自分の着ていたセーターを脱いで、貴子にかけた。司令官は貴子にこういった。

「また、お会いしましたね」

貴子は事態が分かっていない。

「以前、お会いしたときは覆面姿でしたから、分からないのも無理はない」

貴子は、司令官が誰かが分かった。

「ところで、大吾さん。約束は守っていただきますよ」

と念を押している。

「それと、部下からお聞きしたのですが、賀臼平さんは、実に特殊な能力をお持ちのようですな。機会があれば、ぜひ、そちらのお話もお聞きしたいのですが、いかがでしょうか？」

貴子の帰宅

大吾と賀臼は、貴子を連れて、賀臼家に向かった。元気そうな貴子を見て、理恵はほっとしたようだ。父も大喜びだ。

「平、よくやってくれた。本当にお前をほこりに思う」

ただし、賀臼はずっと気になっていた。熱海の別荘で、誰かが、自分に救助して欲しいという信号を送ってきたのだ。あれは、確かな信号だった。貴子にも特殊能力があるのだろうか。例えば、テレパシーかもしれない。

賀臼は、貴子に聞いた。

「貴子、君にはテレパシーがあるのかい？」

「何を言っているの。そんなことができるわけないでしょう」

貴子はあっさり否定した。賀臼はわけがわからなかった。

理恵は、あらぬ格好の貴子を連れて、着替えに連れて行った。

大吾は言った。

「賀臼家当主の我門さんも、とても喜んでおられます。一時は、もう貴子さん

のことはあきらめていましたから」

「しかし、平はすごいな。父さんは、本当に感心するよ」

「でも、今回のことは、大吾さんの機転のおかげです。まさか、CIAに協力を求めるとは思いもよりませんでした」

「実は、CIA日本支部の権藤司令官とは、浅からぬ因縁があるのです。しかし、高い代償も払いました」

「それは、その緑色の封筒に隠された秘密のことですか？」

「ええ、そうです」

「いったい、そこには何が書かれていたのでしょうか？」

大吾は、もう隠す必要もないだろうと思ったようだ。

「マイナス質量の保存方法です」

「なんですって。だって、マイナス質量はプラス質量と出会ったとたんに消滅するのではなかったですか」

「実は、それを回避する方法があるのです」

賀臼はそれは、何だろうかと思った。すると、流人が間に入った。

「おそらく磁場を使うのではないですか？」

大吾は驚いたようだ。

「さすがに一流の物理学者ですね。その通りです。強い磁場の中では、マイナス質量はくるくる回転して、まわりから隔絶されます」

賀臼は、気づいた。

「とすると、北朝鮮もCIAもマイナス質量を保存する方法を知ったというわけですね」

「残念ながら、そうなります」

「しかし、だからと言って、マイナス質量を自由に扱えるというものではありません」

すると、貴子が理恵に付き添われてやってきた。貴子はかなりしょげている。おそらく理恵が、かなりきつくしかつたのであろう。貴子は、ジーパンにセーターを着ている。

「賀臼君、本当にごめんね」

すると、理恵は賀臼に言った。

「平、安心して。貴子は、田村に何もされてはいないみたい」

と言った。

「まさに、危機一髪というところだったみたいだけど」

理恵は、まともや貴子を責めるように言った。

「でも、敏子が、私を裏切ったなんて、いまだに信じられない」

「君もお人よしだな。こんな目に合わされたんだぞ」

賀臼は、少し腹ただしかった。大吾は、

「それでは、これより、全員で賀臼本家に向かいます」

理恵は

「えっ、私達もいくのですか？」

と驚いたように聞いた。

「残念ながら、この場所も安全ではなくなりました。できるだけ、はやく安全な場所へ移動した方がいいでしょう。申し訳ありませんが、身の回りの品だけを持って行って下さい」

貴子は両親と一緒になれてうれしそうだ。もちろん、賀臼も大歓迎だ。

賀臼家の誓い

熱海の別荘での事件は、単なる事故として報道された。ガス漏れによる爆破事故となっている。護衛ふたりと田村大作は、かなりの重症を負ったようだが、命に別状は無かったようだ。

大吾は驚いている。

「当主の能力は、すさまじいものがありますね。」

「ええ、あの時は、いかりで体が震えていましたので、手加減というのを知りませんでした。」

理恵と流人は、賀臼たちとは別に一軒家を与えられていた。貴子は、毎日のように遊びに出かけている。

流人と賀臼は、一緒に、実験を始めていた。賀臼の能力が、どのようなものか確かめているのだ。流人は

「虚数波は空間を伝わって目標物に届くことができるのだね」

と言っている。賀臼が確かめたように、目標物との間に大きな質量を持った遮蔽物があると、虚数波はそちらに作用してしまうようだ。これは、敵との戦いでは大きな問題となる。相手が、隠れてしまえば、賀臼の能力は使えなくなるからだ。

流人は、虚数波を何とか反射させることができないかを調べていた。それができれば、ものかげに隠れたものにも虚数波を浴びせることが可能となる。しかし、反射は難しそうだった。賀臼は、いろいろなもので、試してみたが、反射せずに、虚数波を照射したものが、すべて反応してしまう。

流人は、浮上現象についても調べていた。賀臼が虚数を吸収した物体間には斥力が働く。しかし、力は、その距離の二乗に反比例するので、あまり、距離は稼げない。ただし、地球の引力は別のようだ。かなり上空まで、浮かせることができる。これは、地球が巨大なので、その引力が空高くまで及ぶことが原因だろう。

流人は、さらに、賀臼による虚数波の影響が、どの程度の時間、持続するかを計っていた。時間にして五秒程度であろうか。あまり長くはない。すぐに、まわりの環境から虚数を吸収してしまうのであろう。

最も重要な実験は、賀臼の能力が、どの程度離れていても届くかということである。流人は、徐々に距離を話しながら、作用を測定した。そして、50メートル程度までしか、届かないことが分かった。残念ながら、賀臼には、飛んでいる飛行機を落下させる能力はないようだ。

流人のおかげで、いろいろな情報を得ることができた。これは、きたるべき戦いにとっては大事である。

貴子の妊娠

ある日、賀臼は、貴子を救援した時に経験した不思議なことを大吾に聞いてみた。

「あの時、確かに、体を震わすような振動が伝わってきたのです。確かに、助けてという信号でした。私は、その信号に導かれて、貴子のもとにたどりつけたのですから」

大吾はいぶかった。

「信号が、貴子さんの体から発せられていたということですか？」

「それしか考えられません。わたしは、てっきり貴子がテレパシーの能力を持っているのかと思って、確かめたのですが、簡単に否定されました」
しばらく、大吾は考えていたが、ある事に気づいたようだ。

しかし、大吾は何も語らなかった。大吾は

「賀臼本家の当主にお会いしてきます」

と言った。

しかし、賀臼が貴子から信号を受けたのは、それっきりだった。いまは何も感じない。あれは、何だったのだろうか。

その日の夕方、賀臼は理恵と流人の家に呼ばれた。理恵は、こう切り出した。

「これは、おめでたいことかもしれないけれど、一方では、平の戦いには、き

びしいことかもしれない」

「何のこと」

「貴子に子供ができてることが分かったのよ。妊娠四ヶ月よ」

賀臼は、驚いた。それなら、貴子と最初の関係を持ったときに子供ができていたのだ。流人は、大喜びだ。

「いや。自分がおじいちゃんになるなんて思いもよらなかった。それに、その子供が平の血をひいているのだから、こんなめでたいことはない」

賀臼も、嬉しかった。自分が父親になるという実感はないが、これで、貴子の秘密の能力は失われたことになる。賀臼家の女が、二十歳になる前に、子供ができたなら、その子供は特殊能力を持たない。

流人は

「平の能力を使えば、敵に対抗できる。大丈夫だ。心配しなくていい。私も全面的に協力をするよ」

と言ってくれた。

確かに、流人のおかげで、賀臼の能力は飛躍的に伸びていた。しかも、その限界も分かってきている。

「平、やはり双子の男の子なそうよ。賀臼家の女には、必ず双子ができるという言い伝えは当たっていたよね」

そうか、自分はいっきにふたりの子の父になるのか。平は、感慨深かった。

賀臼は、貴子の部屋に向かった。「おめでとう」賀臼が声をかけると、貴子は恥ずかしそうだ。賀臼は、貴子を抱き寄せた。そして、思いっきり抱きしめた。

「貴子良かったね。生まれてくる子供は普通の子だ」

貴子は嬉しそうにしながら、でも少し心配もあるようだ。

「本当にこれで良かったのかしら。私たちは、大吾さんや我門さんを裏切ったのよ」

「仕方がないよ。これも運命と思えばいい。父さんも言ってくれた。僕と父さんがタッグを組めば鬼に金棒だよ。敵にも対抗できる」

あと四年で、ルシファーと戦う 2010 年がやってくる。それまで、賀臼は、父と組んで、できるだけ自分の能力を高めるのだ。そして、貴子や生まれている子供をきつと守ってみせる。

レーザー核融合

貴子の妊娠は、大吾と我門に知らされた。賀臼は

「今回のことは、すべて自分の責任です。貴子には何の罪もありません。ただ

し、賀臼家の女性に与えられた能力を封印してしまったことは、とても重いことだと認識しています。本当に申し訳ありません」

と、ていねに侘びた。かなり、きびしく叱責されると思ったが、ふたりとも意外とあっさりしたものだった。大吾などは

「当主、良かったですね。これで、清洲家にも正統な後継者ができたことになります」

などと暢気なことを言っている。

賀臼が

「本当にこれでよかったですか？」

と聞いても

「当主に、その分頑張ってもらいます。いまでは、賀臼流人という一流物理学者も、われわれの仲間です。きっと、ルシファーとの戦いに勝つことはできません」

と楽観的だ。我門もとりたてて、騒ぐことはなかった。貴子には、いままで通り、やさしく接している。

理恵も流人も、ふたりの反応をみてほっとしていた。もうすぐ戦いが始まる。その前に、仲間割れしていたのでは、敵に隙を見せることになる。みんな、貴子の妊娠を温かく見守ってくれていた。理恵は、一生懸命、貴子を気遣った。

ある時、我門が大事な用件があると言って、みんなに声をかけた。理恵と貴子は席をはずしている。

「どうやら敵のねらいが分かってきました」

「流人さんはレーザー核融合という技術をご存知ですか。」

「ええ、詳しくは知りませんが、大体の内容は知っています。」

「レーザー核融合？」

賀臼は、はじめて聞く用語だった。流人は説明した。

「実は、核融合を起こすためには、大変な高温が必要になる。一節では、一億度以上の高温が必要とされている」

「一億度！」

賀臼には見当もつかない温度である。

「いまの技術では、この温度を達成するのは難しい。フランスに建設予定の実験炉でも、その実現には、相当時間がかかると言われている」

「そうなの」

「ただし、ある技術を使えば、それが可能かもしれないと言われている。それ

がレーザー核融合だ」

「つまり、レーザーを使って、核融合を起こさせるということ？」

「その通り。重水素と三重水素を核とする中空の球に、高出力のレーザーをあてる。すると、球の中のガスが急激に膨張して、核の温度が急上昇する」

「そして、温度が一億度になれば、水素どうしが核反応するということだね」

「その通りだ」

我門は割って入った。

「さすが、流人さんは一流の物理学者だ。よく知っている」

流人は

「確か、レーザー核融合の研究は、日本では大阪大学で行われているはずですよ」と続けた。

「まさか、大阪大学をねらっているのかな」

我門は、続けた。

「いえ、もちろん、そうではありません。私が見つけた情報では、透明信教が、ある研究所に多額の研究費を投入しているという噂です。しかも、その研究対象がレーザー核融合なのです」

「それは、どこの研究所ですか？」

「はい、フューチャー・テクノロジーズ社という民間組織です。福島県いわき市の郊外に建設されています。実は、この研究所では、ロチェスター大学やローレンスリバモア研究所から、多額の報酬をえさに研究員を引き抜いています。みな、レーザー核融合の専門家たちです」

「それは、あやしいですね」

「もちろん、そのバッグにはソロモン、そしてフリーメイソンがいます」

「とすれば、ルシファーは、この研究所を利用して、マイナス質量をつくりだそうとしているのですね」

「多分そうだと思います」

賀臼は少し安心した。敵の計画が見えてきたからだ。具体的な内容が分かれば、それを阻止する方法も考えられる。こちらには、父が居る。

天は虚に宿る 連載 11

双子の誕生

貴子は、元気で丈夫な双子の男の子を生んだ。理恵も流人もとてもうれしそうだ。なにしろ、初孫である。賀臼は、小さな子供を自分の腕に抱きよせ、大いに感激した。自分の分身がこの世に誕生したのだ。双子は大声で泣いている。その小さな手を見ながら、この子らのためにも、ルシファーには負けられない。そう、あらためて誓った。

「貴子ありがとう」

賀臼は、心の底から、感謝の意を込めて、そう言った。貴子もとてもうれしそうだ。すでに母親の顔になっている。貴子は、しばらくは理恵のもとで暮らす。落ち着いたら、我門が用意してくれた家で、賀臼と一緒に暮らすことになる。我門は、貴子と賀臼が、期待を裏切ったことを根にもっていないようだ。

まわりの、みんなに見守られながら、二人の子供はすくすくと育っていった。賀臼と貴子は、ふたりの子供に、光と明と名づけた。ふたりの将来は、光輝いて欲しい。そんな願いからつけた名前である。そして、闇の冥王ルシファーと戦うという意味も込められている。

しばらくして、賀臼は、家族四人で、一緒の家に暮らすようになった。一人身から、いきなり、四人家族になって、少し、戸惑いもあったが、すぐに慣れた。いまでは、貴子を手伝って、二人の子育てをしている。ミルクの暖め方や、おしめの交換も覚えた。洗濯もせっせと手伝った。

賀臼は、二人の子供の前では決して、自分の虚数の能力は使わなかった。子育ては、賀臼が思っていたよりも大変であったが、全然、苦にならなかった。普通の人間のように、自らの手で育てる。賀臼はそう決めていた。

ポルター・ガイスト

光と明は一歳になった。もうすでに、歩き出している。何をするか分からないので、賀臼か貴子のどちらかが、目をかけていなければならない。この前も、明が行方不明になって大騒ぎになった。理恵があやうく、近くの川に落ちそうになっているところを救ったことがある。この後、賀臼と貴子は、理恵にこっぴどく叱られた。

今日は、二人の面倒を見るのは賀臼の当番であった。貴子は理恵のところ

行っている。離乳食の作り方を習ってくると言っているが、おそらく、ふたりに、どうでも良いおじゃべりをしているのだ。一度、理恵のもとに出かけると、なかなか戻ってこない。しかし、これも二人の子育てで苦労している貴子のいいストレス解消のひとつとなっている。

理恵と流人は、毎日のように、遊びにやってきた。孫の顔をみるのが楽しみなのだ。流人は、最近、核融合の勉強をはじめた。来るべき戦いに備えるため、できるだけ知識を持っておきたい。そういうことであろう。

光と明のふたりは大の仲良しである。双子は、生まれつき、互いの心が通じ合っているというが、ふたりを見ていると、よく分かる。いま、ふたりは流人にもらったおもちゃで遊んでいる。我門は、使いものをやって、流人と理恵の預金を銀行からおろして、現金で二人に渡していた。ここでは、我門に頼めば、買い物もできる。最近では、インターネットを使った通販も可能である。流人も専門書をネットで購入している。品物は、賀臼本家の基地に送られ、使いの者が、週一回、荷物を届けてくれていた。

育児用品もすべて、手に入る。賀臼と貴子には、預金がなかったが、我門は心配いらないから、好きなものは何でも買ってくれとっている。賀臼は、一度、資金源について聞いたことがある。我門は、ガウス家は世界中に支援者がいて、金には困らないのだと言っていた。

よく考えれば、それも当然かもしれない。ガウス家は、人類を守るために戦っている。いくら、金を持っていても、地球が滅んだのでは意味がない。ガウス家の支援者にとっては、いくら金を積んでもよい相手ということになる。

透明信教の動きは静かだった。賀臼の急襲を受けたあとは、重傷を負ったこともあるためか、田村の動きは前よりも鈍くなっている。しかし、それは、来るべき対戦に向けて、潜伏していると考えられることもできる。いずれ警戒は怠ってはならない。

賀臼がふと見ると、光と明が、おもちゃを投げて遊び出した。変なところに当たったら怪我をするかもしれない。賀臼は、注意しようかと思ったが、そのままにさせておくことにした。過保護になってはいけない。いずれ、このふたりも、ルシファーとの戦いに臨むことになる。2010年の戦いに勝ったとしても、次は2100年に再び戦いが巡ってくる。

賀臼は、ふたりの遊びをみていて、不思議に思った。どう見ても、飛んでいるおもちゃの数が、実際に投げているものより多いのだ。賀臼はわが目を疑った。しかし、確かにそうだ。賀臼は少し嫌な予感がした。そう言えば、貴子が、このごろ変なことを言っていた。この家には、ポルター・ガイストが出るとい

うのだ。夜中に、子供が泣いたので起きてみたら、鍋やちゃわんが空中を舞っていたという。

その時、賀臼は貴子が寝ぼけているのだらうと相手にしなかったが、もしかして、光と明のしわざではなからうか。しかし、貴子がふたりを妊娠したのは二十歳前である。特殊能力は失われているはずだ。だから、光と明に虚数の能力はないはずである。

賀臼はしかたなく、子供の前では封印していた虚数の能力を使ってみることにした。明らかに飛んでいるおもちゃの数は、先ほどより増えている。賀臼は、弱い虚数波をおもちゃに送った。すると、何個が床に落ちた。ところが、数秒すると、また、もとの位置に戻った。

再び、賀臼は、虚数波を送った。すると、おもちゃは横にゆれたが、浮いたまま、空中を飛び回っている。光と明は嬉しそうだ。賀臼は、さらに強い虚数波を送ってみた。すると、おもちゃは、大きな軌道を描いて回転したが、やはり宙に浮いたままである。双子は、大喜びである。

賀臼は愕然とした。ふたりには能力がある。これは、どうしたことだろう。しかも、賀臼のものより、はるかに強そうだ。賀臼が最後に送った虚数波は、通常ならば、大の大人でも吹き飛ばされるほど強いものであった。それなのに、浮いているおもちゃはびくともしない。ふたりが、賀臼のじゃまをしているのだ。

賀臼は、迷ったが、このことを、貴子に知らせることはできない。そんなことをしたら、ひどいショックを受けるだらう。そこに、玄関の開く音がした。貴子が帰ってきたようだ。すると、宙を舞っていたおもちゃがいつせいに床に転げ落ちた。

部屋に入ってきて、貴子は双子を叱った。

「あなたたち、だめでしょう。こんなにおもちゃをちらかしちゃ。ママが片づけなければいけないのよ」

そう言って、おもちゃを整理しだした。

「パパもだめね。お守りといいながら、光や明と、一緒に遊んでいたんじゃないの」

賀臼は、どきりとした。実際、その通りだ。ただし、虚数という能力を使ってだ。どうやら、双子は、虚数の遊びをしたら、母に叱られるということが分かっているようだ。貴子の前では静かである。

「貴子、ちょうど良かった。父さんのところに行って来る。ふたりを見ていてくれるかい」

と言って、賀臼は父のもとへ向かった。

賀臼は理恵にもこのことを伝えた。できるだけ、はやく対策をとる必要がある。貴子が知ったらショックを受けるに違いない。流人は、賀臼から双子の能力を聞かされると、真剣な顔で考え込んでいる。理恵もショックを隠せないようだ。孫に、そんな能力があるということもそうだが、貴子のことにも心配しているのだ。貴子は、自分の子供は、普通の人間だと思い込んでいる。そのために、無理してまで二十歳前に身ごもったのだ。

流人は言った。

「賀臼家に伝えられていることに間違いがあったのだろうか。それとも、これは例外的なことなのだろうか」

理恵は、こう言った。

「もしかして、大人になるにつれて能力が衰えるのではないかしら。よくあるでしょう。小さい頃は、天才だったけど、大人になったらただのひとになったという話」

賀臼は否定した。

「おそらく違うでしょう。あの二人の能力は、私を超えています」

流人は驚いた様子だ。

「本当か、それは!」

ここ、しばらく賀臼の能力を測定してきて、流人はそれが尋常ならざるものを知っている。それが、生まれたばかりの双子の方が強い能力を持っているとしたら、それは、驚き以外の何ものでもない。

「しかし、それならば、ちゃんとした訓練をする必要がある。平の能力だって、すごいものがある。人を殺傷することだって可能なんだ。それが、子供のころからすごいとしたら、遊びで済ませられるものではない」

賀臼も同じ事を考えていた。いますぐにでも、訓練を始める必要がある。流人と賀臼は、大吾と賀門のもとを訪れた。

秘密

大吾と賀門に双子の能力の話をして、ふたりは、まったく驚かなかった。賀臼は不審に思った。

「もしかして、ふたりは、こうなることを知っていたのではありませんか」
大吾は素直にあやまった。

「当主、申し訳ありません」

賀臼はやはりそうかと納得した。なぜなら、ふたりは貴子が妊娠したと聞いても、まったく動じなかった。むしろ、その前よりも元気になったような気がした。

「双子が生まれたいま、いくら責めても仕方ありません。どういうことなのかを説明して下さい」

「分かりました。ただし、これだけは知っておいてください。実は、このことは、私も最近知ったことなのです。我門さんが、すべてを話してくれました」
賀臼と流人は大吾の話を聞いた。

「賀臼家の生まれた女の子に双子が生まれるというのは本当の話です。その双子に虚数の能力が備わっていて、マイナス質量をつくりだせるということも事実です」

「そこに疑問は思っていない」

「しかし、二十歳までに子供を生むと、その能力を失うというのは正しくないのです」

「それは、今回のことでよく分かりました」

「実は、高い能力を持った子供が生まれるためには、清洲家の当主との間に子供を設ける必要があります。相手が清洲家であれば、歳は関係ないのです」

「なんですって!」

「相手が当主であれば、歳は関係ないのです」

「むしろ、問題は清洲家の当主側にあります。それは、清洲家の当主のはじめての女性が、賀臼家のお嬢さんでなければ、高い能力は得られません。もし、当主が別の女性と交わってしまうと、能力はどんどん失われていきます。理由はよく分かりません。おそらく、はじめての場合に、高い濃度の虚数が注入されるためと考えられています」

「そのため、清洲家の当主には、奇妙なことが起こります。生まれたときは、とても醜いかたちで生まれるのです。とても、女性が好きになるよう容姿ではありません。ところが、賀臼家のお嬢さんに出会うと、急激な変化を迎えます」
賀臼は、貴子に会った後に、自分に起きた変化のことを思い浮かべていた。

「とても魅力的な男性に生まれ変わるのです。これをデフォルマと呼んでいるようです」

「つまり、清洲家の当主は、賀臼家の女性に会うまでは、決して女性からは好かれぬ運命ということなのですか」

「よほどの物好きでないかぎり、そうなるでしょう。ただし、それは、賀臼家に女性がうまれるときに限られます。普通は、清洲家の当主といえども普通の

姿で生まれてきます。ですから、これは失礼な言い方かもしれませんが、当主が生まれた時、われわれは賀臼家に、当主と結ばれるかもしれない女性が生まれるということを知りました。

賀臼は自分が小さい頃を思い出した。賀臼は常に他人から、その容姿をからかわれていた。母の理恵は、そのたびに怒っていた。

「実は、我門さんからお聞きしたのですが、二十歳までに賀臼家の女性が男子と交われば、その能力が失われるというのは、敵をあざむくための方便らしいのです」

賀臼は意味が分からなかった。

「どうして、そんな嘘を流す必要があるのですか？」

「賀臼家の女性は必ず双子を産みます。そして、双子は、その父に関係なく必ず虚数の能力を持ちます。これは賀臼家の宿命です。そして、この能力は敵にとっても魅力なのです」

「そうか、もし自分の子供を生ませることができれば、その子たちは特殊な能力を持つことになる。普通の親ならいやがるでしょうが、ルシファーに魂を売ったような連中にとっては、利用価値が高いということですね」

「そう考えても不思議ではありません」

「ということは、賀臼家の女性に備わっている特殊能力は、両刃の剣ということになりますね」

「だからこそ、それを狙っている連中に、二十歳前に子供を生めば、能力が失われるという虚偽の噂を流しているのです」

「敵もその能力が惜しいために、逆に、二十歳までは、賀臼家の女性は保護されるということですか」

「その通りです」

「しかし、田村は、それを阻止しようという暴挙に出た」

「実は、我門さんから聞いた話なのですが、田村は失脚したようです」

「えっ何ですって!」

「数々の失策のうえ、ソロモンの指示を無視して、貴子さんの能力を奪おうとしました」

「それでは、いまは誰が透明信教を率いているのでしょうか？」

「田野倉作治という男が、教祖の座につきました」

「田野倉！」

賀臼は、あの銀行員のような顔をした男を思い浮かべていた。

「透明信教が持っている政治家や財界人の情報は強固です。教祖が変わっても、

教団が日本政府に与える影響力はびくともしません。それよりも、田野倉という男は、非常に冷静かつ冷徹と聞きました。田村は、女癖が悪いために失脚しましたが、田野倉には、いっさい、そのような噂はありません。目標貫徹のためには、自分を律する意思があるようです」

しかし、大吾の話は驚きだった。そして、我門はすべてを知っていたことになる。ところで、大吾は、いつから、このことを知っていたのであろうか。まさか。

「大吾さん。私と貴子のはじめに結ばれた日のことは、ご存知ですね」

大吾は肩をすくめた。賀臼は、あの日のことを思い出した。大吾は、賀臼に清洲家に泊まるように勧めた。貴子が背負うべき、おそろしき運命を話した後だ。大吾は、貴子が賀臼と関係を持つと予測していたに違いない。賀臼は悟った。「そうですか。ということは、私と貴子が結ばれるということは、おふたりに、仕組まれていたということなのですね」

「それは違います。あえて言えば、神の思し召しということでしょう」

賀臼は、運命という言葉を読み描いた。大吾の言うことが正しいとしたら、自分は、生まれた時から、貴子と結ばれる運命にあったということになる。しかし、そのことは、決していやではなかった。たとえ、仕組まれていたとしても、自分は貴子のことが大好きである。いまでも、貴子との出会いを感謝している。

しかし、ふと思った。貴子はどう思っているのであろうか。彼女ほどの知性と美貌があれば、いくらでもすばらしい男性と出会えたであろう。それが、賀臼家に課せられた重荷のために、その運命を破棄しようとした。そして、賀臼と結ばれた。

賀臼は流人に聞いてみた。

「父さんどうしよう。貴子に本当のことを言うべきだろうか？」

「正直言って私には分からない。それは、平が判断すればいいのではないか。でも、貴子は、本当のことを知ったからといって、それでだめになるということはないと思うよ」

しかし、賀臼は貴子には本当のことを言えなかった。もちろん、貴子がショックを受けるといったことも事実であるが、それよりも、貴子が自分と結ばれるきっかけになった話が嘘だったということと言えなかったのだ。

大吾は、さらに驚くべきことを言った。

「実は、貴子さんに当主の子が宿ったということを知ったのは、当主が貴子さんを救出する際に、信号を受け取ったと聞いたからです」

賀臼は、思い出していた。透明信教の別荘に貴子を助けに行った時のことだ。

大吾は

「あれは、おなかの子供から当主に送られた信号なのです。双子には、虚数を送る能力がすでにそなわっていたはずで、必死になって、当主に助けてほしいという信号を送ったと思われます」

と言った。賀臼は、あの時の信号が、自分の子供からのものと悟った。

訓練

賀臼本家では、双子に対する訓練が本格的に始まった。面白いことに、双子は、母の貴子の前では決して自分たちの能力を披露しなかった。本能的に、母の前で使ってはいけないということを悟っているのだ。ところが、父の賀臼の前では、虚数能力を自在に使っていた。

双子の訓練に加わったのは、流人である。流人は賀臼との訓練を通して、虚数の能力を知悉している。しかも、光と明は自分の血をついだ孫である。ふたりを正しい道に導く。それが自分の使命と考えていた。

流人は、学者らしき方式をとった。光と明に、まず、基本動作を覚えさせたのだ。おもちゃを使って基本動作を、繰り返して、反復練習させた。たとえば、ふたりの好きなぬいぐるみを使って、どうすれば右に動くか、どうすれば宙に浮かせられるかなどの基本的な動きを徹底的に認識させた。ふたりは、最初は、自分たちの能力を勝手気ままに使っていたが、次第に流人の指示に従うようになっていった。

賀臼が感心したのは、流人の辛抱強さである。親であれば、子供が自分の言うことをきかないととすぐに叱って、自分の指示に従わせようとするが、流人は賀臼が感心するぐらい、時間をかけて、ふたりの孫を指導した。

貴子は、自分の子供の能力については、まったく気づいていないようだった。考えてみれば当たり前かもしれない。貴子にとっては、自分の分身である。それよりも、自分の庇護なしでは、生きていけないような頼りない存在である。そんな小さな子供が、人類を救う超能力を持っているなどとは思ってもよらないことであろう。

平穏

賀臼は双子の急成長にただただ驚いていた。もちろん、父の流人の適切な指導もあるが、まだ幼いふたりは、その能力を急速に高めていった。光と明は、二歳になった。すでに、ふたりの能力は、賀臼のそれをはるかに凌駕している。

驚くべき進歩である。

ただし、賀臼に分からなかったのは、本当に、このふたりにマイナス質量をつくりだせる能力があるかということだった。

理恵は迷っていた。貴子に本当のことを知らせるべきではないのか。しかし、本当のことを知ったときの貴子の気持ちを思うとなかなか言い出せなかった。なぜか、双子のふたりは、依然として貴子の前では、自分たちの能力を見せない。母が、それをいやがっているということを本能で察しているのかもしれない。

貴子には申し訳ないと思っていたが、貴子が留守をしている時には、賀臼は、積極的に自分の息子たちと虚数の能力を使って遊んでいた。流人が、それが大事だというのである。来るべき時のために、三人は意思の疎通を図る必要がある。

居間には、流人と賀臼と双子の四人が居た。いつものように虚数の訓練をしていた。賀臼が玉を中空に浮かせる。そして、もの凄いスピードで動かす。光と明は、その揺れ動く玉に向かって、同時に虚数波を送る。そして、玉を静止させるといふものである。ところが、驚くべきことが起こった。玉が一瞬にして消えたのだ。流人は察した。双子がマイナス質量を、生まれてはじめてつくり出した瞬間だった。

「平、いまのを見たかい？」

「はい、見ました」

「どうやら、ふたりは究極の能力を発揮し出したようだ」

ルシファーとの戦いまで、あと二年しかない。賀臼は少しあせっていた。しかし、神は、ちゃんと、その能力を戦いまでに間に合わせてくれたのだ。

その時、大吾があわてて部屋に入ってきた。

「当主に流人さん。いま大変なニュースが入ってきました。北朝鮮で大きな事故があったようです。」

大吾によると、北朝鮮の北部にある秘密軍事基地が、一瞬にして消えてなくなったというのだ。これが、その衛星写真です。そこには、軍事基地が存在していた時の、映像と、それが消えてなくなった時の映像が映し出されていた。

「この時、世紀の大実験を見ようと、北朝鮮の日成金首席も、その場に居たようなのです」

流人は言った。

「おそらくマイナス質量をつくる実験に失敗したのだろう」

「それは、どういうこと」

と賀臼は聞いた。

「北朝鮮は、マイナス質量をつくり出し、それを保存する実験に成功していたに違いない」

「強い磁場で閉じ込めるというやつだね」

「ああ、マイナス質量を閉じ込めるためには、二〇テスラというとても強い磁場が必要になる。」

「そんな強い磁場はどうやってつくるの」

「超伝導マグネットだよ」

「そうか」

「しかし、マイナス質量を取り出すためには、この磁場の制御が必要になる」

「磁場の制御？」

「ああ、磁場を変化させることで、マイナス質量の一部が外に取り出せるんだ。しかし、出てきたマイナス質量は、すぐにプラス質量と反応して一瞬のうちに消えてなくなる」

「北朝鮮軍は、何かを一瞬にして消滅させる実験を日首席の前で披露しようとしていたのかな」

「おそらくそうだろう。ところが、超伝導マグネットがクエンチしたに違いない」

「クエンチ？」

「そう、超伝導がいきなり壊れる現象だよ。その制御技術は非常に高度だ。北朝鮮の超伝導技術はまだまだ未熟だったということだろう」

「クエンチするとどうなるの？」

「超伝導マグネットの磁場が一瞬にして消える」

「すると、閉じ込められていたマイナス質量がいきなり外に飛び出るといことになるんだね。だから、軍事基地そのものが一瞬にして消えてなくなったということか」

「多分そうだろう」

とすると、北朝鮮の日成金首席も瞬時に消えたことになる。大吾は続けた。

「その後、各国が、日成金首席の行方を探したそうですが、杳として知れないとのこと。北朝鮮内でも大騒ぎになっているようなのです」

賀臼は、マイナス質量の恐ろしさを見せられた気がした。光と明の能力は、尋常なものではない。

天は虚に宿る 連載 12

母の能力

双子は三歳になった。ふたりの訓練は、流人によって続けられていた。光と明もかなり言葉が話せるようになり、言葉で意思の疎通が図れるようになっていく。こうなると、訓練もスムーズに進むので、ふたりの制御能力も飛躍的に向上した。

子供は、三歳ぐらいがいちばん可愛いとされる。言葉も話すようになり、ある程度分別がついている。そして、何よりも親が大好きだ。貴子は、ふたりのことを本当に可愛がっていた。ただし、しつけだけは、厳しくしていた。ふたりがご飯をこぼしたりすると、必ず、自分たちできれいにさせた。

賀臼は最近、貴子に対して、後ろめたさを感じていた。双子に特殊能力があることを知らないのは貴子ひとりである。理恵も、まだ話していない。このまま秘密にしておいて、いいのだろうか。

不思議なことに、双子は、母が居る前では決して、その能力を使おうとしない。賀臼は、本能とは大したものだと感心していた。その日は、朝から貴子が理恵のところに出かけていた。流人は、レーザー核融合に関する情報を仕入れている。もうすぐ戦いのときが近づいている。透明信教の国会議員は三〇名になっていた。一大勢力を築きつつある。田野倉は田村と違って派手な行動はしないが、着実に教団の勢力を拡大していた。

母がいないと、光と明は、虚数の能力で、いろいろなことをして遊んだ。その中に、父の流人がシンクロと呼んでいる芸がある。ふたりは、虚数波をだして、わずかに位相を変化させるという芸当ができるようになっている。すると、面白いことに、虚数波が大きなさざなみになるのである。その中で、おもちゃは変幻自在な動きをした。ふたりの双子は、いまでは相手の気持ちを瞬時に理解できるようになっていた。

光と明が、このゲームをして遊んでいると、突然、襖が開いた。賀臼は驚いた。そこには、貴子が立っている。貴子は、双子の遊びを凝視している。

「これはいったい何？このふたりは何をしているの。」

すると、空中で華麗な舞をしていたおもちゃが、突然、床に落下した。

貴子は、賀臼を睨んだ。

「貴子ごめん。許してくれ。隠していたことがある」

賀臼は、床に頭をついてあやまった。

「光と明に虚数の能力があるということ？」

と貴子は聞いてきた。

「そうなんだ。実は、ふたりには能力が備わっている。それを貴子に秘密にしてきた」

賀臼は、貴子がどんなショックを受けるかと心配した。しかし、貴子は

「そんなこと、前から知っていたわ」

「なんだって！」

双子には、両親が言い争っているように見えるのか、不安そうな顔をしている。

「ばかにしないで、私は光と明の母親なのよ。そんなことも分からないと思うの」

と言った。賀臼は驚いた。貴子はとっくに気づいていたのだ。

「ポルター・ガイストが出た頃から、おかしいと思っていたの」

そんな前から疑っていたのか。

「それに、まわりの人の態度はみえみえよ。あんなんで、よく隠していたと言えるわね」

そうだったか、賀臼は反省した。

「だから、騙されているふりをしていたのよ」

「父さんの訓練だって知っているわ」

「なんだって！」

「だって、わざとらしいでしょ。家の中でわいわい騒ぎ声が聞こえるのに、私が玄関を開けたとたん真と静まりかえる。父なんて、わざとらしく學術書を読んでいるふりをする。どこに、孫の前で、難しい本を読んでいるおじいちゃんがいるか」

「そうか。しかし、貴子はどう思ったんだい。みんな貴子がかっかりするのではと心配していたんだよ」

「もちろん、最初はショックだった。でもね。この子らは、私の子なの。子供には責任はない。それに、その子をありのままに受け入れるのが母親でしょう」
賀臼は感心した。

「女は弱し、されど母は強しか」

「ま、そういうことね」

「それと、平も知らないことがあるわ」

「何だいそれは」

「光と明は、わたしの前では、けっして虚数の能力を使わないでしょう。それ、おかしいと思わない？」

「うん、確かに不思議だった。おそらく、ふたりは本能で貴子が嫌がることを知っていて、それで、わざと使わないのかと思っていた」

「違うのよ」

「違う！」

「私には、二人の能力を封印する力があるの。私が、心の中で止めなさいと任じれば、ふたりは能力を使えなくなるのよ」

「なんだって！」

賀臼は本当に驚いた。

「理由は分からない。だけど、そうなの」

双子が貴子の前で能力を見せなかったのは、本当で封印していたのではなく、貴子に封印されていたのだ。

賀臼は、流人と理恵にさっそく、このことを報告した。理恵は

「私も、なんとなく、貴子は気づいているんじゃないかと思っていたわ」

「なんだ。それなら、そうと言ってくれよ。僕は、ずっと心配していたんだから」

流人は

「それでも良かったよ。貴子に秘密にしていたのでは、敵と戦う時の障害になる」

「それからね、父さん。貴子に変なことを言っているんだ。貴子の前では、光と明は虚数の能力を発揮しなかったよね」

「ああ、そうだな。私も不思議に思っていた」

「僕は、ふたりが貴子が嫌がることを察して、封印していたと思っていたのだけど、どうやらそうではないらしんだ」

「そうではない？」

「ああ、貴子には、ふたりの能力を封印する力があるらしい」

「まさか」

流人と賀臼は我門のもとへ言った。すると、我門は

「確かにその通りです。貴子さんには、その能力が備わっています」

といとも簡単に答えた。

「一種の保険ですよ。双子の力はあまりにも強大です。誰にも止められません。万が一暴走した時には、貴子さんが命じれば、ふたりの力は封印できるのです」

流人は、なるほどと頷ぎしている。

「それと、平さん、あなたにも、その力はあります」

「私にですか？」

「ええ、ふたりが放つ虚数波を打ち消す力があなたにはあるでしょう。それも保険です」

そうか、確か、双子は虚数波を同期させてマイナス質量を作り出せると言っていたが、自分が、ふたりのどちらと組んでも、マイナス質量は作り出せないと言っていた。その理由は、虚数波の位相が反転しているからだと言ったことがある。つまり、もし万が一、ふたりが間違っただけでマイナス質量をつくらうとした、自分がそれを止めることができるのだ。

襲撃

2009年に国会で妙な動きがあった。透明信教の子飼いの国会議員たちが動いて、自衛隊法の改正が国会を通った。この法案によると、自衛隊は、警察と協力して、国家の治安維持活動に参加できるとある。

大吾は、心配して賀臼や流人に相談しにきた。

「当主、これは、なにかきなくさいですね」

「私には意図がわかりません」

「来年は、いよいよ戦いの年です。それと、何か関係があるのでしょうか」

「いずれ、警戒を強めましょう」

我門の情報によると、フューチャーズ・テクノロジーズ社の研究は順調に進んでいるということであった。

異変は朝に起きた。賀臼は、かすかな物音を聞いたような気がした。それが、次第に大きくなっていく。

「おい貴子、何か物音がする。外で何が起きているようだ」

貴子は、双子をあわてて起こした。山門の方から銃声のような音が聞こえる。その時、大吾がおわてるようにして入ってきた。

「当主、大変です。警察と自衛隊が攻めてきました。銃声は、表門です。賀臼本家の人間が突入を阻止しようとしているところなのですが、驚いたことに、奴らは発砲してきたのです」

こちらには、銃などはない。

「やつらは、丸腰の連中にいきなり発砲してきたのです。すでに、六名ほどが犠牲になっています」

賀臼は、思わず家の外に飛び出て、山門まで走っていった。確かに警察が発砲している。

「何をやるんだ」

賀臼は、怒りに燃えた。そして、警察官が持っている拳銃に虚数波を送った。すると、警察隊の中に同様が走った。自分達の持っている拳銃が、すべて一瞬のうちに吹き飛ばされたのだ。何が起きたのか分からず、パニックになっている。

警察は、一度撤退した。

すると、我門が現れた。

「平さん。緊急事態です。すぐに、この場から脱出して下さい。やつらは、自衛隊の戦車も用意しています。いくら平さんでも太刀打ちできません」

「しかし、このままでは、多くのひとが犠牲になります」

「それは、やむを得ません。あなたには、大きな使命がまっているはずですよ。

ここで命を落とすことはない」

すると、大吾もやってきた。

「当主、はやくこちらへ」

賀臼は、大吾の案内に従った。すると、そこには、貴子、光、明、流人と理恵が待っていた。

「脱出用のヘリがあります。こちらに乗って下さい」

賀臼は、驚いた。こんなものまで用意していたのか。

「さあ、はやく乗って下さい。すぐに敵の攻撃が始まります」

自衛隊の戦車隊は、山門近くまで押し寄せていた。

「驚いたことにパイロット席には、佐伯が居た」

「佐伯さん！」

「当主、お久しぶりです。さあ、急いで乗って下さい」

「賀臼一家が乗ると、ヘリはいっぱいになった」

大吾は

「このヘリの定員は六名です。佐伯、やってくれ」

賀臼はあわてた。

「大吾さんも一緒に来て下さい。それに我門さんはどうしたのですか」

「われわれは、敵の攻撃を食い止めます。みなさんは、はやく脱出して下さい」

「何を言ってるんですか。このままでは犬死ですよ」

佐伯はヘリを上昇させた。

「当主、あなたに会えて幸せでした。一緒に大事な戦いには参加できそうもありませんが、幸運を祈ります」

そう言った。

「大吾おじさん。ただひとりの肉親を亡くしたくない」

賀臼は、そう叫んだが、ヘリはむなしく上昇した。下を見ると、すでに戦車隊が山門を潜り抜けるところだった。

「佐伯さん、ヘリを向こうに回していただけですか」

「当主、危険ですよ」

「それは、覚悟の上です」

ヘリは、旋回し、戦車隊の上空に達した。

賀臼は、思いっきり虚数波を飛ばした。すると驚くべきことが起こった。

先頭の戦車が突然消えたのだ。

自衛隊はパニックになっている。すると、つぎの戦車も消えた。次々に戦車が消えていく。

賀臼は、はっとして光と明を見た。ふたりは、そろって、戦車を睨んでいる。

賀臼は悟った。マイナス質量を発生させているのだ。

もしかしたら勝てるかもしれない。その時、後ろの戦車が急に大砲を放った。残念ながら、距離が離れすぎていて虚数波が届かない。戦車隊は、つぎつぎに大砲を放った。みるまに賀臼本家の大社が破壊されていく。

佐伯は

「当主、申し訳ありません。みなさんを安全な場所に送りとどけるように言われています」

そういうと、佐伯は高度を上げヘリを旋回させた。見ると、賀臼本家はほとんどが破壊されている。すると小さな点が社から我門躍り出た。我門は、ヘリに向かって手を振っている。その時、自衛隊の小隊がいっせいに銃撃放火した。我門はくるくる回転するように倒れた。その様子を見ていた貴子と理恵は泣いている。

聖戦

佐伯の操縦するヘリは、ある山奥の中にある開墾地に着陸した。

賀臼は佐伯に聞いた。

「ここはどこですか。」

「北上山地の中にある、隠れ里です。」

「北上山地？」

「はい、場所としては岩手県花巻市に近いところです」

「花巻ですか。」

「はい、われわれはイーハトーブの基地と呼んでいます」

すると、そこに農夫の格好をした数人の男がやってきた。

佐伯は、賀臼に

「われわれの支援者です。後について行って下さい。わたしは、ヘリを別な場所に移動させます」

すでに、自衛隊がヘリの探索に動いているだろう。佐伯は、ヘリを移動させることで、自衛隊の追及をかわそうとしているのだ。

支援者たちは

「はやく、こちらにおいで下さい。ぐずぐずしておられません」

と言って、賀臼たちを案内した。まもなく、佐伯のヘリは上空に消えていった。

賀臼たちは、古い民家に案内された。驚いたことに、中は近代的な設備が整っていた。コンピュータや最新の通信機器も装備されている。賀臼は佐伯が心配になった。

「佐伯さんはどちらに向かわれたのでしょうか」

支援者は何も言わない。

しばらくして重い口を割った。

「佐伯さんは、自衛隊の追跡隊と戦いにいきました。わざと罠になるのです」

「何ですって!」

賀臼は驚いた。

「もし、ヘリコプターが敵の手に落ちれば、当主が逃げたのがばれてしまいます。佐伯さんは、わざと、自衛隊の探索機に見つかったふりをして、戦うことになっています」

「しかし、戦闘機が来たら逃げられないでしょう」

向こうは数多くの編隊を組んでくるはずだ。

「もちろん、承知しています。撃墜を覚悟でかけたのです」

「そんな」

「もし、撃墜されれば、敵は乗員がみな死んだものと思います。それが作戦です」

「それでは、佐伯さんが死んでしまいます」

「佐伯は、とっくに覚悟しています。この戦いに負けるわけにはいかないのです」

賀臼は悲しんだ。もうひとり、犠牲者が出る。何人犠牲になれば済むのだ。

部屋にいくと、みんなが悲しそうな顔をしていた。双子の光と明も、子供なりに悲しんでいる。

テレビでは、今回の戦闘シーンが映し出されていた。

「日本に巣食うテロリスト集団を殲滅するために、自衛隊と警察が協力して、今日行動を起こしました」

警察隊のピストルが飛ばされるシーンが映っている。

「テロリスト集団は、かなり強固に武装しており、その殲滅には時間を要しましたが、無事、敵の首領を退治することができました」

そこには、我門が銃弾のまよになって倒れる場面が映っている。賀臼は怒った。何が、武装だ。われわれは全員丸腰だったのだ。それなのに、自衛隊と警察は発砲してきた。

「なお、テロリストの一部がヘリコプターで脱出しましたが、自衛隊の空軍の戦闘機が発見し、撃墜しました」

佐伯の操縦するヘリコプターが戦闘機のミサイルを受けて爆発するシーンが映った。

「これで、テロリスト全員が殲滅されたようです。なお、テロリストの中には、透明信教教祖の田村大作氏を襲った清洲大吾と、賀臼平も含まれていた模様です。清洲大吾の遺体は確認しましたが、賀臼平の遺体は確認されていません。ヘリで逃走し、戦闘機に撃墜されたものと思われます」

その後、総理大臣の談話が寄せられた。

「国家転覆を狙うテロリスト集団の存在は知っておりましたが、相手も高度に武装されているため、警察だけの力では殲滅が無理と認識しておりました。

幸いにも透明党の支持も得られ、新しい国家治安維持法が制定され、国内で国家転覆を狙う凶悪犯の殲滅に、自衛隊の協力が得られることができるようになりました。

今回のテロリスト殲滅においても、自衛隊の協力なくしては、なしえなかったでしょう。当方にも犠牲者が出ましたが、お蔭様で、テロリストは全員、抹殺することができました」

何がテロリストだ。賀臼は腹がたって仕方がなかった。自衛隊は罪のない丸腰のひとたちを殺したのだ。しかも、賀臼本家に居たひとたちは、人類を守るために戦ってきた人たちである。

貴子と理恵は、テレビを見ながら泣いていた。つい、先ほどまで、自分達と行動をともし、救ってくれた佐伯が戦死してしまったのである。大吾も我門を失った。われわれは、尊い仲間をすべて失ってしまった。これからルシファーとの戦いに果たして、これだけの戦力で向かえるのであろうか。

フューチャーズ・テクノロジーズ社 始動

主任研究員のマイケル・キムは、今日の成果を喜んでいる。

「これで臨界に達するめどが見ついた」

臨界とは、重水素と三重水素が核融合反応を開始する物理的条件のことである。

「いちばん難しかったのは、いかに均一に球体に圧力を加えるかでした」

研究員のムラリダ・チャンドは答えた。

今日は、この研究所のスポンサーである田野倉作治とジョージ・ソロモンが視察にやってくる。このふたりに朗報を知らせることができるとキムは喜んでいるのだ。

研究員の笹山真治は、心穏やかではなかった。チャンドに先を超されたからだ。もちろん、研究成果はチームのものであるが、論文発表する時の筆頭著者をチャンにさらわれてことになる。

キムは、この成果をネイチャーに発表するつもりである。おそらく、世の中は大騒ぎになるだろう。実現が50年以上も先と考えられていた夢の核融合技術が現実のものとなるのだ。

笹山は、チャンドの成果になんとかけちをつけたいと思っていた。

「だけど、臨界に達したといっても、その後の安定性については、問題が多い。下手をすると、核融合反応の制御ができなくなり、大事故につながる恐れがあります」

笹山は、まだまだ研究の余地はあるということをつけ加えた。するとキムは「確かに、安全面での問題は解決されていない。今後は、この点も含めて、研究を進めていこう」

と言った。

チャンドは、面白くなさそうな顔をしている。笹山は、少し点数が稼げたかなと思った。笹山は、大学の助手をしていた。助教授には、自分よりも五歳年上の人間が就任していたが、あまり優秀な研究者ではなかった。しかし、大学の人事に逆転はありえない。いくら笹山が優秀でも、この大学で上にいく目は無かったのである。その時、あるところから、この研究所への移転を打診された。

かなり、研究費が与えられるということであったが、笹山は大学のポストを探していたので、最初は渋った。しかし、田村大作が直接、笹山に挨拶に来た。田村の話は素晴らしかった。

「今の日本で大学に居たのでは、世界的な研究はできない。研究者が好きなだけ研究予算が使える理想の研究所をつくりたい」

そう熱っぽく語った。そして、世界的な研究者には、それに見合う報酬が与えられるべきだと言った。当時の笹山の年収は 500 万円程度であった。田村は、2000 万円を用意すると言った。笹山は冗談かと思ったが、冗談ではなかった。さらに、研究が成功すれば、一億円をボーナスとして出すという。

最初、妻は渋った。大学から、民間の研究所に転出することを嫌ったのだ。笹山は、はじめての給与明細を渡したときの妻の顔を思い出した。それまでは、笹山をないがしろにしていたが、それは、いっきに尊敬の色に変わった。笹山は豪華な一軒家を購入した。

田村は、研究成果が出るたびに多額のボーナスをくれた。いま妻は、ベンツの最高級車を乗り回している。

田村は失脚したが、その後を継いだ田野倉とソロモンも、田村と同じように厚遇を与えてくれた。笹山に不満はない。後は、世界的な賞を狙うだけである。おそらく、核融合反応を実現できれば、かなり高い評価が得られるはずである。ノーベル賞も夢ではない。

しかし、笹山には不安があった。ふんだんな研究予算のおかげで、核融合を実現できるめどはついたが、その反応を制御する方法が確立していないのである。このまま実験を進めることは可能であるが、安全性が確保されていない。

いまごろ、主任研究員のキムは田野倉とソロモンに研究の進捗状況を説明しているはずである。笹山は、その結果が気になっていた。研究室で論文を読んでいると、キムと田野倉、ソロモンの三人がやってきた。チャンドは用事があったすでに帰宅している。キムは

「おふたりが直接笹山さんの労をねぎらいたいらしい」

そう言うと、田野倉とソロモンは、笹山の手を握って、よくここまでやってくれたと礼を言った。キムは上機嫌である。

「ボーナスを五千万円はずむそうだ」

笹山は目を丸くした。いまでも十分すぎる給料を貰っている。

「しかし、そのためには、条件がある。一年以内に核融合反応を実現して欲しいということだ」

「キムさん。しかし、安全性の問題が解決していない」

「それは、私も分かっている。しかし、核融合をおこすことは、何にも増して優先されなければならない。少々の危険は承知している」

笹山は、少し不安になった。

「実は、いま、この実験棟の裏に、別棟を建設中で、大きな鉄骨と四メートルの厚さのコンクリートからできている。たとえ、失敗しても、外に被害は及ば

ない」

田野倉がさらに念を押した。

「実験が成功しなくても、さらにボーナスを五千万円出しましょう」

笹山は、それでも安全ではないと喉まで声がかかったが、それを押し込んだ。

いま、ふたりのスポンサーを不愉快にすることは得策ではない。

「チャンドは乗り気だ。よろしく協力して欲しい」

笹山は、しぶしぶながら承諾することにした。

「五千万円のボーナスか」

笹山は妻が喜ぶ様子を思い浮かべて、心にきざした不安を押し込めた。

「ところで、キムさん、いま建設中の実験棟の横に、ヘリウム冷凍機と超伝導マグネットも準備しているようだけど、あれは、われわれの実験と関係があるのですか？」

「ええ、核融合で生じるプラズマを閉じ込めるための施設です」

笹山は、本当に予算はふんだんだと感心した。

天は虚に宿る 連載 13

権藤との面会

流人は賀臼に向かって、こう言った。

「敵のねらいは核融合反応。そう断定してほぼ間違いはないだろう。そして、場所は、このフューチャーズ・テクノロジーズ社だ」

大吾や我門が暗殺されたいま、流人と賀臼ふたりで作戦を練らねばならない。

支援者たちは、賀臼たちの隠れ家は提供してくれるが、この戦いには参加できないようだ。

「しかし、父さん。核融合実現のめどは立っているのだろうか」

「おそらく、そうだろう。もちろん、安全性を考えたら、技術としては未熟だが、敵のねらいは、核融合反応を実現することだ。あとは、マイナス質量を、全世界にばらまく。これしか頭にない」

賀臼は、田野倉やソロモンはどこまで知っているのだろうかと考えた。自分たちの計画が成功すれば、この宇宙は滅びることになる。おそらく、ルシファーにだまされているのだ。

賀臼は、何とかCIA日本支部の権藤司令官と連絡をとろうとしていた。イーハトーブの基地は、コンピュータや情報通信機器が整備されており、必要な情報をいつでも入手できるが、フューチャーズ・テクノロジーズ社の動向を探ることは難しい。同研究所が実験炉を建設中という情報が伝わってきている。流人は、おそらく、それが、最終実験用の装置だろうと言っている。戦いの日がいつになるか、それを探らなければならない。

アメリカ大使館に連絡して、権藤に連絡をとりたいと聞いたが、そんな人間は知らないとあっさり拒否された。権藤は、賀臼本家が襲撃を受けたことは知っているはずだ。そして、ニュースでは、全員が死亡したと伝えられている。

賀臼は、危険を承知で東京に向かうことにした。支援者は、自分たちに任せて欲しいといっているが、自分が直接権藤に会う必要がある。おそらく透明信教の連中は、賀臼が死んだと思っているはずだ。さほど警戒していないだろう。

賀臼は、アメリカ大使館の別館に向かった。受付で、権藤に面会に来たと言ったが、そんな人間はいないと突っ返された。賀臼は、「賀臼平が会いたいと言っていると伝えてくれ。」と受付に頼んだが、まったく相手にされない。しかし、権藤ならば、必ず接触してくるはずだ。賀臼は、そう確信していた。

賀臼は、大使館わきの歩道をゆっくり歩いていた。すると、黒塗りの乗用車

が近づいてきた。すると、車のドアが開いた。権藤だった。賀臼は、車にすべりこんだ。

「これは、驚いた。私は幽霊でも見ているのでしょうか？」

「権藤さん、お久しぶりです」

「賀臼さん。あまり、感心しない接触の仕方ですな」

「迷惑とは思いましたが、これしか方法が浮かばなかったのです」

「不審な電話や来訪者の情報は逐一寄せられます。以前に、私に連絡をとりたいという電話をされたのは、賀臼さんですね」

「その通りです」

「実は、賀臼家のみなさんは全員がなくなると聞いていましたので、いたずら電話と思っていました」

「そうですか。残念ながら大吾は死にましたが、私の父母と貴子を生きています。それと、私と貴子の間に双子が生まれました」

権藤は驚いていた。

「そうですか。大吾さんは亡くなりましたか」

ちょっぴり、悲しそうな表情を見せた。

賀臼は、権藤に接触した理由を説明した。

「実は、権藤さんにお会いしたかったのは、フューチャーズ・テクノロジーズ社の動向が知りたかったからです。彼らの決行日を知りたい。その情報をいただけませんか？」

権藤は考えていた。賀臼たちは何をしようとしているのかを。

「フューチャーズ・テクノロジーズ社に関しては、われわれも常にマークしています。最近も、田野倉とソロモンがそろって同社を訪れています」

「権藤さん。いえ、CIAは、かれらの目的を知っているのですか？」

「ある程度は聞いております。レーザー核融合とは表向きで、彼らが欲しいのは、マイナス質量を大量に作り出す装置のようですね。フリーメーソンのメンバーたちが、のどから手が出るほど欲しい兵器ですよ」

賀臼は、納得した。フリーメーソンの会員には、軍需産業を営んでいるものたちが居る。マイナス質量は画期的な武器になる。一瞬にして、相手を消すことができるからだ。

「彼らは、いろいろな国に兵器を売ってきました。テロ支援国にも平気で、小型核爆弾を密輸しています。しかし、核兵器は、彼らにとって、あまり好ましい兵器ではないのです。核を使うと、かなりの範囲が汚染されてしまいます。下手をすると、地球全体が汚染されかねない。それくらい、彼らは闇市場で核

爆弾を売りさばいていますから。ところが、マイナス質量は別です。それを使っても大気はまったく汚れません。さらに、好都合なことに、兵器を使った痕跡すら残らないのです。これ以上、すぐれた武器はありません」

賀臼は、思った。マイナス質量を利用すれば、世界中に散らばっている核を、消すこともできる。

そして、ある事に気づいた。確か、北朝鮮もCIAも、それを狙っていたのではなかったか。とすれば、フューチャーズ・テクノロジー社の技術は、CIAにとっても魅力的ということになる。しかし、ここは、権藤を利用するしかない。

「とすると、もうすぐ、そのマイナス質量を発生する兵器が開発されると思われるのですね」

「おそらく、そうだろうと睨んでいます」

「権藤さんは、どうされるお積りですか」

「逆にお聞きしたい。賀臼さんは、どうするお積りですか」

「何とか、それを阻止したいと考えています」

権藤は、悩んでいたが、しばらくしてこう言った。

「とすれば、協力できません」

賀臼は察した。やはりCIAも開発される兵器を狙っているのだ。これでは、協力は無理だろう。残念だが、あきらめざるを得ない。

「ところで、権藤さんは清洲大吾さんとはどんな関係なのですか」

「ただの大学時代の同期です。共にアメリカの大学に留学しました」

賀臼は驚いた。そんな関係だったのか。

「大吾は、僕の大親友でした。彼の死は残念です」

権藤は、こう言った。

流人の予測

賀臼がCIAの協力が得られなかったと言っても、流人は驚かなかった。もともと期待していなかったようだ。

「彼らも、兵器に興味がある。その開発を阻止しようとする動きには、当然のことながら、同調できないだろう」

「とすると、自分達だけで、決行日を探る必要があるよね。フューチャーズ・テクノロジー社の動向が逐一把握できていないと、それは無理なような気がするな」

「それが、そうでもない」

「えっ、父さんにいい考えがあるの？」

「いいか、平。前に言った話を覚えているかい。ルシファーが2010年を選んだのには、それなりの理由があった。それは、ブラックホールがマイナス質量を宇宙空間に放出するからだ」

「そういえば、そうだったね」

「しかし、そのマイナス質量をどうやって地球まで運ぶんだ」

「そうか、そこまでは考えてもみなかった」

「ブラックホールは、何百光年も離れている。マイナス質量が、地球に届くまでには、光速で百年以上かかる。それに、そんなに時間がかかるのなら、途中でプラス質量と反応して消えてしまうだろう」

賀臼は納得した。確かに、ブラックホールから放出されるマイナス質量が地球まで届くというのは、考えにくい。

「父さんは、何か気がついたのかい」

「ああ、多分、これだろうというのを見つけた。いいか、太陽のエネルギーは何だと思う」

「確か、核融合反応だ」

「その通り。そして、ある文献を調べていたら、面白いことが分かった。太陽の黒点活動がピークに達するのが2010年なんだ」

「それは、ブラックホールの活動と連動しているということ？」

「おそらく、そうだろう。面白いことに、その前の太陽黒点活動のピークは約90年前になる」

「そうか」

「実は、太陽系は銀河のまわりを回っている。そして、銀河の中心には、太陽の100万倍のエネルギーを持ったブラックホールが活動していることが知られている。このブラックホールからのマイナス質量の放出は、銀河全体のゆらぎに関係していると思われる。そして、太陽も、当然その影響を受ける」

「それは、太陽の黒点活動はマイナス質量の放出と関係しているということ？」

「おそらく、そうだろう。マイナス質量の放出で、プラス質量が消える。それは、一瞬、黒い点として見えるが、実は、巨大なエネルギーを生じている」
太陽ならば、地球に近い。光速ならば、わずかな時間で届く距離だ。

「実は、北朝鮮がマイナス質量の実験に失敗したと聞いたとき、彼らがどこから、マイナス質量を手に入れたかが、謎だった。ところが、ある情報によると、北朝鮮は、中国から秘密裏に宇宙ロケットを購入していたようなのだ。そして、実験前には、無人口ケットを宇宙に数回打ち上げている」

「それは、宇宙でマイナス質量を採取していたということ？」

「おろらくそうだろう。というのも、このロケットには液体ヘリウムが積まれていたらしい。おそらく、超伝導マグネットも一緒に積んでいただろう」

賀臼は、北朝鮮はすごいことを考えると思った。

「しかし、それでは、あまりにも効率が悪い。それに、フューチャーズ・テクノロジー社がロケットを打ち上げるという計画はないし、どの国も、大量のロケットを打ち上げたという記録もない。そこで、考えた。おそらく、マイナス質量が地球にふりそそぐのではないかと」

「地球にマイナス質量がふりそそぐ？」

「ああ、おそらくソロモンは、その日に実験を決行するんだらうと考えている」

「その日はいつなの。それが分かれば、僕らも用意ができるね」

「残念ながら、まだ決行日は特定できていない。いまから、よく調べてみる」

賀臼は、マイナス質量が地球まで届くという原理はよく分からなかった。しかし、もし、そうならば、フューチャーズ・テクノロジー社の実験も進んでしまうかもしれない。

覚悟

「貴子、いよいよ戦いの日が近づいている。父さんの話によると、何か天体現象と関連しているらしい。その日が分かったら、光と明を連れて、フューチャーズ・テクノロジー社に向かう」

「私も一緒に行く」

「いや、今度のことは危険すぎる。お前は、ここに残って欲しい」

「何を言っているの、あなたが失敗したら、人類は滅びるのよ。私もついていくわ」

賀臼は、いまだに、ルシファーがすべてを消そうとしているということを100%信じていなかった。もしかしたら、究極の兵器を生み出そうとしているだけかもしれない。フリーメイソンの会員も、自分たちが滅びるための協力をしているとは思っていないだろう。

「それにしても、光と明には申し訳ない。彼らには、こんな重荷を背負わせるべきではないと思う。でも、彼らにしか、人類を救うことができないことも確かだ」

賀臼は悟っていた。自分は補助的な役目しかできない。それほど双子の能力はすぐれていた。

ヴァン・アレン帯

流人は、ずっとコンピュータールームにたてこもっていた。いろいろなサイトに入り込み、天体現象について調べているのだ。もうすぐ、実験日を特定できるという。賀臼は、父が居てくれて本当に助かったと思った。自分ひとりでは、まったく見当がつかない。

「平、どうやら、いつかということが分かった気がする」
コンピュータールームから出てきた父は、賀臼にそういった。

「おそらく七月七日だ」
七夕じゃないか。織姫と彦星が会おう日に何があるのだろう。賀臼はそう思った。

「もしかしたら一日くらいの誤差があるかもしれない。しかし、かなりの確率で、この日だと思う」

「どうやって分かったの？」

「うん、ヴァン・アレン帯を調べていて分かった。地球を取り巻く放射能の帯だよ。実は、太陽から地球に向かって放射能が流れてくる。その原因は、よく分からなかったが、マイナス質量の流れと考えると納得できる」

「それは、どういうこと」

「ああ、いつも太陽からは、マイナス質量が放出されている。とは言っても、その量は、ごくわずかだ。もちろん、わずかというのは、宇宙レベルの話で、われわれのスケールでは巨大な量といえるかもしれない」

「まあ、宇宙から見れば、地球もちっぽけな星ということになるからね」

賀臼は、かつて太陽表面に観察されるフレークに地球を重ねたときに、それが黒い小さな点しかなかったことを思い出した。そういえば、銀河の中心になるブラックホールのエネルギーは太陽の100万倍と言っていた。想像を絶する巨大さなのである。しかし、このような宇宙を創造したサムシング・グレイトと戦うことなどできるのだろうか。流人は続けた。

「太陽から放出されたマイナス質量は、宇宙空間に存在するプラス質量と反応していく。真空といっても、宇宙にはわずかにプラス質量が点在している。マイナス質量は、これと反応してしだいに消えていくが、そのエネルギーは電磁波となる。実は、このエネルギーによって、宇宙空間にある物質は放射化される。これがヴァン・アレン帯と考えられる」

「それは、前から知られていたの？」

「いや、放射能の帯がどうしてできるかは、誰も分からなかった。しかし、マイナス質量があるとすれば、説明ができる」

しかし、太陽からマイナス質量が放出されているなど、誰も思いもよらなかったであろう。

「ところが、ヴァン・アレン帯にまれに穴があくことがある。しかし、どうして放射能帯に、それがあたかも消えたようなスポットができるかが謎であったようなんだ。しかし、マイナス質量を考えれば説明できる」

「それはどういうこと？」

「マイナス質量が大量に放出されると面白いことが起こる。マイナス質量はプラス質量と反応して、エネルギーを放出する。そのエネルギーが、そのまわりの物質を放射化する。それがヴァン・アレン帯だ。ところが、マイナス質量が多ければ、そのまわりの放射能さえ消してしまう。それが、ヴァン・アレン帯ホールだ」

「ということは、ホールができる時が、決行日ということになるね」

「その通り。それが七月七日と予測されている」

「でも父さん。たとえば、マイナス質量が降り注ぐとしても、その場所がフューチャーズ・テクノロジーズ社の実験棟とは限らないんじゃないの」

「確かに、そこは難しいところだ。私にも分からない。ただ、フューチャーズ・テクノロジーズ社が、実験棟の横に、大型の超伝導マグネットを建設しているのが気になるんだ。もしかしたら、それがマイナス質量の誘導をしているのかもしれない」

「そう言えば、マイナス質量は強磁場の中では、安定に存在できるんだよね。それが関係しているのかな」

「正直、そこまでは分からない」

「しかし、父さんの考えにかけるしかないね。よし、七月六日に、千葉に移動しよう。支援者のひとにお願いして、キャンピングカーを用意してもらおう」

フューチャーズ・テクノロジーズ社 七月五日

チャンドは、最後の点検に入っていた。笹山もチャンドを手伝っている。

「チャンドさん。本当に大丈夫だろうか。もし、臨界に達したら、実験炉は大暴走をするんじゃないかな」

「笹山さんは心配症だね。たとえ、そうなっても、あれだけ厚いコンクリートで覆われているんだ。大丈夫ですよ。それに、その周りに超伝導マグネットで強い磁場のバリアも張ってある」

「しかし、核融合反応というのは、人類が見たことがないものですよ。何が起こるか分からない。もう少し慎重に進めた方がよいのではないかな」

「笹山さんは、僕の補助役に回されたから、面白くないんじゃないですか」

笹山は、むっとした。確かに、それもある。自分はチャンドよりも年上である。しかし、主任研究員のキムは、チャンドの指示に従うようにと命じた。

「笹山さん。キムさんから七月七日という日がもう設定されているんです。その日は、田野倉社長やソロモン会長も来るといじゃないですか。失敗は許されませんよ」

笹山は思った。確かに、今回の実験が成功すれば、世紀的な成果となる。しかし、失敗したら、すべてが台無しになる。キムは危険なかけをしている。そこに、キムが入ってきた。

「明後日の七日の朝に田野倉さんとソロモンさんが、そろってやってくる。実験は、七日の午後九時に決行することになった。ふたりともよろしく頼みます」

ふと、笹山は、なぜ夜に実験をするのだろうかと思った。いまや、実験補助員は二〇名ほどに増えている。すべてソロモンが準備してくれた。多くは、外国人であったが、日本語は堪能であった。

核融合実験は、すべて自動化されている。いま、チャンドと笹山は、最後のプログラムチェックに入っていた。レーザー装置のスイッチは、ソロモンが押すことになっていた。補助員たちは、各種配線の結線と、そのチェックを行っている。

賀臼ファミリー

賀臼は、キャンピングカーに乗って、福島県いわき市に向かっていた。運転は流人が行っている。賀臼は、ついに運転免許をとる機会がなかった。理恵も同行したが、説得してイーハトーブの基地に残してきた。

賀臼の横には、貴子が座っている。後ろの席には双子の光と明が眠っている。もう五歳になった。いまは七月五日の午後十時を回っている。予定では、もう

すぐ到着する予定だ。流人は、フューチャーズ・テクノロジーズ社の敷地から百メートルほど離れた林の中の空き地に停車した。流人、貴子、賀臼の三人は、交替で、望遠鏡を使って中の様子を見張ることにしていた。

しかしフューチャーズ・テクノロジーズ社の警備は、驚くほど手薄である。本当に、ここで、人類を滅ぼす計画が進められるのかと不安になるくらいだ。それだけ自信があるということかもしれないが。

双子はぐっすりと眠っている。来るべき大戦に備えているのかもしれない。三人は、緊張した面持ちで、フューチャーズ・テクノロジーズ社を見張っていたが、六日は何もおきなかった。夕方には、職員が自家用車で帰宅を始めた。

ところが、七日になって動きが慌しくなった。早朝の午前五時に、職員が会社してきたのだ。中で、職員があわただしく動き回っている。実験棟への出入りも激しくなっている。貴子が突然声を出した。

「田野倉とソロモンがやってきたわ」

賀臼と流人は確信した。今日が決行日に違いない。光と明も起きている。十分睡眠をとった様子だ。ただし、賀臼には、どう対処すべきかがいまだに分かっていないのだ。流人は、マイナス質量が天から降ってくる。その時に、双子にマイナス質量をつくらせるという作戦だ。流人との訓練で、双子は五〇メートル先の物質にマイナス質量を浴びせる術をマスターしていた。

フューチャーズ・テクノロジーズ社 七月七日

笹山とチャンドは、最終点検に入っていた。いよいよ本番である。もう田野倉とソロモンも研究所に入っている。午後二時に、キムは田野倉とソロモンを伴って、実験棟にやってきた。現在、研究補助員は、大型超伝導マグネットに液体ヘリウムの注入を行っている。敷地内には、液体ヘリウムを積んだトレーラーが十台ほど並んでいた。

ソロモンは、忙しそうに国際通信のできる携帯電話で話している。笹山は、ソロモンがいったい誰と通信しているのだろうと思った。今回の実験は純粋にソロモンのサポートで行われていると思ったが、そのバッグに誰がいるのだろうか。

午後八時に、ソロモンに電話がかかってきた。ソロモンは、キムにゴーサインを出した。「チャンドさん、笹山さん。予定通りだ。午後九時に点火できるように準備をしてくれ」

午後八時半になって、外にいた研究員たちが騒ぎ出した。なんだろう。笹山

は外をみて驚いた。オーロラだ。巨大なオーロラが空に待っている。日本で、こんな景色を見られるとは驚きだ。しかもその色は、実に鮮やかである。驚いたことに、そのオーロラは地上に近づきつつある。

笹山は、ふといやな予感がした。実は、この計画には、前から不審に思っていたことが多い。レーザー核融合だけが目的なら、なぜ、このような秘密裏に計画を進めてきたのだろうか。そして、ソロモンの不審な電話。この天体現象が何か関係しているのだろうか。

すでに、点火のカウントダウンが始まっている。制御盤の前には、キムに伴われて、田野倉と笹山が陣取っている。チャンドが研究員に確認した。

「超伝導マグネットの出力は？」

「はい、大丈夫です。両マグネットとも 20 テスラに励磁されています」

「それでは、ソロモン会長お願いします」

笹山は、かなり不安になってきた。このままでいいのだろうか。しかし、ソロモンは、レーザー点火装置を押した。高出力のレーザーが、重水素と三重水素の閉じ込められた球型燃料に照射された。データは、順調に推移していった。予定通り圧力が上がっています。みんなが緊張していた。

研究員のひとりが興奮した顔で報告した。

「臨界に達しました」

ソロモンと田野倉はがっちり握手を交わした。キムも喜んでいる。

「笹山さん、チャンドさん。気を抜かずに、これからも、しっかりデータをとってくれ。世界初の核融合実験に成功したんだ。これで世の中は大騒ぎになるぞ」

すると、ソロモンはあっさりと言った。

「この実験の成功は、外部には発表しない」

「何ですって！」

キムは驚いた。

「これは、私がすべての資金を出して行った研究だ。その成果をどうするかという権利は、すべてわたしにある」

笹山もチャンドも驚いている。それでは、意味がない。笹山は、自分が抱いた不吉な予感のひとつが当たったことを悟った。キムは

「それでは意味がないでしょう。何のための実験だったのですか。これは、人類がはじめて手にする核融合なんだ」

すると、ソロモンは

「核融合は、実験の第一歩に過ぎません。これからが本番です」

キムは、何を言っているんだという顔をした。

「あなたがたはいったい...」

その時、研究補助員が三人を囲んだ。そして、あっという間に、両手をはがっさりつかまれてしまった。ソロモンは言い放った。

「もう、この三人に用はない。はやく始末しろ」

笹山は、自分の耳を疑った。始末？いったいどうことなんだ。

「あなた方三人は、実験の事故で死んだことになる」

すると、ソロモンは、研究補助員に指示を出した。三人は、制御棟から連れ出された。笹山は、自分の不安が的中したことを悟った。

三人がいなくなると、ソロモンの命令で、実験棟のドームが空けられた。すると、そこには見事なオーロラが舞っていた。ドームを空けると同時に、オーロラは超伝導マグネットの中に吸い込まれるように消えていった。ソロモンは満足そうに言った。

「マイナス質量が吸い込まれている」

「それでは、いまから、マイナス質量の増殖実験を行う」

研究補助員は、順序良く作業を進めている。

天は虚に宿る 最終話

賀臼ファミリー2

賀臼も貴子も流人も驚いていた。夕方まで、気づかなかったが。空一面が虹色に覆われていた。流人は

「これはオーロラだ」

「でも、オーロラって、極地でしか見られない現象でしょ」

しかも、そのオーロラはとてつもなく巨大であり、手が届くような距離まで近づいている。

流人は言った。

「これは、太陽から送られてきたマイナス質量がプラス質量と反応しているんだ。このとき、エネルギーが電磁波として発生する。それが、オーロラとして見えるんだろう」

「それは、いよいよマイナス質量が地球まで届いたということ」

「まだだね。いまはまだ、マイナス質量がすべてプラス質量と反応している状態だ。だから、エネルギーが放出されているだけだね」

その時、研究所から音が聞こえてきた。

「どうやらレーザー装置を点火したようだ」

流人は言った。

いよいよ実験が始まったらしい。流人は

「マイナス質量は、研究所に舞い降りてくるに違いない。その時が、光と明の出番だ。思いっきりふたりで虚数波を送るんだ。いいか」

光と明はうなずいている。

「目標は、あの実験棟のドームだ。おそらく、あの中に超伝導マグネットが収納されている。ふたりは、マイナス質量が、取り込まれる前に虚数波を送るんだ。そうすれば、マイナス質量の軌道は曲げられて、建物にぶつかる。そうすれば、実験は失敗する」

賀臼も緊張した。

「しかし、虚数波を飛ばすには、ここからでは、距離がありすぎる。平、いいか、二人を連れて研究所内に入るぞ」

と流人は言った。

その時、実験棟から、研究員が三人外に連れ出されてきた。暗くてよく見えない。三人は、建物の影に連れて行かれた。その時、銃声が三発連続して聞こ

えた。

「いったい今の音はなんだっただろう」

賀臼は、いやな気がした。流人はそれに答えず

「それでは出かけよう」

と三人を促した。貴子がエンジンをかけて車で待機することになった。その顔は、緊張で蒼白だ。

四人が車の外に出たところで、突然、後ろから近づいた人間に拳銃をつきつけられた。

「賀臼さん、こちらを向かないでいただきたい。あなたの能力のことは知っています。それを使われたのではたまらない」

声は、権藤だった。なぜ、権藤がここに。

「申し訳ありませんが、あなた方に実験のじゃまをして欲しくないのです。手荒なことはしたくない。もう少し実験を見守っていただけませんか」

賀臼はあせった。

「権藤さん。いま、あなたは何をしようとしているか分かっているのですか！人類を滅ぼす計画に加担しているのですよ」

権藤は、笑った。

「たしかに、大吾もそんなことを言っていましたな。世迷言でしょう。フリーメーソンは、究極の兵器を完成したいだけですよ」

「それに、三人の研究者が殺された可能性がある」

権藤は笑っている。

「射殺されたのは、フリーメーソンの職員です。三人はわれわれが救出しました」

賀臼は、それを聞いてほっとした。彼らは、ソロモンや田野倉に利用されただけで、罪はない。

その時、オーロラが地上まで降りてきた。そして、天空では、オーロラを中心にうずを巻きながら穴が開きだした。それは天空から静かに近寄ってきた。流人は焦っている。

「いよいよマイナス質量が降りてきた」

マイナス質量が大量に運ばれてくると、プラス質量はすべて反応し、オーロラになるが、残ったマイナス質量が、そのまま地上まで進んでくるのだ。マイナス質量がある場所では、電磁波が発生しないので、ちょうどオーロラの穴のように見える。

賀臼は叫んだ。

「いまなら、間に合う。行かせて欲しい」

権藤は、だまってかぶりを振った。

混沌

ソロモンは、その光景を感動してみていた。まさに、空から天使が舞い降りてきたようだ。その天使は、巨万の富を生み出してくれるはずである。ソロモンは指示した。

「ドームを空ける」

ドームの中では、20 テスラという巨大磁場を発生する超伝導マグネットが口をあけて待っていた。ドームがゆっくり開いた。そして、直径 10 メートルの巨大な磁石の中に、オーロラの影が吸い込まれていく。

「これがマイナス質量か」

天使の舞は五分ほど続いた。そして、再び、オーロラの穴は消えはじめた。しだいにオーロラが、その穴を埋めていく。天使が上空に戻っていくように見えた。

田野倉も喜んでいる。

「ソロモンさん、やりましたね。大量のマイナス質量を手に入れました」

ソロモンは戒めた。

「田野倉さん、喜ぶのはまだはやい。これからが本番だ」

絶望

この様子を賀臼と流人は絶望的な目で眺めていた。流人の計画では、マイナス質量が超伝導マグネットにとりこまれる前に阻止する予定だった。マイナス質量の流れを曲げさえすれば、どこかにぶつかり、一瞬のうちにプラス質量と反応して消えてしまう。ところが、この作戦は阻止された。

大量のマイナス質量が、いまは、敵の手にある。しかし、賀臼はまだあきらめていなかった。マイナス質量の増殖を阻止すれば良いのだ。権藤は、拳銃を賀臼の頭に押し付けたままである。流人や貴子もつかまっている。

権藤たちは、安全と見ているのか、双子は拘束していない。賀臼は、ふたりに、どうにか指示を出せないだろうかと考えていた。しかし、下手なことをすれば、みな射殺されるかもしれない。

増殖

ソロモンは、研究員に命じた。

「磁気シールドをはずしてくれ」

すると、ふたつの大型超伝導マグネットの間に挿入されていた厚い板がゆっくりと移動した。この板も超伝導材料でできている。この超伝導のシールド板がふたつの巨大な超伝導マグネットの磁場を完全に遮蔽していたのだ。

すると、ふたつの超伝導マグネットが震えだした。いままで独立していた磁場が互いに結合したのだ。この時、実験棟中にオーロラが満ちた。マイナス質量が保存用マグネットから、核融合マグネットへと磁場に沿って流れていったのだ。この時、一部のマイナス質量が空気中のプラス質量と反応してオーロラが生成したのだ。

はじめ、オーロラはしだいに増大していったが、あるところで、動きがなくなった。ソロモンは

「定常状態に入った」

と満足したように言った。

マイナス質量は、移動する際に量が減ってしまう。ところが、核融合マグネットに入ると、そのエネルギーを得て増殖される。そして、この減る量と生成する量がつりあった状態が定常状態なのだ。

田野倉は

「いよいよ増殖ですね」

「ああ、この実験が成功すれば、われわれは、究極の兵器を手に入れることになる」

すでに、小型超伝導マグネットを多数購入してある。これは、最近、日本の研究者が発明したもので、手のひら大で、20 テスラの磁場を発生できる代物だ。その中にマイナス質量を閉じ込める。マイナス質量は少量でも、大変な威力を発揮する。どんな機器でも、一瞬のうちに消すことができる。もちろん、人間に対して使えば、一瞬のうちに命を奪うこともできる。しかも、証拠が残らない。

ソロモンは、研究員のひとりに命じた。

「核融合の出力を上げてくれ」

研究員は、命じられたとおり、出力を上げた。これで、マイナス質量は増殖される。そして、あるところで再び定常状態に達するはずである。

超伝導マグネットのまわりのオーロラが揺れ動いた。そして、オーロラの穴の部分の体積が増えた。マイナス質量が増殖されたのだ。

「成功だ」

ソロモンは満足そうに言った。ソロモンは電話で連絡をとった。フリーメーソ

ン本部である。実験が成功したことを告げると、電話の向こうから、祝いの言葉が返ってきた。これで、つぎの総会で、自分はフリーメーソンの総長に選出されるはずである。これまでの努力が、ようやく報われる。フリーメーソンの総長の座にすわるということは、世界を征服したということに等しい。

その時、研究員があわてたような声を発した。

「超伝導マグネットの様子が変です」

みると、磁場モニターが振動している。それと連動するように、オーロラが揺れ動きだした。

「どうしたんだ」

「超伝導マグネットに少し負荷がかかりすぎたようです」

見ると、オーロラがさらに暴れだしている。二個のマグネットは、次第にゆれが強くなっていく。その時、オーロラの端が壁にふれた。実験棟の外壁は一瞬のうちになくなった。マイナス質量が触れたのだ。

すると、オーロラの揺れが弱まった。マイナス質量の量が減っていく。超伝導マグネットの揺れも収まったが、オーロラはどんどん収縮していく。

ソロモンはあわてた。このままでは、せっかく集めたマイナス質量が消えてしまう。

「核融合炉の出力を上げろ」

研究員に命じた。しかし、研究員は戸惑っている。本能が危険を察したのだ。すると、ソロモンは、研究員を横に押しやり、自分でハンドルを回した。そして、最高出力までいっきに上げた。すると、収縮に向かっていたオーロラが、再び増大しはじめた。

ソロモンは安心した。これで、マイナス質量を守ることができる。

しかし、その顔が驚愕に変わった。オーロラは、急激に増殖をはじめた。暴走しだしたのだ。すぐにオーロラは実験棟の壁にぶつかった。壁は一瞬のうちに消えた。オーロラの動きは止まったかにみえたが、すぐにオーロラは方向を変えると、制御室に向かってきた。

ソロモンは、顔に痛みを感じた。まわりで、きらきら輝く粒子がまわっている。その時、防御壁が消えてなくなった。研究員は、いっせいに逃げ出した。ソロモンもその場を離れた。見ると、田野倉が椅子から立ち上がる場所だった。ソロモンは叫び声を上げた。田野倉の頭がない。マイナス質量に食われたのだ。田野倉の体だけが動いている。しかし、それも一瞬の後に消えてしまった。

逃げようとして慌てたため、ソロモンはなにかにつまづいて転んだ。誰も、

ソロモンを助けようとしなさい。ソロモンは、自分の足がひざの先から消えるのを見た。そして、そのまま、すべての闇に包まれた。

オーロラは、複雑な動きをしながら、実験棟をどんどん侵食しだした。何かと反応するたびにオーロラは小さくなるが、つぎの瞬間には、前よりも増大した。ついに悪魔の連鎖反応が始まったのだ。

怪物

賀臼は、実験棟から、悲鳴を聞いたような気がした。実験棟から、オーロラの虹色の明かりが漏れている。マイナス質量が暴れているのだ。その時、研究員が数人走り出してきた。その後をオーロラが襲った。そして、実験棟そのものが一瞬のうちに消えてしまった。研究員も波に飲み込まれるように消えていった。まるで、巨大なアメーバのようだ。

権藤は驚いていた。

「いったい何が起きているんだ」

すでに、研究所内の建造物は、閃光を発しながらつぎつぎと消えていく。後には何も残らない。

「マイナス質量が増殖しだしたんだ。連鎖反応だよ」

「なんだあれはいったい」

その時、超伝導マグネット棟の土台が音をたてて崩れ去った。この時、マイナス質量を抱えたアメーバは自由を勝ち得た。

権藤は、賀臼の頭に押し付けていた拳銃を放すと、こう言った。

「なんで超伝導マグネットが壊れないんだ。磁場が消えれば、すべて解決するんじゃないのか」

流人は言った。

「超伝導マグネットを取り囲んでいる磁場が保護壁になって、マイナス質量と反応しないのだろう。まさに超伝導マグネットがアメーバの心臓になっているんだ」

「しかし、超伝導マグネットは電源が切れたら、それで終わりではないのか」

「あのマグネットは永久電流モードで動いている。つまり、半永久磁石のようになっているんだ。液体ヘリウムが切れるまでは、動き続ける」

「その液体ヘリウムは、どれくらい持つんだ？」

その時、権藤によって救助された笹山がやってきた。

「実は、クエンチしないように、液体ヘリウムはたっぷり注入されています。あと、三時間は持つでしょう」

その時、アメーバが賀臼たちの方に向かってきた。すべてのものが消えていく。

権藤は、思わず

「逃げろ」

と部下に叫んだ。

その時、光と明がアメーバに対峙した。流人がふたりに命じたのだ。そして、ふたりは、渾身の力を込めて、アメーバに虚数波を放った。すると、アメーバは、ボディブローを食らったように、一瞬ひるんだ。そして、反対方向に動きはじめた。権藤は、今見たことが信じられないようである。

「このふたりには、いったいどんな力があるんだ」

流人は、この様子を見て愕然としていた。

「平、私の考えが間違っていた。マイナス質量にマイナス質量を浴びせれば、プラスに変換できると思っていたが、どうやら、そうではないらしい」

賀臼は父の言っている意味が分かった。

マイナス質量を抱えたオーロラアメーバは、マイナス質量に反発しただけなのだ。そして、その斥力で、反対方向に動き出した。

権藤はこう言った。

「とは言っても、あのばけものの寿命もあと三時間足らずだ。それだけ我慢すれば沈静化するんじゃないのか」

アメーバは、すべてのものを飲み込みながら進んでいる。その進路にあるものは、一瞬のうちに消えてしまう。

流人は、考えていた。本当に三時間ですべてが終わるのだろうか。それならば、確かに、多大な被害は出るが、マイナス質量はやがて消えてしまう。何しろ、まわりのすべてのものがプラス質量なのだ。マイナス質量が生き残るすべはない。ルシファーの望みどおり、宇宙をすべてマイナス質量で満たすということは不可能である。

ここで、流人は、あることを思いついた。神はマイナス質量をきらっているわけではない。たまたま偶然誕生した、神と同じ意識体である人間が消えることを願っているのだ。とすれば、ルシファーの願いはひとつ、人類の滅亡だ。

流人は

「いままで、ルシファーの狙いは、宇宙をすべてマイナス質量に変えることだと思っていたが、その考えはまちがいかもしれない。ルシファーは、人類に甚大な被害が与えられれば、それでいいのだ」

つまり、それだけの被害を与える程度のマイナス質量をつくれればいいことになる。それが果たして三時間でできるだろうか。

流人はあることに気づいた。

「そうか。ルシファーの狙いは地球ではないかもしれない」

「父さん。それはどういうこと」

「今回の狙いは、日本を滅亡させることかもしれない。いっきに片をつける積りではないのかもしれないんだ。日本さえ滅ぼせれば、2100年には、全世界を滅ぼすことが容易になる」

日本だけが狙い？ 賀臼はとまどった。そんなことがあるのだろうか。

流人は、あわてたように賀臼に聞いた。

「おい、賀臼、この辺に原子力発電所はあるかい？」

「そうか、父さんは、あまり日本の地理には詳しくないんだよね。あるよ。福島には有名な原子力発電所が二基もある。福島第一発電所と福島第二発電所だよ。確か、ここからすくなはずだけど」

権藤が口をはさんだ。

「それがどうかしたのですか？」

「アメーバは原発に向かってはいるはずだ。そして、そこでさらに増殖する。そのエネルギーをすべてもらって。そして、日本全土を滅ぼす。それならば三時間でかたがつく」

理恵

理恵は、イーハトーブの基地で、固唾を呑んでテレビの実況中継を見守っていた。テレビでは、異常な竜巻が福島県で発生したと大騒ぎになっている。しかし、理恵は、それがマイナス質量であることを知っていた。異常竜巻は、オーロラの光を放ちながら、目的地に向かって進んでいた。

気象関係者はみな首をひねっていた。この竜巻は異常である。それが通った後は、すべてのものが消えてなくなる。テレビ局のアナウンサーは、その進路に居る住民はすぐに避難するように勧告している。福島県内は、パニックになっていた。逃げろといわれても、どこに逃げていいかわからないからだ。政府の特別対策委員会が招集されたが、誰も、それがマイナス質量などとは思っていない。

総理大臣は、自衛隊の出撃を命じた。空から、この竜巻を襲撃しようというのである。しかし、ミサイルを打ち込んでも、オーロラ色の竜巻は、まったく衰えを見せなかった。この様子は逐一テレビで放映されている。

理恵の気がかりは、賀臼たちの安否がまったく分からないことだった。もしかして、賀臼たちは失敗してしまったのだろうか。

C I A

賀臼は、権藤に言った。

「オーロラのアメーバが原発に到着する前に、われわれを原発まで運んでいただけませんか」

権藤は考えていたが、決心したようだ。

「本来は、日本政府の許可が必要ですが、緊急事態です。なんとかヘリを用意しましょう」

賀臼は、いまさら日本政府など関係ないのにと思った。これは、人類が減るかどうかの瀬戸際なのだ。

一〇分ほどして、ヘリの音が近づいてきた。

流人は心配していた。もう、あまり時間がない。流人の作戦は、アメーバよりも先に原発について、光と明の虚数波で、なんとかアメーバが原発に近づくのを阻止しようというものである。双子が一時間持ちこたえてくれれば、超伝導マグネットが停止する。そうすれば、マイナス質量も消えてしまう。

賀臼ら五人はヘリに乗り込んだ。

「すぐに原発に向かってください」

操縦士を見て、賀臼は驚いた。貴子を救出したときのパイロットだった。

「ジョンです。よろしく。事情は、権藤から聞いています。あなたが、奇跡を起こしてくれることを祈っています」

ジョンは、賀臼に向かって、親指をたてた。ヘリは原発に向かった。

流人は少しホッとしたようだ。

「これなら、何とか間に合いそうだ。急いで行ってください」

ジョンは

「ラジャー」

と応じた。

しばらく進むと、ヘリの眼下にアメーバが見えた。ちょうど、その後ろには、すべてのものが消えた痕跡が、あたかも巨大な道のように続いている。よく見ると、地面の数メートルほどが抉り取られている。ヘリは、アメーバを追い越した。するとジョンがあわてたように言った。

「自衛隊が警告を発しています。このまま進めば撃墜すると言っています」

賀臼は怒った。

「何を言っているんだ。ジョン、すぐに権藤さんに言って、自衛隊をどけるように伝えてください」

先方から、自衛隊の戦闘機が近づいてきた。あたかも、原発を守る。そんな格好だ。異常気象に乗じて、原発を攻撃しようとしているテロリストと勘違いしているようだ。

流人はあせっていた。後ろをみると、アメーバが近づいてくる。自衛隊機は、何度かミサイルを発射していたが、まったく勢いがおさまる様子がない。

賀臼もあせった。このままでは、間に合わない。権藤は何をやっているんだ。賀臼たちは、原発に近づけないまま、一〇分ほど旋回を余儀なくされていた。この時、ようやく自衛隊機が去っていった。

「日本政府の許可がおりたようです。急ぎましょう」

しかし、流人は悲鳴のような声を上げた。

「もう遅すぎる」

下を見ると、アメーバは原発まで、あと100メートルほどのところに迫っていた。いまから原発に降りても遅すぎる。

今回はルシファーの勝利のようだ。賀臼は、大吾や我門のことを思った。彼らの死は無駄だったのか。その時、あるアイデアがひらめいた。

「ジョン、あのアメーバの真上までヘリをやってくれ」

ジョンは賀臼の意図が分からないようだったが、その指示に従った。何もしなければ人類は滅びる。

流人は、賀臼に聞いた。

「平、何をしようとしているんだ」

「僕が、あのアメーバに突っ込む。父さん、光と明には、僕が降りる前に、虚数波を送るように言ってください」

光と明を抱いていた貴子が言った。

「あなた、そんなばかなことはやめて」

すると流人も聞いた。

「そんなことをしたら、平はどうなる」

平は、その答えは言わなかった。僕は、貴子とふたりの子供を守ると誓った。いまがその時だ。

「父さん、僕が超伝導マグネットをクエンチさせる」

流人は、賀臼の意図を理解した。賀臼は

「父さんはやく、急がないと間に合わない」

ヘリは、アメーバのすぐ上まで来ていた。

「光、明いまだ」

光と明はアメーバに向かって虚数波を送った。すると、オーロラの光が変形し

だした。マイナス質量が押しやられているのだ。ちょうどオーロラに穴が開いたようだ。その穴の先に超伝導マグネットが垣間見えた。アメーバの心臓だ。賀臼は貴子に向かって、笑顔を見せた。

「貴子、いままでありがとう。光と明を頼む」

そして、迷わずヘリから飛び降りた。

光と明は必死になって虚数波を送っている。おかげで、賀臼は無傷で降下できた。賀臼の目の前に超伝導マグネットが迫っている。賀臼は、渾身の力を振り絞って虚数波を送った。賀臼の落下速度が急に落ちた。

その衝撃で、超伝導マグネットが震えだした。賀臼は、ためらわず、さらに虚数波を送った。すると、超伝導マグネットから煙が噴き出しはじめた。液体ヘリウムが沸騰しているのだ。もう少しだ。さらに、賀臼は虚数波を送った。その時、超伝導マグネットの壁が破れるのが見えた。やった。超伝導マグネットがクエンチしたのだ。つぎの瞬間、賀臼をとてつもない衝撃が襲った。

光と明は力の限り虚数波を送った。父を救うためには、マイナス質量を遠ざけるしかない。もし、父の体がマイナス質量に触れれば、一瞬にして消えてしまう。

流人は祈っていた。平はいいところに気づいた。今となっては、これしかないだろう。アメーバの心臓である超伝導マグネットを壊すしかない。すると、超伝導マグネットから煙が噴出するのが見えた。もう少しだ。そう思った時、爆風がヘリを襲った。ジョンは必死になって上昇した。ヘリは一瞬、操縦不能になったが、ジョンは何とか立て直した。

「おい、オーロラが小さくなっていくぞ！」

流人は興奮して言った。やったのだ。平は、人類を救ったのだ。光と明は、母に抱かれてぐったりしている。すべてのエネルギーを吐き出したようだ。

ジョンは言った。

「また、奇跡をみせてもらいました。貴子さん、あなたのハズバンドは本当に東洋の魔術師だ」

ヘリは、フューチャーズ・テクノロジーズ社のあった場所に帰還して着陸した。そこは、巨大な空き地になっていた。あれだけの研究施設があったという痕跡はない。ヘリには、権藤が駆け寄ってきた。興奮している。

「やりましたね。人類は、助かりました」

ヘリの中では貴子が泣いている。貴子は、権藤を思いっきり殴った。

「このばか。あなたのおかげで平は死んだのよ」

権藤ははっとしたようだった。

再起

貴子は、東京にある賀臼の家に戻ってきた。流人と理恵も一緒である。光と明は、元気を回復していた。しかし、父を失った悲しみはぬぐえない。

日本政府からは、正式に賀臼家に対して詫び状が届いた。総理大臣は当然のごとく失脚した。しかし、国民には真実は告げられなかった。マイナス質量を抱いたオーロラアメーバは、異常気象として片づけられた。ソロモンと田野倉は、不幸にも、その犠牲となったと報じられた。

その他にも、この竜巻による死者は 6000 人に達していた。しかし、原子力発電所に到達する前に、なぜか竜巻は消えた。専門家は、もし、この異常竜巻が二基の原発を直撃していたら、日本は滅んでいただろうと推測した。

賀臼平と清洲大吾のテロリストの汚名は晴らされた。教祖を失い、ソロモンの後ろ盾を失ったことで、透明信教の悪行もすべて表に出ることになった。透明党議員だけでなく、与党のかなりの国会議員が失職することとなった。

理恵は、もとの大学に復帰することになった。しかし、いままでのような研究を続けるつもりはない。理恵も、ルシファーとの戦いを誓ったのだ。賀臼家と清洲家の遺伝のなぞを解く。そして、つぎの戦いに備えるのだ。流人は、東都大学の物理学科の教授となった。マイナス質量の研究を始めるためだ。2100 年には、再び、人類はルシファーと対峙しなければならない。

貴子はふたたび東都大学に通い出した。人類がルシファーと戦うためには、賢くならなければいけない。学問が大切であることを再認識したのだ。もちろん、賀臼家と清洲家の力も磨く必要がある。光と明は、もうすぐ小学校に上がる。二人は、清洲貴子の戸籍に入った。本来は、貴子は清洲家当主の清洲平に嫁いたのだが、戸籍上は、もとのままだった。

貴子は誓っていた。この子達の子孫に平の偉大さを語りつがせる。風化させてはならない。賀臼平は、その知恵と勇気で人類を救ったのだ。自分の体を犠牲にしてまで。

権藤の訪問

ある日、珍しい客が賀臼家を訪れた。権藤だった。

「私は、CIAをやめました。今回の一件で、すべてのことがむなしくなったのです。わたしは、世界平和のために戦っていると自負していました。それが間違いであったことが分かったのです。貴子さんから殴られたとき、目が覚めました。」

平の死を覚悟した時、貴子は思わず権藤を殴ってしまった。権藤がじゃまを

しなければ、平は死なずにすんだのだ。

「結局、わたしが所属していた組織も、自分たちのことしか考えていなかったことがよく分かりました」

権藤は一呼吸置いた。

「そんな組織でも利用価値はあります。実は、あの後、ジョンから言われたのですよ。賀臼さんは、東洋の魔術師だって」

貴子の横には、光と明が寄り添っていた。

「そして、CIAにかけあって、あの一帯を探索しました。もし、可能ならば遺体を見つけて遺族に戻りたい。そんな一心でした。ところが、遺体が見つからないのです」

貴子は、権藤がそんなことをしてくれてくれたのかと感動した。悪いのは、権藤ひとりではない。日本の国家権力の方こそ責められるべきである。

「大吾が言っていました。賀臼家の姫を守るために、清洲当主は不死身なのだ。貴子さんを救出した後、そのお礼にと清洲家の秘密をすべて教えてくれたのです。賀臼さんは、たとえ、気を失っていても、その能力を発揮するそうですね。そして、分かりました。大吾は正しかったのです」

流人と理恵が貴子の後ろに立っていた。権藤は言った。

「賀臼さんをお連れしました」

貴子は驚いた。そこには、賀臼が立っていた。しかし、賀臼の顔は焦点を失っている。

「実は、大吾の言葉を思い出して、あの一帯だけではなく、周辺の街にまで探索場所を広げたのです。賀臼さんは、爆破の瞬間、強烈な虚数波を自ら飛ばしたはずで、とすると、かなりの距離まで飛ばされたことになります。そして、ある噂を聞きました。猟師が空から降ってきた男を海で救助したというのです。CIAの調べで、その男が警察病院に保護されていることを知りました」

権藤は続けた。

「賀臼さんは、記憶喪失にかかっていた。でも、心配はいりません。医者の話では、この記憶喪失は一時的なもので、いずれ元に戻るそうです」

その時、光と明が貴子のもとを離れ、賀臼に抱きついた。賀臼は一瞬はっとしたようだった。そして、しっかりと、こう言った。

「ただいま」

貴子は、思わず賀臼にかけよっていた。そして、人類を救った英雄の胸に飛び込んだ。